

---

# もう一度、逢いたくて ~50年目の奇跡~

ありす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう一度、逢いたくて ～50年目の奇跡～

### 【Nコード】

N5400S

### 【作者名】

ありす

### 【あらすじ】

67歳になる律子は胃がんが発覚し胃を2/3切除した。手術は成功し退院まで後一ヶ月だった。

退屈しのぎに入った売店で一冊の音楽雑誌を眺めていた。

手に取るうとした時、偶然にも同じ雑誌を手にする少年タカと出会った。

タカとの出会いが律子のモノクロの過去に色をつけてゆく。

## 桜

律子は今日も 目覚められた事に感謝した。

綺麗に拭きあげられた窓に ひとひらの桜の花びらを見つけた。

ベッドの枠を掴みゆつくりと起き上がる。

花びらが落ちないように そっと窓を開けた。左手で窓の枠を掴み

少し身を乗り出した 危険だとは分かっていたが 律子はどうしてもそれが欲しかった

「おばあちゃん！何してるの！

おかあさん！早く来て！おばあちゃんが危ない！」

娘の美奈の慌てた声に母の佐紀子は慌てた

無機質な真つ白な廊下にスリッパの音がパタパタパタと響いた。

息を切らしながら慌てて病室に入った

佐紀子の目に飛び込んで来たのは

窓から半分、身を乗り出した母の姿だった。

「お母さん！何してるの！危ないじゃない！」

「あら、佐紀ちゃん 美奈ちゃん いらっしやい。いいお天気ね」

慌てる佐紀子に対して、律子は落ちついて笑顔で言った。

「佐紀ちゃん見てほら 此処に桜の花びらがくっついてるの。取ろうとしてたのよ」

「もうお母さんったらびっくりさせないでよね！桜なら病院の西館入口に沢山咲いてたわ。この病室からじゃ見えないわね ざんねん。」

お母さん 車椅子借りる？下に降りる？  
危ないから、もう窓閉めようよ」

「待って、花びら取りたいわ」

真剣な母の横顔に佐紀子は少しだけ驚いた

「お母さん、私が取るわよ。場所変わってよ」

「佐紀子、お母さん 自分で取るわ。体を支えてちょうだい」

「お母さん……」

律子は細くなった腕を伸ばし少し背伸びをしながら窓の反対側に付いた花びらに手を伸ばした

「取れたわよ！佐紀子！」  
はしゃぐ母を見ながら

「お母さん、ひとひらだけど 栞にしたらどう？なんだか嬉しそうだし！」

「そうね。 そうするわ。」

律子は 人差し指と親指で優しく持った花びらを左手の手の平に置きながら  
感慨深けに見つめていた。

## 少年

絵の得意な律子は佐紀子に持ってきて貰った絵手紙セットの中から筆を取り、慣れた手つきで絵を描きはじめた。小高い丘に描かれた大きな桜の木だった。

描き終わると小皿の水に浮かせ、大切に置いておいた。昨日の桜の花びらを優しくタオルで水気を切り、描いた絵の上にそつと乗せた。薄い白い紙を上重ね、ナースセンターから借りた分厚い電話帳の間にそれを入れた。

ひとひらの桜の押し花を作り、栞にしようとしていた。

一作業終えた律子はゆっくりとベッドから降りると点滴を付けたまま、一階下の売店へと向かった。

フリカケ、飴、そしていつもの本コーナーへと回った。

そこで一冊の音楽雑誌の前で止まった。

その前には少し背の高い高校生くらいの爽やかな少年がその雑誌を手を取って見ていた。

昼過ぎだから続々と売店に人がやってきた。

アイスや雑誌を買う若者やお菓子を選びに来る親子連れ。

不自由に松葉杖をつきながら 若い派手めな女性がその雑誌に手を伸ばした。次の瞬間すんなりと会計に持って行ってしまった。

律子は「あら、先に買われちゃった」

思わず口に出してしまった。

その声に少年は細い茶色の綺麗な髪をなびかせスツと振り返った。

「あの、この本買われます?」

「おかしいでしょ?おばあさんがこんな本って思うでしょ。でも残念だわ。今月はRicken backer特集だったから。」

「おばあさん、あ おばさん…」

「いいのよ!だっておばあさんだもの。あなた学生さんでしょ?私にもあなたと同じくらいの孫がいるもの。おばあさんでいいわよ」

「いや、でも、  
そんな事より 詳しいですね!おばあさんみたいな年の人が、、、  
、あつごめんなさい。」

あの俺、今月使いすぎちゃって雑誌買うお金足りなくて、立ち読みしてただけです えへ」

少年は照れながらそう言った。





## 小さな約束

「それよりあなたはビートルズが好きなの？」

「はい！軽音部でビートルズのカバーやってるんです！ビートルズと言えばRickens backerのギターですよね！」

「カバーを？そうなの！」 律子の声も弾んだ。

「君は見たところ健康そうだけどお見舞い？」

「はい じいちゃんが入院してます。

じいちゃん この時間いつも点滴と検査だからこの時間ウロウロしてます。まだ二ヶ月くらい入院かもしれないです。じいちゃん我がままだから」 少年は初対面なはずの律子にも明るくハキハキと話した。

「そう 大変ね。

なら提案があるんだけど。」

少年はキョトンとした。

「あなたさえよければ この本一緒に買わない？私もほしいけど君が先に手にしてた、  
だけど君はお小遣いが足りない、  
よければ明日からこの時間 この本を一緒に見ない？」

あー おばあさんとは嫌よね。ごめんなさい。  
少し話し相手がほしくて つい、っ、っ、」

「いいですよ！ナイスアイデアですね！」

「ありがとうございます。そしたらこうしましょう  
今日はあなたが持って帰ってちょうだい。明日三階の中テラスの  
庭で待ってるわ。今日と同じくらいの時間でね。本を二人で見まし  
よう。どう？」

私が退院する時に 君にその本は渡すわ。  
未来ある若者に。ね！」

二人は名前を聞く事のないまま小さな約束を交わした。

少年は大事そうに本を抱え祖父のいる病室に戻って行った。

## 祖父と孫

少年は祖父の病室に戻ってベッド脇のパイプ椅子に座り、さっきの本をワクワクした気持ちで読み始めた。

その雑誌は月刊の音楽雑誌だった。全国のライブハウスや楽器店、スタジオ情報、メンバー募集等、音楽好きなら誰もが知る有名な雑誌だった。

今月号はRickenbackerの楽器特集でTHE BEATLESと有名な世界のギタリスト特集でもあった。

30分くらい経った頃 祖父が戻って来た。

「タカヒロ 何読んでるんだ、」

また くだらねえもの読みやがって。

勉強してるのかお前は？」

いつもの言い草と気にも止めないタカヒロ

「じいちゃん これ見てくれよ！今月のRickenbacker特集！カッコイイなー！」

「何がリッケンバッカーだ、、 おい 見せてみる。」

小さな子供の様にタカヒロから雑誌を取り上げた

「俺のGIBSON、59には敵わねえよ、、」

ぶつきらぼうに答える祖父の本心はタカヒロだけは家族の誰よりも理解していた。

「…じいちゃん 退院したらもう一回弾きなよ。」

「うるせえよ。俺はもう音楽は辞めたんだ。くだらねえ。」

祖父はベッドに腰をかけ少しふて腐れたようにスリッパを脱ぎ散らかすとボタンと寝転がった。

模様のない真っ白な天井を見ながらボソツと呟く。

「何かを手に入れるには何かが犠牲になり

、俺の前から消えちまう。」

そう言うと、自分の右手を枕にしタカヒロに背を向けた。

広い背中が

小さく見えた瞬間だった。

「タカヒロ 今日のもういい 帰れ。」 少しの沈黙の後

祖父は小さな声でタカヒロに言う

「…ありがとな」

タカヒロは祖父の脱ぎ散らかしたスリッパをきちんと揃えると

「じゃ また明日。」

「おう。」

視線を合わさない挨拶も  
タカヒロは慣れていた。

きちんと整えられ四角く折り畳まれている白いシーツが置かれた空  
きベッドが三つ

次々と退院していく四人部屋の窓際で男は一人静かに目を閉じてみ  
る

## 理解者

バタバタと走りながら病室に入って来るタカ。少し息を切らしながら  
「じいちゃん もう尿採った？ そろそろ検査の時間だよ」

「なんなんだ？ 挨拶もねえのか今日は。」

「あつ、おはよう！ じいちゃん」

「おはよう！ じゃねえだろ。もう昼前だ。どした？ もう学校が始まったのか？」

「あつ、昼か。いや学校はまだ休み。で尿は？ 採った？」

「おめえは女房か。わかってら。」

何を急かしやがる…おい、タカヒロ これ、ほら。」

祖父は財布から一万を出してタカヒロに渡した

「なんだよー じいちゃん。 お金なんていらんよ。直しなよ。」

「ばかやろう！ 子供は遠慮しちゃいけねえんだよ。昔から、そう言うだろ！

あのさ、おめえよ また文化祭にアレやんだろ？

スタジオ代とか結構いるだろうよ…

おめえには  
夢を大事にしてもらいてえんだ。

「じいちゃん。じゃ、遠慮なく貰うね。いつもありがと。  
俺 諦めないよ!」

「おう。 それはそうと晃弘はいつ頃、帰って来るって?」

「ああ、父さん達ね 6月の末には帰って来るって。」

「そうかー。我が息子ながら、てえしたもんだな。肌の色や目ん玉の色が違っても関係なく話せるんだからなー。 あいつは良く勉強したからな。」

タカヒロは俺に似たんだかなー?」

「アハハ、だねー。ぎつちよも同じだー!」

あつ やべ?今何時だっけ?  
じいちゃん早く検査行きなよ!」

タカヒロは祖父が大好きだった。

海外勤務の父親と それに同行した母には付いて行かずに祖父の傍に残った。 家族だから という義務ではなく、唯一の理解者である 祖父が好きだったからだ。

乱暴で、ぶっきらぼうな語り口の祖父は 時に人を近づけない。

がしかし 人情味溢れる人柄はまた 嫌われる事もなかった。

似すぎては反発しあい、そして互いに求めあってはくっつく。

磁石の様な二人だった。



## 友達

タカヒロは祖父を急かすと急いで昨日と同じ時間に三階の中テラスに向かった。

そこには

明るい陽射しに照らされた律子の姿があった。

タカヒロはハツとした。

『昨日はわからなかったけど、えらく綺麗な人だ。』

真っ白な髪の毛が大半だったが太陽に照らされ、それはまるで金髪のように映った。

色白の肌に彫りの深い顔立ちはまるで北欧の人のようだ。

「若い時はモテたんだろうな」左目の下のほくろが印象的だった

昨日の人？だよな？

マジマジと遠目から眺めていると律子が気付いた。

「あら！来てたの？気付かなくてごめんなさいね」

「じ、こんにちは！なんだか見惚れてしまいました！」

「あら、お上手だ事！なんにも出ないわよ！」

それはそうと 名前を聞いてなかったわよね。失礼しちゃったわ。

私は広沢 律子と言います。あなたは？」

「山村 隆宏です タカヒロって呼んで下さい！」

「タカヒロ君ね。じゃあ私は りっちゃんって呼んでくれる？」

タカヒロは戸惑った。『祖父と同じ年くらいの女性に向かって  
<ちゃん付け>なんて』

「あー 困っているんでしょ？」

シャイなのね。 学生時代にね 同じようにバンド仲間にりっちゃんって呼ばれてたのよ！ あー でも一人だけ絶対呼んでくれない人がいたの。

りっこ！なんて偉そうに呼ぶのよ。

それはそれで嬉しかったけどね・・・

あっ、だから りっちゃんでもいいからね」

「わかりましたー！りっちゃんですわね！ りっちゃん！ じゃ、俺はやっぱタカって呼んで下さい」

「タカ？…タカ…」 律子は遠い記憶の片隅の、そして完成しないままのパズルの最後の1ピースが思いがけない所から見つかったよ  
うな、

そんな思いが頭いっぱい渦巻いた。

一瞬、時間が止まったような律子の様子に「どうしました？タカっ  
て呼び捨てでいいですか！」

「わ、わかった。タカね。  
なんだかおかしいわね。タカと話しているとタイムスリップしたよ  
うに自分が年老いた おばあさんだって事を忘れるような、今そん  
な不思議な感覚だったわ。」

では遠慮なく？タカ！

タカ、あそこのベンチに座りましょうか。」

律子とタカは 端から見れば祖母と見舞いに来たその孫

しかし律子はタカとなんら変わりないその辺の友達同士、或いは同  
級生のような関係。そんな気持ちにさえなっていた

## 音の記憶

「りっちゃん…」タカヒロはぎこちなく小声で言った

「聞こえませーん！」律子は少し意地悪っぽく、そして少女のように横目でチラッと悪戯に笑いながらそう言った。

「やっぱり 私みたいなおばあさんには呼びにくいとっているのね？ええええ、耳も遠くなってきましたし？ 何れにしろ聞こえませーん！」

今度は少し冷たく拗ねたように言ってみる

タカヒロは少し緊張が解れたようにプッと笑い出す

「わかりましたー！！ じゃ、りっちゃん！」

あのさ、 さっき言ってたけどりっちゃんも若い時バンド組んでたの？」「

「若い時？ やっぱり今はかなりおばあさんと言いたいのね。」律子は再び拗ねてみた

「あつ、参ったなあ…」タカヒロは少し困ったように右手で頭をかいた

「冗談！冗談！　そうよ、もう何十年も前になるわよ、あつ　頭で逆算しないでよ？女性結構、年齢の話には敏感なのよ」  
茶目っ気たっぷりに話す律子にタカヒロは次第に心を開いて言った

「高校生の時なんだけど　私達の学校は進学校でねクラブとかも少なくてね。　ブラスバンドや今で言う軽音部もなかったのよね。毎日がつまらなくてね。

ある日、ポロつとそんな話をしたの。　音楽を楽しめるクラブがあればねーって。

そしたら隣の席の女子とその後ろの男子が盛り上がって　俺達で作ろうぜ！ってなった訳、」

タカヒロは思った

生きて来た時代は違ってるけど　なんだか生き方が似てると、タカヒロは律子の話に目を輝かせながら聞き入っていた

「それでどしたの？」

「それで私達クラスの三人で同好会を作ろうかって話になって担任の先生に相談したわ。担任が運良く音楽の先生だったの。

先生は進学校に赴任になった事を正直に少し残念だったと私達に話した

先生は私達みたいな生徒がいた事に偉く感動してね、  
そんな流れから　メンバー募集のポスターを各階に貼らして貰って、結局3人からのスタートだったのだけど、屋上や中庭で練習して

るとね 風に乗って音が学校中を包んだわ。  
それから一人、二人とメンバーが集まった。  
だけど正直みんな技術的に誇れるほどのものは持ってなかった。

楽しめるだけでいいと言う感情よりも、そうね、もっと熱いものを？求めるようになったの。それが何か？なんて事は誰にもわからなかったけど何かを求めていったのね。」

律子は自分ばかり話してる事にふと気付き

「タカ、ごめんなさい 私ばかり話してたわね」

「うっん、続けて。もっと聞きたい！」

律子は記憶の糸を一本、一本手繰り寄せた。

「そう、あれは確か4月も終わりの頃……」

## 好きな人

「そう、あれは4月も終わりの頃だった。  
違うクラスの男子がメンバー募集のポスターを見たとき、一応代表  
だった私の所にやってきた」

<メンバー募集って今、何人でやってんの？ジャンルは何？俺、  
ギターなんだけど>

律子は男子の真似をしながらタカに話を続ける

タカは時折 プッと吹き出しながらも真剣に耳を傾ける

「ふて腐れたようにさ、ポケットに手を突っ込んだまま話すのよ。  
私はなんて生意気で嫌な感じの男子だらうって思ったね。」

私達もタカと同じTHE BEATLESを主にしていたわ。

その彼はもっととガングナハード系をしたかったような事をボソツ  
と言ったけれどギターを掻き鳴らせる場があるならと彼は言っ  
て私達は一緒に活動をするようになった。

ところが彼、ギターが凄く上手かった。私達は舌を巻いたわ。学生のレベルなんてもんじゃないのよ!

ギターリフが最高なの! 無口で偉そうで、仲間とかそんな意識もなく、ただ彼はギターを弾く事だけに真剣で。熱くて……」

「ねえ、りつちゃん? その彼の事、好きだったんでしょ? すごく今少女みたいに可愛い顔して話してた」

タカは律子の中身は当時のままなんだと思った。

「ええ。凄く凄く、、大好きな人だった。遠くを見ている横顔も、ギターを弾いている時の下を向いた斜めからの角度も、私と二人セッションした時に目だけをじっと見る瞳も。全部ね……」

今まで楽しそうに話しをしていた律子の顔が悲しい表情に移り変わった事をタカは察した。

「その人が旦那さんだったりして?」

タカは言葉が上手く見つからず余計な事を言った事に少し焦っていた



「あー　　なんかごめんなさい　りっちゃん、」

「なんで謝るのタカ。

旦那さんは居ませーん！」

「え？　そうなの？　もう、、、亡くなってしまった、とか？、、」

「違うわよう。　最初から居ませんって事よ。

私、結婚はしなかった。

いわゆるシングルマザーってやつ？

別に珍しい事じゃなくてよ。」

次から次へと進むジェットコースター並みの昔話にタカは戸惑いを  
覚えながらも、律子の穏やかな語り口に居心地の良さを覚えていった

## 壊れかけの心

「タカの祖父　山村隆67歳。孫の山村隆宏と暮らしている。山村晃弘つまりは隆の息子は貿易関係の仕事をしており妻と二人でニューヨークに滞在している。

隆が40歳の時、妻が家を出て行き、それから酒に溺れる日々が続く。年齢と共に体が悲鳴をあげ、治療の為に現在入院をしている。学生時代から音楽に明け暮れていたが、妻が家を出た頃を境に音楽から離れていった。」

隆はいつものように検査に向かい、レントゲンを撮り終え検査室を出た

前からは若い娘が歩いて来た

病院という場所ながら若い娘は携帯電話を片手に前も見ず、そして左手には松葉杖を突きながら。

「でさあ〜ヒロトがライブに誘う訳えー。6月は行けないって言うてんのにさあ〜」

今時の若者の代表の様に話す語尾はだらしなく長かった。

レントゲンを終えた隆は前も見ないで電話で話し込んでる若い金髪

娘と正面からぶつかった。

レントゲンのファイルが落ち中身がバラバラになる

若い金髪娘は脇に挟んでいた雑誌を床に落とした。

「痛てえなー。何処に目を付けてやがる！」

病院内で携帯電話するのは非常識なんだぞ！分かってるのか？え？娘さんよう、」

金髪娘にとっては日常茶飯事の事だ。しかし、叱られた事は滅多にない事で目を丸くさせていた。

落ちた雑誌を拾い上げる隆

雑誌の表紙を見ながら

孫の隆宏が読んでいる本と同じだという事に気づく。

さっきまでのムスっとした面の祖父が微笑みに変わりこつ告げた

「入院生活は退屈だもんな。お嬢さんも何か楽器をやられてるんすね？

早く良くなって好きな事をたんとするがいいさ。」

自分のレントゲンファイルも素早く拾うと隆はエレベーターに向かった

軽く会釈した娘は繋がったままの電話の向こうの相手に冷めた口調で言う

「なんかー 変なおじいさんとぶつかったしいー」

今し方、ぶつかった相手に対しての気遣いなど金髪娘には全くなく、会釈して離れた瞬間に世界は電話の向こうの相手と自分だけなのだ。

『じいさんかよ?』 電話の相手が茶化す様に言う

「誰が変なおじいさんだよ！ やっちまうぞこの金髪娘が。」  
容赦なく聞こえて来た声に隆は反応し、独り言を言いながら振り返りその生意気な背中に中指を立てた。

「そ、ただの おじいさん〜ハハハ〜」

「・・・ただのじいさんかー  
ただの、なー。俺も落ちぶれたもんだ。」

拾いあげたレントゲンファイルをクルクルと丸め筒状にしたそれを自分の後頭部にポンポンと当てた。

ポンポン、ポンポン、バンバン、

バシ！ 「クソ。」

自分に対しての怒りすら向ける事もなかったここ数十年、

酒に甘えて、溺れていた自分が初めて見えた気がしたのだ

今、自分の手にしているものが、人生の半分を占めてきた楽譜でもない、紛れも無く今の自分の

そして体の中を見透かしたハートも温度も情熱も写さない骨だけのペラペラの画像。

自分が情けなくてたまらなくなったのだ

「8階に参ります」乗り込んだ独りきりのエレベーターの自動音声に、

「このまま、お天道さんとこまで運んでくれよ」エレベーターの壁に体の重みを預けた。この狭い個室の面に囲まれなければ今にも冷たい地面に吸い込まれるほど力が抜けていた。天井を仰ぐ。そして嘆く様に呟くとエレベーターの壁を右拳で殴った。

拳が痛かった。

『昔の俺なら エレベーターが衝撃で止まる程の力もあったのに…』

- - -  
壊れかけの心が叫んだ。

## スカルの涙

病室に戻った隆はゆっくりとベッドに寝転がり、丸めたレントゲンフィルムからレントゲンを出す

寝転びながら両手を伸ばし天井の蛍光灯の光りにレントゲンを透かすようにまじまじと見つめる。

「これが今の俺自身だ。色もなんもねえ ただの骸骨じいさんだ。笑えるよな…」

風が強く、桜の花びらが雪の様に

病室の窓の外をどんとどんと流れてゆく

「…そんな季節になったんだな。もう暖かくなっただろうかな…」

人と接する事を好まない隆は外の庭も中階にある中テラスの庭にも出た事がない。

空気を吸うのはこの部屋の病室からだけである

次々と退院し、他の患者も居なくなっただけから この部屋の窓さえも開けなくなっていた

ぼんやりと窓の方を向きながら流れる桜の花びらを見つめていると遠い過去の事が蘇ってきた。

毎晩、自分の部屋でギターを掻き鳴らし

…輝いていた若き日のあの頃の自分を。

近所迷惑も省みずアンプに繋ぎガンガンと音を鳴らし好きな事だけをしてた頃、

ギターを弾いては左手で楽譜に書き入れ作曲をしたあの頃、

そして忘れてたくても忘れる事の出来ないままの

女の事を…。

それは長年連れ添った妻ではない。心の奥にしまい込んだ…女の事を。

不思議と自分の家族と旅行をした事や、食卓を囲んだ思い出などは隆にとってはどうでも良かった。少年時代の心を捨てきれずに流れのまま夫となり父となった。それなりに<家族>という時間も楽しんだ。

、、、仕事の合間に、そして父親としての自分。

自分自身の狭間で音楽に触れた時に感じた。これは家族ごっこに過ぎないのではないのか？と。自問自答を毎日繰り返しながら部屋に閉じこもる日々。

すれ違いの中で限界に達してしまった妻。<分かっている、分かっている。>自分が全て悪かった事も。いや、過去形では片付けられる事でもなく、何十年過ぎた今、ふと思い出すのは、そういう事だ。



無意識に隆は目を閉じながら  
想像で現した腹の上にあるギターで、リフをやってみる

ジャツ、ジャツ、ジャー  
ジャツ ジャツ ジャジャー  
…

Deep Purpleの<SMOKE ON THE WATE  
R>が頭を流れていた。

《ソリッドかつワイルドレンジな鳴りを表現出来るのは俺の愛する  
このGIBSONだけなんだぜ!》

《それはさー9thコードで味付けして・・・  
- - - - -これだとき、Tハイポジのアクセスが簡単に出来てよ  
I...》

毎日の休み時間。そして家に帰れば電話で、仲間と話す事は全て音  
楽の事だった。

それは隆が結婚した後も 変わる事がなかった。

花が散り流れゆく儂さとこのベッドの上の自分を悲しくも重ね合わ  
せた。

・・・リフの真似事をしながら。



## 光の下で

「ねえ、タカ。私たち 本、本を一度も開いてないんだけど？」  
律子は笑いながら言う

「あーごめん ごめん、あつタメ口で喋ってしまったね」

「いいのよう〜私達は友達じゃない？ね！  
さっ！本を開いて見て。」

---

「基本的にはカントリー ミュージシャンだけどジャズやブルースからの影響も受けてたんだよね。  
チエット ・ アトキンス好きだったわ

後イギリスのステイウゝ ・ ハウとか」

「シンディキヤッツだよな？ 確かSteave Howのギター  
ってGreetschがほとんどだったよね？  
ほらほらあった。ここに写ってる」

「そうそう！タカ詳しいわね！若いのに？」  
二人はページを捲る度に語りあった。

「じいちゃんの影響なんだよね。レコードが沢山あるんだ。  
だけど、どれもこれも埃はかかっているし乱雑に置かれてるし。でも

さ、それも宝探しみたいで僕はいつつもその部屋に入ってそれらを眺めてた。」

「あらあら。そういった事を聞くとおじいさんとタカの性格が正反対だって事がわかるわね！」

タカは几帳面に本とかレコード、あ、今はCDね、そういったものをきちんと並べるタイプ。

でも、おじいさんは大好きなものは手元に大事に置いて、興味がなくなったらポーンって掘り出すタイプなのかしら？」

律子は楽しそうに話す

「そう言えばおじいさん、おじいさんが入院されてるって言うてたわね。具合はどうなの？」

病人の私が聞くのも変だけど、

「じいちゃんは肝臓を悪くして。数値がやばかったんだ。ろくに食べもしないで呑んでばかりだからね。」

僕が、僕が生まれる前ね、ばあさんが家を出てったらしいんだ。もう30年くらい？前の話だけだね、それから酒ばっか。

じいちゃんは若い時から音楽やってて、もちろん仕事は別にしてたんだけど趣味？趣味が過ぎて、家に帰って来ては部屋に閉じこもって作曲やらバンドのプロデュースとか。中途半端に事を進める事が嫌いで、家庭も省みずみたいなのがあつたって。

父さんも叔父さんも学生の時はクラブとか塾じゃん、

結局、ばあちゃんはいつも一人でご飯を食べてた。ばあちゃんは寂しかったらうって。

ある日、置き手紙があつて家を出たんだつて。

父さんから聞いたんだけど。

それから何年かして連絡がついた時には、ばあさんには新しい家庭があつたんだつて。40才くらいだったのかなあ？」

「そうだったの。・・・そうね40代つて言うところちょうど人生の折り返しというか、タカにはまだまだわからないと思うけれど

このままでいいのか？とかやり残した事はなかったか？とか うーん、体がまだ、まだ今なんかよりは元気でパワフルなのね。だから今まで歩んで来た道の道標を振り返り探してみるの。だから目の前にまた、道標を見つけてしまつとね、間違つた事でも そんな事関係なくてね

逃げ道かも知れない事もある。だけど幸せを求めるのが普通の人間であり人であり。

：なんかごめんなさいね。話しすぎてしまつたわね。  
「なんだか疲れちゃつた。」

律子は穏やかに笑顔で話しながら

「そろそろ帰りましようか。タカありがとう、明日も話せる？」

「うん！大丈夫？無理しないで。また明日！じゃ本は今日りっちゃんがついて帰つて！」

律子はタカの話聞きながら、自分の脳裏に焼きついているものがフラッシュバックするかのような感覚を覚えた。目眩に似た、そう・  
・けしていい感覚でもなく。

けれどもそのやっかいな目眩に似たそれを律子は確かめなくなった  
祖父の傍で付き添う若い男の子。普通なら息子であり妻の役目であ  
つただろう。複雑な環境にありながら

屈託ない笑顔で話すタカ。  
タカともっと話をしたいと心から思ったのだ。

・・・それだけではない。ずっと心の奥で燻っていた男の事を律子  
は思い出してしまったのだ  
何故、思い出したのか それすらわからないままに、。。。

疲れた様子の律子を気遣いながらタカはそっと立ち上がる。  
光が射すまだまだ明るいうちに二人は中テラスの庭で別れた。

## 鮮やかな苔

昨日はごめんなさいね。　それに私ばかり話しをしていたわ。

「そんな事ないさ！りっちゃんの話は楽しいんだ。だけど不思議だね。一昨日売店で会ってさ、昨日いろいろ話しをして。ずっと前から知り合いだったみたいだ。」

「そう言っただけだと嬉しいわ。よくあるじゃない？昼ドラマの設定でね、本屋さんに行っただけで、同じ本棚から偶然に同じ本に行っただけで触れ合っただけで、そこから二人は、なんてね！だけど相手がおばあさんだったからがっかりね？」

「昼ドラマか？僕はその時間学校です。見たことないです。ハハ！昨日のリベンジです。」

「あら、嫌だね。タカは学生さんだったわね。タカと話をしていて不思議ね。自分が何歳かも忘れてるし、タカの年齢さえも。ごめんなさいね。」　不思議繋がりと言う事で・・・よろしく！？」

「りっちゃん、やっぱ若いよ！全然おばあさんに見えないよ。話してると同級生のような気分になる。音楽の話も普通に出来るしね。なんか学生時代から時間が止まっちゃってるみたいなの？」

時間が止まるか？律子はタカ呼び名を聞いた時から胸の奥が少しだけ騒がしくなっていた事に気が付いていた

「タカはどうしてTHE BEATLESをやっているの？」

きっかけはなんだったの？タカは若いしなんだか珍しく思えたのよ  
」

「いや、違う、律子は確かめたかったのだ。どうしても繋がってしまうのだ。タカと言う名前を耳にした時から律子は何かを感じていた。<タカ>と「タカ」……

「うん、じいちゃんの事 昨日話したじゃん？

じいちゃんの家さ、レコードがすごい沢山あって 最初どうやって聴くんだろうって思ったよ。やたら馬鹿でかいしさー

ステレオ！あれいいよね！音にノイズみたいなのが聞こえるんだけどそれがいいんだよね。

当時の音楽事情が手に取れるような感じとライブ感？違うな、レコーディング風景？みたいな、なんかさ！僕らの時代は音ってすごい鮮明じゃん？ストレートな感じがいいのかもしれないけど、古き良き時代の雰囲気、好きだなあ。りっちゃんとその時代に行ってみたいよ！

あ、話が逸れちゃた。  
でね、

じいちゃんの部屋に入ってたならエレキやアコギが何本かあってさ、レコードはガンガン系がやたらあったんだ。

The Who とかJeff Beckとかほんとすごい枚数のレコードだよ。

でね どれも無造作に置かれてるのに THE BEATLESだけ飾ってんの。なんか特等席みたいな場所に。そら目を引くじゃん？中学になった頃だったか じいちゃんに これ聴いていいかって尋ねたんだ

そしたら、じいちゃん どしたと思う？



奥から白い手袋を持ってきて丁寧にジャケットを扱った。びっくりしたよ！

よほど大切なものだったんだね。

「・・・そうなの」

律子は胸のざわつき、フラッシュバックしてたもの、あの目眩に似たやっかいなもの全ての

、感覚の正体が形となって見える気がした

タカに聞いて見たいことがある。

いや、聞いたところどころでどうなる。確信に変わったところでどうなる。

もし、そうだとして？

もう私はおばあさんだ。もちろん「タカ」もそうだ。思い出は鮮やかなまま、しまう方がいいではないか・

脳の奥の方ですつとへばり付いていた綺麗な緑の苔。形を崩さずに剥がせるというのか？

あの頃のままの私、あの頃のままの「タカ」な訳ないのだ  
律子は葛藤の中でもがく

「それで・・・アルバムのタイトルはなんだったの？」  
お願い  
い・・・Hey Jude<って言わないで。

複雑な気持ちで律子の心いっぱいになる

「Hey Judeだよ。」

律子はもう倒れそうだった。もうその先は言わなくていいのよ。

体中の水分が瞳に行き渡るまで　そう時間はかからない事を　律子は察した。  
タカは続ける

「でね、レコードジャケットのHey Judeのところに赤い丸印が付いてあったんだ。じいちゃんが気に入ってるのかなーって思っ  
てその曲を一番意識して聴いていたら　大好きになっただ。しかも7分もあるんだよね！」

「そうだったの・・・」律子は小さい手で顔を覆う  
「りっちゃん、どうしたの？大丈夫？気分悪い？ごめんね。ごめんね。」

タカは焦って律子の顔を覗き込んだ

## 涙の理由

律子の顔を心配そうに下から覗き込むタカ。

「りっちゃん 部屋まで送ろうか？何階？ごめんね。ここは病院だもんね。 疲れるよね。」

楽しくてつい、話しすぎちゃったよな、

若い少年にとって、年老いた女性の涙などの訳は想像さえもつかないでいたのだ

「ううん、 違うのよ タカ。タカのせいなんかじゃないわ。」

溢れる物を我慢せずに、いや我慢出来ずに流したのか 律子は

ほんの少しだけ落ち着きを取り戻し話を続ける

ゆっくりと覆った手をのけて 人差し指で溢れでるものを拭う

「あのね、私は今、67歳なのね。長く生きてると思いつつ溜まるじゃない？溜まると頭がパンクしそうじゃない？

上手く説明が出来ないのだけど、人間の頭の中は上手く出来ているのよ。」

パンクしないようにちゃんと忘れる事も必要ですよって、自然にこく自然に引き出しを整理してくれるの。

これは忘れなさい。

これは忘れてはいけません。

、、って。「一つ一つ、言葉を探しながら、同時に自分に言い聞かせるように静かに・・・ゆっくりと。」

「うん」

先生の話しを聞くように真剣に耳を傾けるタカ

「楽しかった事の方が記憶にあるんでしょうけど、悲しい事ももちろん覚えてるわよね。

いろんな人との出会いの中でもすぐに忘れる事もあるわ。

転校して行った子の事っていったい何人覚えてるかしら？

同窓会で会ったとして 全く思い出せない人もいたり。

それは 関わりとか興味とか恋とかある程度のカテゴリーで括られないと忘れてしまうのだと思うの。もちろん人に寄っては違うのよ。

「

「、、、りっちゃんは忘れられない人がいるんだね？」

「タカとのいろんな話してね学生時代の自分を思い出してしまったの

そのカテゴリーはTHE BEATLESであり学生時代のバンドであり。まさに今のタカと被るの。それとそこには恋という一番大きな・・・大切な括りがあった。」

少し遠くに視線を移す律子

「ばかみたいね、自分は何歳なの？って。」

「懐かしさとは違う涙なんだよ、ね？」律子の感情にゆっくりと自分の気持ちを重ね、精一杯の言葉を選ぶ夕花

「よければ 聞かせてほしいよ。 りつちゃん。」

「夕花わかったわ。私の大切な思い出。忘れてはいけませんよって言う引き出しを覗かせてあげる。でも、もう少し待って。」

また泣いちゃうかも知れないから。それにまだ本、半分も見えてなかったしね！明日もまたお相手してくれる？「ようやくいつもの笑顔の律子に戻り夕花は安心したのだった

「もちろんだよ！じゃ明日！」  
- - - - -

次の日も、その次の日も毎日二人は本を開いて楽しく語り合った

一週間が過ぎた頃、律子は自分のハンカチを取り出し、そこからあ  
るものを出して夕花に見せた

「わあ！綺麗だな！何？」

八ガキ大の大きさのものだった

「栞なのよ」

「栞かあ。桜の花びら？」

「ええそうよ 病室の窓についてたのよ。」

「この絵は？」

「私が描いたのよ。好きなのよ 絵。」

「へえ すごいなりっちゃん。」

「今日はここまで読んだしって事で、挿んでいいかしら？」

夕方は律子の器用さと

小さな花びらを愛おしく大切に思う律子の綺麗な心に感動した。

律子と会った時から自分には無縁の祖母であったり常に離れて暮らす母親。母性的な愛情を律子にどこかで求めていたことに夕方は気づいた

「りっちゃんはやっぱり女性だね」「それは素直な今の夕方の感情だった

「あら、もちろんじゃない！それって褒め言葉として受け入れるに

は難しいわよタカ。」「少し、意地悪な雰囲気で答えてみた

「え？」

「女性は難しい生き物って事よ！」クスクスと笑い出す律子だった

2人の本も半分以上の頁が風に晒された

## 優しい目く隆の瞳く

### 隆の病室

---

「タカヒロ、この前の雑誌見してくんねえか？」

「珍しいねーじいちゃん。」

「なんだか退屈すぎてな。ただそれだけだ、、、退屈なだけだぞ。」

「いいよ！無理しなくて！」 少しだけ、からかうように言いながらタカヒロはリュックから雑誌を出す

「無理なんてしてねえ。退屈なだけだって言ってるんだろっが！」

「はいはい。あっ、だけど唾つけてめくらないでよ。折り目も止めてね！それから栞はそのままにしてよ。」

タカヒロは口うるさく祖父の隆に言った

「りっちゃんと二人の本なんだから。」

「りっちゃん？誰なんだ？聞いた事ねえな。」 珍しく機嫌のいい隆にタカヒロは初めて律子との事を口にした

「そりゃそうさ、この病院で知り合ったんだー。」

タカヒロは嬉しそうに話す

「お前、こんなとこで女を口説いたのか？ で、もうやっちゃまった



か？」

「じいちゃん、いつもそうなるね」「タカはいつもの言い草に半ば、呆れ気味で切り返す

「そんなんじゃないぞ。」

りっちゃんとは話しが合う。それになんだか話しをしてると落ち着くっていうか・・・」

タカヒロは初めて律子と会った日の事を時折、端折りながら隆に話してみた

「へえ　本を二人でな」。なんだか、かわいい事してん  
じゃねえか」

で、どんな風貌なんだ？やっぱ女はいい女じゃなきゃな。」

「じいちゃん　あのね、そんなんじゃないって。」

「教えてくれよ！タ・カ・ヒ・ロ君！」隆はタカヒロの首に手を回し  
「教えないところするぞ！！お前はココが弱いんだもんさ」隆  
はタカヒロの脇腹を擦り始めた

「や、止めてくれよ！もう子供じゃないんだよ、く、くすぐりたい  
よ！」

「おめえはまだまだ子供なんだよ」

2人は久しぶりにじゃれ合った

「綺麗な人だよっ！色が白くて彫りが深くて！」

「ほう、じゃ、目ん玉は青の異人さんで赤い靴履いてたりするの？ハハハ」

「ーだね。そう金髪だっ。」

タカヒロは初めて律子をみた中庭テラスでの光景を思い出していた  
太陽に照らされ髪の毛が金色に輝く律子の姿を

「そっだ、目の下のほくろが印象的だし。」

隆は頭の中で想像を膨らませた

孫のタカヒロは我が孫ながらアイドル並の容姿でいつもいつも家の前には女の子が訪ねてきたりと  
自慢の孫でもあった

その孫が病院の売店で逆に声をかけられたのだ

誰がおばあさんと想像するだろうか。

隆は思い出した

何日も前に検査の帰りに金髪の派手な娘とぶつかった事を。

しかも、その手にはタカヒロと同じ本があった

たった二つの点が単純に線で繋がったのだ

「タカヒロ あれはよくねえ・・・よくねえぞ、遊ばれるだけだ。  
黒髪の女にしておけ。」

タカヒロは何を根拠に？とおかしくなった

「じ、じいちゃん 会った事ないだろ？<外見だけで人を判断しちゃいけねえ>っていつも僕に言ってきたじゃん」

「言ってきたじゃん！ じゃねーよ。 人にぶつかつていてあんな態度とる小生意気な娘はよう、」

隆は小声でぶつぶつ言う

「でね、りつちゃんはすっごいんだ。 ギターもやってたらしいよ。

「

「ギターを？」

「そうか！ギターをなー。ほう・・・」

その一言で隆は勘違いしたままの金髪の若い娘に少しだけ興味を持った

そして、何十年ぶりに音楽雑誌を開いて見るのだ。

表紙には実物そのものに近い色鮮やかなギターの写真

そっと写真の弦を指でなぞってみた。愛しいモノを見る優しい目をしていた。

その一瞬の、優しい眼差しをタカヒロは傍で見ていた

## 爪

「ほう 今のボディーはこんなのが出てるんだな 　しかし、変わらねえものは変わらねえな

タカヒロ 　おれはあの高価なGIBSONは新聞配達で手に入れたんだぞ

「そうなの？てつきり親に買ってもらったもんだと思ってた」

「バカヤロー 　楽器なんかはてめえで買うもんだ。

俺は安いものは興味なかった

ダチはみんなよー 　鳴ればいい、 　弾ければいいって言ってやがったが 　違うんだ。

求めてる音があつたんだ。

楽器屋行ってよー 　片っ端から弾かせてもらったんだ。 　響きや音色を耳を澄まして聴くんだ。 　まあ、俺みたいな客は店からすりや迷惑だったかも知れんがな。 　こだわりは捨てられねえつてもんだ

・・・もちろんアルバイトだけじゃすぐには無理だ。

一年の終わりには近所の大学生から貰ったギターから俺のはGIBSONに変わった

最初は親に立て替えて貰ったさ。

もちろんバイトして全額返す約束でそれは守ったぜ。

だからこそ愛着がある。 　タカヒロも分かんたら。 　愛着があれば、もちろんそれに越したことねえさ 　だけど

男は上を見なきゃいけねえのさ

目標は常に上のほうにな。 　そこで満足したら成長もなんもねえ。 　止まったらダメなんだ。 　わかるか？

「

タカヒロは祖父のこれだけの熱い思いを聞くのは初めてだった

「タカヒロ、ちと 頼みがある。明日家に帰って俺のGIBSON 持ってきてくれ」

「じいちゃん、弾くの？またやるの？」

「まあ、まあな。」

それとステレオを開けた一番下の棚の所に木の箱がある。 それを一緒に持って来てくれ。 ピック入れだ。 使えるのがあるかどうかわかんねえけど」

タカヒロは嬉しかった

こんな日が来る事をどこかで願っていたからだ

人の心の闇はどんな近くにいっても誰も入り込む事は出来なくて、

自分自身で闇夜を抜けるしかないのだという事も  
それもまた どこかで分かっていた。

偶然、手にしたこの雑誌で一人の婦人と出会い、そんな小さな偶然の中で何かが変わってゆく

祖父、隆の右手の爪が左手よりいつも長めに切っており 親指の右側部分だけ長めにカットされてる事の意味を。

小さい時から指相撲する時に、いつも痛かった事を。

大きな祖父の手をいつも眺めていたタカヒロはいつしか自分と変わらない大きさになった今

祖父の闇の部分から僅かに漏れた光を

タカヒロは見逃さなかった。そして どんな事をしても祖父、隆の持つ光の偉大さを再びスポットライトほどの眩しさに変わるように  
<力になりたい> と心から思った。

「じいちゃん、<Rickken backerの12弦 63年仕様360/12復刻バージョン>これが僕の夢だ！」

「そうか！50万するな！夢を持って、タカヒロ」

「じいちゃん、買ってよ……ウソだって……！」

「タカヒロ！おまえ」

<俺は、ただのじいさんでは終らねえ> 再び、輝きを抱いたであらうその目で、そして伸ばした爪のその指先で隆は再び頁を捲る。

## パンドラの箱

タカヒロは祖父の隆が再びギターを持つ姿を想像した  
と、言ってもタカヒロは実際のその姿を見たことはなかった

数々のアルバムの中の写真やフィンガーピッキング大会の優勝トロフィー、  
様々な、祖父の若かりし頃の実績を部屋に入る度に目に  
していた

新しい写真をみつける度、そしてトロフィーを見つける度に祖父  
に質問を投げかけてきた

「じいちゃん これなんの時の？じいちゃん この人誰？  
このトロフィーは？」

物心が付きはじめた頃から中学生になる頃まで タカヒロはいつも  
祖父に聞いてきた。 がしかし祖父は決まって

「忘れたな。」

たいがい、この一言で終わるのだ

それでも興味の方が大きく、祖父の家に来る度にタカヒロはこの部  
屋で一日の大半を過ごしたのだった

タカヒロも高校3年になり、自分の時間さえ余裕がなくなった  
緒に住むようになって



いつしか祖父の部屋での「宝探し」もしなくなっていた。

部屋に入るのは久しぶりだった

閉め切った部屋はかび臭く湿っぽい感じさえした。日焼けして色褪せたベージュのカーテンを勢いよく開けた

「久しぶりだな〜 この部屋ー。」

見慣れたはずの祖父の部屋も長い年月の間に随分と狭くなったもんだと感じた

「ステレオ こんな小さかったけな？」

ぶつぶつ言いながら近付く

タカヒロが大きくなったのだ

そんな単純な事さえも気がつかないでいた

ステレオの硝子扉は埃がたまり 小さな子供にとっては恰好のキャブスになるほどだ

「うわっ！ きったねー。」

ふっ、ふー 埃を吸い込まない程度に顔を寄せ、息で飛ばしてみる

扉に手をかけゆっくりと開ける

懐かしいレコードの匂いがした

「この匂い 久しぶりだな。」幼い頃から嗅いでいるその匂いは少し錆びたような、それでいて柔らかい酸っぱさのような・・・

「棚の下の方だな、木の箱、木の箱・・・」  
棚が崩され、ビスも抜け落ち、レコードが積み木のように重ねられていた

「あつ、あつたこれだな。」ゆっくりと棚から出してみる レコードの山の奥にそれは隠れていた

中を確認するタカヒロ

ピューーーーーン！！タカヒロの目元をかすめる

「わっなんなんだ！」  
勢いよく飛び出て来たのは布とコイルで出来た単純な造りのおもちやだった

「マジかよ、びっくりしたー」  
・・・てか、小さい時よく引っ掛かった気がする。まさか今でも騙されるなんてな

よく見ると同じくらいの大きさの紙の箱がまだ奥にあった

「これかな？紙だけ？ 木の箱って言ってたよな？」

恐る恐る 今度は警戒しながら開けてみた

蓋を開けると いろんな形のいろんなデザインのピックが沢山入っていたのだ

タカヒロは一枚一枚、手に持ちながらそれらを眺めた

よほど使い込んだのか傷だらけのや欠けているのがほとんどだった

丁寧に一枚ずつ取り出した。

すると箱の下から何やら紙に包まれたものが出てきたのだった

「なんだろう？」

タカヒロはそれを取り出し 少し高く持ち上げ透かすように見ている

「見えないしー。開けてしまおうと開けますよー」  
人の部屋でブツブツと言いながらタカヒロは行動に移す

ノートをちぎったような線の入った紙を開けてみる 無造作にちぎった紙ながら丁寧にセロハンテープで止められていた まるでく誰も見るな>と言わんばかりに。

人間という生き物は好奇心にはなかなか勝てないのだ セロハンテープで止められていなければ良かったのだ

中には一枚の写真が入っていた

学ラン姿の男の子とセーラー服姿の女の子だ

「おうー!!!これいいちゃん?」タカヒロは静かな部屋で声をあげ

た

<太々しい感じだなあ> 彼女いたのかよー！ 可愛い顔をしたらだなあ。 >次から次へと頭の中で呟いていた

男女の写真は顔がはつきり分かるほど近くから撮られていた

男の方は恥ずかしさを隠したような笑顔ではない表情でそれに反して女の方は 笑顔でいて嬉しそうで、えくぼがありチャームिंगな雰囲気醸し出していた

ん？あれ？、、違う？ 違うよな、、

タカヒロはソコに笑顔で写っている女の人の目を見て思った

目の下、左目の下の同じ位置にほくろがあった。

律子と同じ左目の丁度、黒目の下あたりに。面影といい・・・そして・・・えくぼも同じだった。疑問が確信に変わるまで時間を要する事もなかった

「なんだよ・・・」

無意識に写真を自分のポケットにしまうタカヒロ そして楽しいはずの久々の「宝探し」がモヤモヤとした嫌な気分になり代った

タカヒロは手についたザラザラの埃を払い、ギターとピックの入った紙の箱を持ち部屋を後にした

<何故、僕は写真を箱の中に戻さなかったのか、いや 戻せなかったのか、、、。>

今、この毎日の中で 律子と会話し楽しい時間を過ごしている自分。そして過去の何かに涙する律子の姿を思い浮かべながら

たった今、このリアルな時を刻む中でたぶん律子であろう彼女の少女時代の写真を見た。

大好きな祖父の、、大切な部屋の中で。

タカヒロは混乱していた。

焼きもちなのか？まさか・

これがもしパンドラの箱だとするなら、箱の底には<希望>が残っているはず。

ポケットに手を入れ自分の指先でそれをもう一度確認した

混乱した感情は家の外へと荒々しく導くのだった

## 言い出せなかった事

次の朝、いつもより早めに病院に行くタカヒロ

面会時間は11時からだったがモヤモヤとした自身でも分からない気持ちだが、気付けば一本早めのバスに乗っていた。ガラガラの席ながらタカヒロは冷たいパイプに掴まりながら立っていた。家から病院まではバスで30分の距離。その間中タカヒロは右手はパイプに掴まり左手はポケットの中に入れたあの写真。写真の角を人差し指の腹で幾度も確認しながら車窓から流れる景色をただ、ボーっと見ていた。

「おはよ、ゝ。」

「おう。 タカヒロおはよう」

どんなに機嫌が悪くとも二人は挨拶だけは交わす  
タカヒロが小さい時から隆に厳しく躰られて来た事だった

「これ。」ギターが入ったケースを背中から降ろしベッドの脇に立てかけた。

コンビニの袋に入れられた小さな紙箱は少しふて腐れた表情で

「はい・・・」左腕を伸ばし 隆に取れとばかりに差し出す

心の荒れが小さなビニール袋を揺らす

「ありがとな。で、どしたんだ そのふて腐れた態度は？おう？」

「別に……。」

「別に！って事ねえだろ。」

「ピック見たけど、どれもボロボロだし・ ・ ・ 使えそうなのはないみたいだし……。」

そんな事はどうでも良かった。

……が自分の態度には嘘をつけず、理由を作りたかっただけなのだ

「あー箱の中、全部引っくり返して見たけど、どれもボロボロだった。」

「そうか。」

「……。」

隆は写真の事など忘れていたようだった。

隆は袋からピックの入った紙箱を出し蓋を開ける

「懐かしいな」 にこやかに笑いそう呟く

一枚を手に取り出し 笑い出す

「どしたんだよ急に。 何がおかしいの？」声を上げ笑い出す隆に  
タカヒロは冷めた口調で尋ねる

「なんでピックがこんなに欠けてるか分かるか？」  
口を尖がらせたまま目だけで隆の方を見るタカヒロ

「タカヒロ、 おめえが小さい頃 来る度にこの箱を開けてたん  
だ。

色やデザインが一枚、一枚違うだろ？ 小さい子にしたら珍しく  
思えたんだろ？」

「あんまり・覚えてないよ。」 今時ではない、くだらない玩  
具に驚いた事と、幼い頃に引っ掛かった少しの記憶。今はそんな事  
は話したくないタカヒロだった

「このピックをさー。ステレオの硝子の隙間に一枚一枚挟んで、な  
んの遊びだか色事に分けてみたり、形事に分けてみたりな、サムピ  
ックなんかは全部の指にはめて怪獣の真似事をしてたんだぞ

可愛い遊びと思って放っておいたんだ。だが後でギターを弾こう  
と思ったらこの有様だ。 使いもんにならねえ。  
何度注意してもダメだった。

だ  
な おもちや屋でなびっくり箱を買ってな、 仕掛けておいたん  
だ  
臆病者のお前は叫ぶように泣いたぜ。 ギャーってな。

だけど 子供でも学習能力はある 一度つきりしか引っ掛からなか  
った」



ぷっと吹き出してしまふタカヒロ。  
怒っているだろう自分自身とは違ふところで無邪気な子供の自分の事をしつかりと記憶に留めておいてくれる祖父の事を愛しい気持ちで聞いている自分。

「俺はよ、紙箱からおもちやを引きちぎってピツクの入った木箱にそれを仕掛けたんだ。面白かったぜ！」

「なにやってたんだよじいちゃんー。」

タカヒロは先程までの自分を隠したくなった。

「毎回、毎回入れ替えるんだ。だからだんだん自分でも分からなくなつてよ、

俺も引つ掛かつたんだ。ピューーーン飛んで来てな、一人で声を上げたぜ！あれ、びっくりすんな。」

タカヒロはもう我慢出来ずに腹を抱えて笑い出した

「自分で仕掛けたのに？ハハハ！！」

「正直、そんな事は今この箱を開けるまで忘れてたがな。  
・・・ありがとよ。」

で、なんかあったのか？」

「え、？何も入ってなかったからさ、」タカヒロは悪い事をしたように思えた。  
自分のズボンのポケットに入っているものを触りながら、ドキドキしてそう答えた

「違いえーよ。 タカヒロお前様子が変わっただろ？」

「あ、いや・・・ううん。 なんでもないさ 疲れてただけだ。 寝不足だよ、ただの。」  
どうしよう、出せないやこの写真。 きっかけを自分で無くしてるよな。

パンドラの箱の底には・・・希望・・・  
このピックが入れられた紙箱が本当のパンドラの箱なんじゃないかとタカヒロは思った。  
隆の「・・・ありがとよ」の言葉に少しだけ先が見えた。  
そんな気がしたのだった。

「じいちゃん、午後から、またりっちゃんとテラスで話ししてくるよ。」  
「熱いねえ〜羨ましいねえ〜 りっちゃんに宜しくな。 あー黒髪の方が似合うって伝言しておいてくれ」

「失礼なそんな事言えないよ。」何言ってるんだか・・・  
タカヒロは写真の事で頭がいっぱいになっていた。

シネマなら・・・

いつもの時間になりテラスへ行くタカヒロ。

雲が多いグレーの空の下、患者の姿も疎らだった

律子はまだ来ていないようだった。

「いつもりっちゃんの方が先だったのにな。」

ほんの少し不安になったタカヒロは携帯で時間を確認する

「タカ！ごめんなさいね 検査が長引いてしまつてね。」

不意に後ろの方から声がした。律子だった。少し安堵の表情を見せたタカヒロ

「大丈夫なの？」

「ええ。今のままの状態なら退院は近いみたいなの」

「そっか。、喜ばないといけないのになんだか寂しいね。」

「そうね、寂しいわね。、、気のせいかしら？今日のタカ・・・少し疲れているみたい？」

隆とのやり取りの中で気持ちがどうにかなっていた。

少しの笑顔も今日の空と同じように、だんだんと曇っていった。気も乗らない感じもしたタカヒロだった

少しでも日が射していれば、また違ってたかもしれないとタカヒロは思った

「この本も後、少しだね。毎日すごく楽しかったね、りっちゃん。りっちゃんがいろんな事に詳しくてさ、僕も話しをしていて楽しか

ったよ。りっちゃんが泣いてしまった時は・・・少し驚いたけどね。」

「ええ」律子はいつも笑顔で相槌を打つ。この日も同じ、唇をぎゅつと結んで口角は上がっていてえくぼの出る

大人の女性の笑顔。

時に拗ねたり、「冗談を言ったり、少女の一面も見せた。タカヒロはほんの数週間前からのこのテラスでのひと時を律子の笑顔を見ながら振り返っていた

そんな少女時代の過去と祖父の過去が繋がっていると分かってしまった今、何をどう話しをしていいのかさえ分からなくなったのだ

「本！見よう本！！いつもじいちゃん病室でペラペラ捲って読んでたけど学校の宿題とか溜まって！」

タカヒロは明るくいつものように振舞おうと頑張った

二人はいつものベンチに横に並び、いつもの様にページを捲る。

そして、律子の栞を探す。

「カートコバーン、ジミ・ヘンドリックス、ブライアンジョー彼らの短い・・・」

こんな天候の、こんな気持ちの時に開いた頁は全て27歳という短さで人生の幕を閉じたミュージシャン達の生い立ちから最期までを綴った特集

<・・・なんで今日に、このページなんだろ。>

タカヒロはもう言葉が見つからないでいたが無意識にボソッと呟いたのは

「僕の10年後ってどうなってるんだろ。」

律子は言った

「きつと大切な人と素敵な結婚をして子供に囲まれているわよ。」  
律子はいつもの優しい微笑でそう言った

律子の描く幸せな未来像はきつとそこにあっただろう。タカヒロは律子の言葉はしつかりと耳に入ってきたが  
ポケットの中の写真の存在がタカヒロの心に地雷を踏ますのだ

「・・・あのさ、僕とりっちゃん、この二人の本がさ、じいちゃんの心を動かしたんだよ。きつとね。」

「え？そうなの？」律子は隆の事をもっともつと聞いてみたかった  
「じいちゃんさ、またギターを弾くって言ったんだ。」律子はタカヒロに悟られないように嬉しさの笑みを隠してみた  
だがタカヒロは見ていた。律子の僅かな表情の変化を。

「でさ、自宅に戻って、頼まれたギターとピックを取りに戻ったんだ。でね、ギターピックの箱から一枚の写真を見つけたんだよ。」

「写真？」

なんの写真だろう？なんて考える余地を与えないままタカヒロは言う

「じいちゃんの大切な・・・大切な奥さんの写真。つまり僕の知らないばあちゃんって事。」

若い頃の写真でね、2人で仲良く撮ってあった。すごく・・・可愛い顔の人だったよ。

じいちゃん、やっぱり忘れられないんだろっな」

「そう。」律子はさつきと同じ唇をぎゅっと結んだ大人の女性の笑い方をした

「そう。羨ましい良いお話ね。」羨ましい・・・というのは律子の心の本音でもあった

「どんな流れがあるうとも忘れられない人を思ってるって事は決して悪い事でもないもの。」

私はそう思うわ。・・・タカは洋画は見る？昔のねアメリカ映画でこんなのがあったの

<男はその恋を忘れる為に、街を出た。女はその恋を忘れる為に街に残った。>

この違い分かる？

男って臆病なのよ。カも体も女性より勝ってて。だけど女性はもともと強く出来てるの。

だって子供を産むのよ。10ヶ月間も自分のお腹の中でもう一人の命を育てる。生む時なんてほんと死ぬくらいの痛みなの。それに耐えられるのよ。

その映画では女は街に残った。大好きな人との叶わなかった恋の、そんな思い出が溢れ返っている街に残るの。

新しい街に繰り出して一からやり直す事の方が簡単でいて気持ちに整理がつくのもよ。

思い出の街は・・・小さなバス停も、近くの海も、駅も、森も・・・どこに行ってもデジャブの世界。

残るって事はそういう事。だけどそれだけ愛していた人との場所は離れたくない。そっちの方が大きいわ。

女はシャワーを浴びては泣き、思い出の曲を聴いては泣き 心の傷を傷で治そうとした」

ほんの少し震える声を隠し律子は続ける

「映画の中のその男は、さっさと街を離れた。住んでいる場所も、乗っている車も、家具も。

なにもかも新しくした。新しい街でいい女を片っ端から抱く・・・叶わなかった恋を忘れる為に。

けれど、男は寝る前のバーボンを口にする度、蘇ってくる日々苦しむ事になる。自身の傷は外からの手当でだけじゃ治らない事に気付くまで時間がかかった」

「結局は本当の愛ならどっちにしる思い出して苦しんでるって事なの？」

「・・・映画のラストシーンはどうなったと思う？」と  
タカヒロに問う。

「どうなったの？想像出来ない」

「最後はね3年の時を経て、街を離れた男が忘れられない女の元に出会いに帰ってくる。女は男を捜しに街を離れる決心をした。2人はすれ違う。映画なのに涙が止まらなかったのを今でも覚えてる

ところがお互い決心をして空港に向かったその場所で  
再会をしたの。

運命の赤い糸つてね絡まれば絡まるほど、この体の中を流れる真っ赤な血のように鮮やかになり、そして強度を持つ。」

「私はそう思うし、信じてるの。」

下を向いて話をしていた律子は顔を上げ、タカヒロの目をジッと見て強い口調で言った。

タカヒロはドキッとした。

律子に全て見透かされてる気がしたからだ。この写真が実は律子と隆だという事を。

律子は分かっていた。いや、願っていた。

隆とあの時・・・たった一枚だけの写真を撮った事を。覚えていたからだ。忘れなかったからだ。

忘れなくなかったからだ・・・。

「きつと素敵な映画だったんだろうね。なんていうタイトルなの？ 帰りにレンタルショップ寄って探してみようかな。見たくなったよ。」

「タイトル？ 忘れちゃった！それにきつとないわ。」

「そうなの？」

「古い古い映画だもの。タカの知らない時代だから。探しても・・・見付からないわ。」

映画の内容は詳しく覚えているのにタイトルを忘れる事があるんだろっか。

「そっか。」





隆はタカヒロに持って来て貰ったギターをケースから出した。

使いものにならない事くらいは分かっていた。音楽を避けるように封印してきたこのギター

閉め切った部屋の温度や湿度の事を考えるとネックは反っているだろうし、湿度調整剤も最後に入れたのもいつだったか・

何もかも終わりだと思った最後の夜に弦だけは緩めておいた。いつかまた・・という日の時まで。

まさかこんなにも年月が経つとは思わなかった

ゆっくりギターを抱えてみた。この体に添う感覚。

ネックを握ってみた。意外にも反りはそれほど感じなかった。だがあの時とは違う。

何もかも違うのだ。当然だ。ピックも出しそつとギターに当ててみた

ジャン ジャン・

隆はそれだけで胸が一杯になった。久しぶりに聴く弦をはじくこの音がたまらなく胸を刺す

少しだけ、アルペジオを試してみる。だが隆はすぐにギターをしまう。「俺はまた・・こうやって触れていいのか・」

久々の手触りに胸が詰まる・・・しかし過去の事を思い出すと・・・  
隆は戸惑っていた

タカヒロが雑誌を手に戻って来た

「じいちゃん！弾いてたの？」ベッドの上に置かれてるギターケースに目がいく。そして  
目を輝かせて隆に言ったのだ

「少し触ってみたというかな。。。タカヒロ、悪いがな楽器屋で一度コレ出してきたくんねえか。チューニングもここじゃ出来やしねえ。お前も忙しいだろうから。それに少し錆びも気になるがオイルもクロスもねえし」

「わかった！OK！嬉しいよ僕。じいちゃん。。。あのさ、文化祭と一緒にセッションする？枠あるよ！」

タカヒロは何を急に言い出すんだろうと少しビックリした隆だが

「何言ってるんだお前はよくお前を食っちゃまうぞ？俺のテクニクを知らねえだろ？女の子の視線は俺に集中しちまうぞ？そりゃ可愛い孫には出来ねえな」隆は嬉しそうに答えた

「じいちゃん。。。マジで言ってるの？僕、ファンいるよ？負けないうって！」タカヒロも負けじと答えてみる

「じいちゃん、明日にでも早速、楽器屋に行ってくる。その代わりに文化祭の件、考えててよ。」今度は真面目な顔で言うタカヒロ。

「マジか？」タカヒロの口癖が移った隆が答える

「マ・ジ・で・す！ヨ・ロ・シ・ク。楽器屋に行ってくるから交

換条件って事で〜成立〜！」

「文化祭か・・体育館だよな・・。文化祭ねえ・・まあ、考えとくわ。体が治ってればの話だな。」

「治してく・だ・さ・い！」そう言っただけで雑誌を出しベッド脇の椅子に座るタカヒロ。

「あー、タカヒロ。言い忘れてたんだが昨日お前が帰った後な、学校の先生から俺の携帯に電話があったぞ。」

よく考えればもう学校が始まってるんじゃないか。先生な、お前はずっと休んでるって言った。

お前・・俺が入院してから学校行ってないんじゃないのか？春休みはもう終わってたんだよな。

俺も気付かなくて悪かった・・考えりゃ、この時間は授業中だもんな。」

「じいちゃん、俺さ、勉強ついていけないんだ！バカだからさ！だから楽しくなくて。」平気な顔して笑いながら言う

「・・・先生な、こうも言ってた。タカヒロ君は1、2年といつもクラスで上位の成績なので大学も国公立を狙えます・・休みが多いと留年します。とも言ってた。俺はなんにも知らなかった。俺と同じで出来が悪いのかと・・タカヒロは父さんの遺伝子だな。」

「じいちゃん、僕は大学には行かない。卒業したら暫くバイトしてお金を貯めて、音響の学校に行くつもり。もちろんギターは続ける

さ。音楽は止めないんだ」

「そうか。俺はなんにも言わねえ。、ただ学校は休んじやいけねえ。今が一番楽しい時なんだぞ。行きたくても行けなくなったら・辛いぞ・」隆は窓の方に視線を移しながらそう言った

少し影のある視線を落とした隆の表情が気になったタカヒロ

「わかった。明日もう一日だけ休ませて。りっちゃんにも言わないといけないし。」隆は黙って頷く

「そうそうタカヒロ、あのな青葉台のバス停あんだろ。あの近くに高校が、今でもあるかな？その高校の正門前の坂を下ったところに<下野楽器>ってあったんだよ。そこがもしあったならそこに出してみてくんねえか」

「青葉台高校ならあるよ。運動部の奴らがよく試合行ってるし、中学の同級生が行ってる。でもそこ軽音部ないだろ。連れが嘆いてたよ。昔はあったらしいよ。あの学校、結構古いよね」

「あるのか！そうか！じいちゃんの母校なんだ。」

「え？そうなの？」

「その軽音部、たぶん俺らが最後なはずだ。それから、軽音部が無くなったのはたぶん俺のせいだ。たぶんじゃなくて、そうなんだ」

「・・・」淡々と話す隆にタカヒロは黙ってしまふ

「聞きたいか?」明るく言う隆に

「聞かせてくれんの?」

「長い話だぜ?寝るなよ」隆はまず目を閉じて、そしてゆっくり目を開けた

若葉の頃<1>

隆、高校三年の春

軽音部代表 広沢律子

---

放課後、律子が召集をかける

「みんなー！はいーはいー集まって。文化祭のミーティングしまーす。」

「今年はなんと！我等が軽音部25分も貰いました！去年より10分も多くいただきました！拍手！！」

「ほんとに？じゃ何曲やれんだろー？」

「なんでなの？」

「まあー今年が創立10周年って事もあるんだけど、三年前からの私達のライブの評判がかなり良かったみたいなの！」  
息つく間もなく話し続ける律子

「一年生には今から説明しまーす

毎年、二部構成でやってるのね。一部は勿論 BEATLESで

二部は毎年アイデアを出し合い変わり種をやるんです。一部は午前の部の最後で、二部は午後の部の一番組。

では、ここからはボーカル担当の河モンから宜しく！」

「河モンこと河本が説明しまーす！」

俺らが一年ん時は、二部は化粧バリバリにやってビジュアル系で曲は勿論 BEATLES。一部はバラードを混ぜた大人しい系ね。まあ yesterdayとかその辺ので二部は盛り上がり系をやった訳。

二年ん時はさー 事前にさ、自分の好きな言葉とかを集めてさもちろん先生からもね。みんなから1フレーズづつくらい貰って繋げるんだ  
一年生わかる？」

「あんまりわかんないっす」

「だよなー」。

えっと タカ、弾いてくれよ。」  
隆がギターを手に前に立つ

「校長先生のフレーズは < 雨にもマケズ、風にも、>  
> ジャン!  
んで生徒のが < 煙草をふかす、> > ジャジャーン!

家庭科の先生が < 味噌汁の匂いが、> > ジャラジャラ!!  
隆のギターが合いの手になり部屋に響く

後、< ヘド吐きそうな退屈な日々>や 数学の先生は< サイン コサイン、> >



まあー こんな感じでフレーズを集めた。先生達と生徒のフレーズの温度差がこの歌の面白みなんだ。で、おいら達が繋げて作曲をするって感じた。」

「はい！質問く〜なんかあ〜生徒の言葉が荒っぽいんですけど、真面目な言葉もあつたはずですよ。」

「・・・もちろんありましたが、ROCKには向かないので却下しました。」おどけて河本は言った

「ではでは、タカ行くぜ！」

2人は目で合図してジャツジャ・得意のリフで

「雨にも風にも負けない場所で  
俺らは煙草をふかすんだ

初心忘れず サイン コサイン タンジェント

ヘッドが出そうな毎日でも  
俺らは教科書開いてる

俺達みんな サイン コサイン タン

ジェント

鉛の体を引きづって 実験室で馬鹿やって

爆発寸前大目玉

学校なんて ららららら  
味噌汁飲んで バスに乗る  
可愛いあの子に会うために  
やればやる時やりましょう

バ行バ行ららら 「ジャラジャラジャラ  
、、、ジャジャーン」OK!!」

みたいな？ 感じだ

「まだ覚えてる すぐくねえ？俺ら！」 河本は隆に親指を立てた。  
河本と隆は親友だった

「いいっすね！それ！」  
今年もそれにしましょうよ 「考えるのが面倒な1年がそう答えた

「やらない。」  
「同じものはやらねえ。」 2人が一年に揃って言った

「軽音部の名が廃る！」  
少し笑いを取ってからガンガン系で締めたんだっけな。」

「だけど今回は時間もある」と隆。

「逆にプレッシャーじゃね？」

それに、練習時間あんまりねえよな。  
まだまだ先とは言え俺らはりっちゃんとは違って追試組なんだぜい  
つも。しかも三年だろ？ちよい敵しいよな、隆もいつもやべえ  
んだろ。

俺は母さんに毎日怒られてんだよなー・・・

「俺とこもだよ、成績下がったら音楽なんて止めてしまいなさい！  
！って。」  
「ドラム担当の下野が言った

「あたしんちも」「同じくー。」

三年メンバーほとんどが口々に答える

隆は言う

「最後なんだぜ。俺らの文化祭に親、関係あんのか？甘い事言っ  
てんじゃねえよ。やる気あんのか？」

河本が隆の言い方の生意気さに反応したのだ

「おい隆、言いすぎだぜ。実際問題、俺ら毎日一生懸命取り組んで  
るだろ。好きだから頑張ってるんだよ。

「ただこの学校に入った理由ってなんなんだ？中学から頑張ってる勉  
強して、競争率高いこの憧れの高校に入ったんだ。それに、俺ら一  
人で大きくなった訳じゃないだろ。もちろん今が青春ってやつだし  
さ。」

「けど3年なんだ。1、2年時みたく行かないのが現実なんじゃない  
の？それを非難するような言い方は良くないぜ」

「じゃ、今すぐ止めるよ。どんな時も中途半端はどうなんだって話

だ。おかーさんが？怒るから？

おめえら、まだかあちゃんのおっぱい吸ってんじゃねえのか。てめえの人生じゃねえのか！」

互いにヒートアップする

他のメンバーも加担する

「あのさ〜先生って呼ばれる親を持った人はやっぱ違うんじゃない？どんな事も許されて。お金で解決する術を持つてる。俺たちも金で解決してみたら？」 「下野・言い過ぎ。」 河本が下を向きながらボソっと言う

「おい、お前もう一回言ってみろ！表でろ！！」 隆はギターを荒っぽく置くと下野の首元を掴んだ

「もう、止めなさいよ。」 黙ってじっと見ていた律子が冷静に止めに入る

「なんでそうなるかなー。隆も河本も下野もみんな出てって。この教室から。今すぐね。部長命令よ。」

「はあ〜やっつてらんねえ〜」と下野がさっさと教室を出る

「りっちゃん、また隆の味方？」

「はあ？何言ってるの？誰の味方でもないわよ」 律子は自分が纏められない事に悔しくて涙目になっていた

ベースの女子もキーボードの男子も、ドラムもみんな帰り支度をし 部室を後にした

隆は再びギターを掻き鳴らす

今し方、言い合いをしたこの騒がしい教室での出来事がなかったか

のように……。

「律子、文化祭は9月でまだ先だ。進路指導習慣は活動出来ねえけど俺はやるぞ。」

「……練習時間が僅かでもなんとか成功させられる方法を考えよう。セトリを2人で案だして、河本に相談しよう。メロディ特集もいいかな。繋ぎはダサくないものを俺と河本で責任持って考えるよ。」

お前一人で抱え込まなくていいよ。」

「隆……ありがと。今日はなんか優しいんだね」

「は？優しかねえよ。ウサギみたいな赤い目したってちっとも可愛かねえしお前。ウオンバットって感じだぜ？」

「隆~~~~~!!!!!!」

オレンジの光がカーテン越しに柔らかく2人を包む

「帰ろうか」

「うん。」

その様子を廊下で聞いていた河本は足音に気を使うように下駄箱の方へと向かった

## 若葉の頃<2>

二人はバス停に向った

青葉台高校からバス停まで五分

並んで歩くものの、二人はほぼ無言だった。  
バス停付近に差し掛かると隆が口を開く

「律子 少し時間ある？」

「ん？何？」

「この先に墓場あるの知ってる？  
今から行かねえ？」

「嫌ーよ！気味悪い。」

「違う違う、墓場の手前にいい場所があるんだ。俺の秘密基地。  
行く？」

「秘密基地なの？ほんと？なんか楽しそう！行く行く！」

二人は道路沿いのバス停の後ろの坂を下って行く  
10分くらいすると大きな木が見えた

「あそこ」 隆が指を指す

近くまで行くと立派な桜の樹だった。

「わあ！綺麗！他の桜より色が濃いねー。それに散ってもおかしくない時期なのに今、満開だあ。」

「この樹は地元の人達が植樹したんだ。その後ろに見えるお墓に眠る人達の家族の有志だね。」

愛する人達が寂しくないようにこの殺風景な丘にね。で、樹木葬って知ってる？」

「うん。自然に帰りたい・とか桜の樹の下で眠りたいって人の為のでしょ？」

「そう。だからかな、

俺はね ここに来ると気持ちが安らぐんだ。それに  
ここだとガンガンにギターを弾いても文句言われねえしさ。」

「ゆっくり眠ってらんないわね。みんな。」

「だろ？だからたまにいるんだ。俺 見えるんだ。」 真剣な顔を  
して言う隆

「うそ？」 目を見開けて驚く

「そこにいるよ」 律子の横に視線を移し、指を指してみる。

「うそー！ー！」 泣きそうになる律子

「ばーか。 見えてたら ところで練習しねえよ。」「半笑いしながら律子をみつめる隆  
「なーんだ。」

「だけどさ・・・ 急に弦がパチンって切れたり、」

「うそ？」

「嘘。」

「お前はほんとになんでも信じるんだな。」

「当たり前でしょ。」「口を尖らせ拗ねる律子

「律子。あのさ ここにたまに来ねえ？」

律子はドキつとした。先程の恐怖に慄いたドキつではなく胸が騒がしくなる前兆の波動の強いドキつだった

「もうすぐ進路指導週間で教室使えねえし ところで練習しようと思  
う。お前も付き合えよ」  
律子は嬉しかった

口数も少なくて普段ギターの事しか話さない隆が 自分の秘密の場所を教えてくれた事や  
桜の樹の事。 普段とは違う一面を自分にだけ見せてくれた事が嬉しかったのだ



それだけではなく  
自分の中に眠っていた気持ちに気付いた。

磨りガラスだった心の奥が今にも割れそうな薄い透明の硝子に変わったのだ

誰にも覗かれてはならないのだ  
それは当の本人の隆であっても。

「隆 あのさ、」

「何？」

「この場所はみんなも知ってるの？」

「さあ、どうかな

わかんねえ。俺は一人でしか来た事ねえからな。」

「じゃあ、この場所は私と隆しか知らないって事かな？」  
特別な関係になれるんだろうか？気持ちが焦る律子

「さあー？」

「あのね・・・この場所で練習する時だけ　夕力って呼んでいい？」

学校の皆は<隆>と呼んでいる。親友の河本だけが<夕力>と呼んでいた。小学校からの長い付き合いの河本が、そう呼んでいる。律子はそれだけの、ただそれだけの事だったが<夕力>と呼んでみたかった。

「なんで？」 隆は不思議そうに答える

「理由がいる？」 律子は答えも用意していた

「別に。」 相変わらずぶっきらぼうに返事をする  
拍子抜けした律子は

「なんなのよ。いつもボソツとしかしゃべらないのね。普通は、  
んでここだけ呼び方を変えるの？とか聞くよ？」

「そうなのか？ じゃなんで？」

「嫌よ・・・ もう教えたくない。」

「変な奴だよー 女はわかんねーよ だからめんどくせ。」

「女は面倒臭いの？」

「律子は女じゃねえだろ？ 気が強いしさ なんかも男前だよ。」

「ひどいわねー」

「だからそこが好きなんだよ」  
隆はサラっと言う

「何？今の？ これは告白？でもないわよね。」

そんな、風に吹かれそうなあつさりとしたもんでもないわよね？告白って。>

律子は頭の中で混乱した

「律子。俺が適当にメロディー弾くから お前歌ってみろ。」

「い、いきなり？・・・わかった。」ちゃんとした告白を期待しながら、サラッと流れてしまった事も今の律子にはそれで良かったのだった

こんな時間がずっと続いて欲しいと思ったからだ。

間もなく日が沈む夕日のオレンジと空のコントラストが美しい大きな樹の下の小さな二人

隆の奏でる音と律子の声が  
小高い丘の上で木霊する。

### 若葉の頃<3>

次の日の昼休み 河本が律子を呼び出す

「りっちゃん 文化祭の時間ってやつは減らしてもらわねえ？練習の時間を考えるとやつは無理かも。俺たち・」

下野達が昨日、隆に絡んだけど気持ちが一杯一杯なんだと思うんだ。もちろん隆の言い分も間違っではないけど、あいつの言い方がな！。

「

「・・・うん。みんなの気持ちは分かった。だけどせっかく時間を貰ったんだよ。ほんとはいつも賞を貰ってる演劇部やバトン部の方が時間が長いはずだった。だけど生徒会のアンケートで私達、軽音部が評価されたんだよ。貴重な時間を貰ったんだよ。」

私の説明不足も悪かった・・・今日の部活の時にみんなに話してみる」

「ごめんな。あ、それとりっちゃん・・・もし時間が余って仕方ない時は・・・俺なんか考えるから！」

「ありがとう！！助かる！」

5時限目の開始のチャイムがなる

二人はそれぞれの教室に戻った

開始前に律子はみんなに説明した

下野が言う

「部長の言いたい事は分かるよ。でも現実には厳しい。俺らだってやる以上は完璧な演奏をしたいと思ってるよ。オーディエンスの心を掴むようなものに仕上げたい。だけど練習量が足りない。

家に帰ってはもちろん親にやいやい言われるし。ほんと厳しい。さつき隆と河本がちらつと言ったけど

メロディやる意見 俺は賛成だ。最後の集大成だし。

一年や2年がもつと人数居れば2部を任せられたのにな。

だから・・・1部で精一杯なんだ。」

他の3年も同じ意見だった。気持ちは同じところにあった。

「みんな中途半端な気持ちでライブをするわけじゃない。それは分かるだろ隆？」

隆は頭では分かっていた。だが納得したかと問われたら yes とは言えない自分もいた

「・・・仕方ねえ。河本はどうなんだ？」隆が頼杖つきながら河本の方を見る

「みんなの気持ちは文化祭のライブに向かっている事も分かった。だけど俺も2部までの余裕は厳しいかなと少し思った。だから一部を最高の出来に仕上げ、2部は下野以外、ユニットって感じで2組みほど作ってアコギで座ってやってみるとかー 山下は例えばクロマ

チックハーモニカがバリバリ上手いし、梶谷はカホン出来るし、なんか案出せばあるぜ？俺は・・・」

河本の話最後まで聞かず隆は発言する

「俺が律子と2人でユニットするぜ。どーせみんな時間ねえんだろ？山下、梶谷どうだ？」

「うん・・・時間が・・・やっぱ・・・」

「俺もな。1部でカホンも入れていくよ。o b l a d i o b l a d a みたいなんだつたら楽しくなりそうだし！2部はりっちゃん  
と隆に任せるよ」

河本は心が苛立った。＜なんで隆が律子と・・・＞  
悔しかった。

「隆！いいね！それ！ダブルギターでガンガンやってみる？」律  
子が弾んだ声で言ってみる

「いいや、俺が弾いて律子が歌えよ」

律子のはにかんだ顔を河本は気付いた。

ガラガラ

教室の扉が勢いよく開いた

「新聞部です。文化祭の案内文と写真をお願いしたいんですが」

律子が席を立った

「あー 案内のコメントは後日にして貰っていいかな？写真は今日、全員揃ってるし宜しく！」

「なんにも決まってるじゃないんですか？」新聞部の部長が不服そうに言った

「ちょっとね揉めたりいろいろあつて。だけど大体でいいかな？」  
1部にはメロディ特集&いろんな楽器。2部は 特別ユニットによる演奏だと告げた

「へえ〜楽しそう！いろんな楽器つてどんなのですかね？えつと全体の写真とユニットの写真、それから楽器の写真と計3枚で行きます。コメントは早めに下さい。構成の都合もありますので」  
まるでマニュアルがあるかのようにサラっと言った

次の瞬間、フラッシュをたき始めた。

「OKです！最高です！ 楽器は今なければ明日また願いますね！ではユニットの写真下さい〜黒板の前辺りに来てもらえますか？」

「めんどくせえな〜」隆は写真が嫌いだった。笑顔を作るのが苦手だからだブツブツ言いながら移動する

「隆！笑いなさいよ！2ショットなんて撮れないんだからね！律子さんの写真は貴重よ？」

「はい撮りまーす！山村君 笑ってくださいーい！ハイ チー・・・笑ってください〜」

「早く撮れよ。」

「は、はい・・・」カチャ

「あ、ありがとうございます〜」

「隆は相変わらず怖がられてるね？」  
「あいつは何枚も撮る気だっただぜ？素人の癖によ〜」

「そうよね！隆はプロなのにね？」律子が茶化す。

2人の空気が日に日に濃くなってる事に気付いたのは河本だけだった。

「・・・りつちゃん、嬉しそうだったね。写真の時の笑顔・・・可愛かった。・・・俺も力になれる事あったら言ってね。  
応援してるさ」

「あー 河もんありがとう！  
ねえ 隆〜どんな風にするの？」

今の律子には、隆しか見えなかった

「隆、さっきの写真ね、出来上がったら余分に焼きまわしをしてもらうね。」

「いらねえーなんて言ってもだめなんだから。・・・文化祭良いものにしてあげようね。」

「ああ。」



部長としての発言でない事くらい 隆も気付いていた。  
隆も笑顔を見せるようになっていった。

若葉の頃<4>

下野が河本を呼び止める

「河もん、マック行かねえ？」

「珍しいね〜 寄り道して大丈夫かよ？」

「たまにはいいんだよ。」

なんちゆうか 俺ら学生は自由なようでもそうじゃねえな。 監獄の中の昼休みにグラウンドで自由に過ごしながらもサイレンと号令一つで手枷、足枷がまた付けられるようなさ、家でも学校でもな。

俺な、お前に隆のギターの事を聞くまでアイツに嫉妬してたつて言うか、。アイツの親父さんは政治家だろ？この町の奴らはみんなへーこらしてさペコペコバツタ。

アイツがある日 新品のギターを抱えて来た時には  
やっぱ金持ちはいいなって。お強請りすりゃなんでも手に入る

だからアイツはあんなに態度がでかいってね。

だけどアイツのギターは悔しいけどココに響く」

下野は自分の左胸を拳で叩きながら言う

「ハングリーな何かが打つんだよ。けどお坊っちゃんまじゃねえか

何が分かるんだって！一人僻んでる俺がいた

まさか新聞配達？朝暗い内からアイツが？

俺は今までアイツが吐いてきた言葉を思い返してた

全て理に適ってやがる

誤解してた。」

河本も口を開く

「それがタカなんだ。小学校から同じだった。

中学で俺は陸上部でアイツは帰宅部だった

まあアイツは毎日ギターを弾いていたな

河川敷や駅前とか

人が集まるうが関係なくて。

次第に俺らはすれ違ったな

同じ高校に来てた事も知らなくてある日、メンバー募集の紙を手  
にやってきたのがアイツで、それが再会みたいな感じだったかな

あんな無愛想なくせに なんか優しさがある

目に見えた優しい優しさじゃないぞ。わかるか？

昔、こんな事あったんだ。

モルタルの古い壁に女の子が知らないでもたれてたんだ。女の子の背中は真っ白になった。そしたらアイツ

「お前はどこもたれてんだよ！>>って偉そつに言いながら、<<く普通に通に背中を手で払ってあげてた

エレベーターではさ、スタスタ先に行ったかと思えばドアが閉まらないように自然に押さえてたりとあいつの優しさはするいぜ？ 惚れるぞ！」

笑いながら話す

偉そつに言う癖に何故か女にモテやがる いつもおいしいとこ持つてくんだ。ゝゝゝ

「そうなのかよ。らしいと言えはらしいな。なんでも真剣にやるしな。」

「ただ口が悪いなー」

「ただ口が悪いな〜」

二人は同時に同じ所をつく

「文化祭、成功させような。」

「おう！」。

——— ちょうど同じ頃

隆が家に帰り着くと玄関に恰幅のある白髪混じりの男性がいた

「では 何卒宜しくお願いします」

その男性は隆を見るとにこやかに会釈して玄関扉を開けて 帰って  
行った

隆は思った

<またかよ。今回は岐阜の松風か？ 栃木の蔵だいこか？或いは北  
海道の白い恋人？・・・>

幼い頃から幾度と見たこの光景

———  
母さん お菓子食べたい！、  
隆それはだめよ。 箱に入ってるものは勝手に開けてはだめよ  
母さんが後で買ってあげるわよ

やだやだー！

菓子箱に触れるだけで父親に怒鳴られた

---

中学生になり世の中の仕組みとやらを勉強するようになっ  
てからなぜ怒鳴られたのかを理解した隆だった

隆はいつものように

「ただいま父さん、母さん。」 挨拶をきちんとするもの、  
自分の部屋に直行した

むしゃくしゃとした気持ちの根源は分かっていた

そんな時に決まって見るビデオはギタリスト特集だった

隆はJIMI HENDRIXのギターがたまらなく好きだった

胸の中の苛立ちを綺麗に剥離する術はそれしかなかったのだ

大人ならアルコールに頼っていたところだ

朝に、母親が言った言葉を思い出す

<文化祭の日ね、 父さんも見に行くらしいわ>

父親が息子の為だけに来ることはないと大人に近づくにつれ分かっていた隆

<ああ・・・。三年で最後だし良いものにするから。・・・父さんもびつくりするようだね。>

作り笑いをしてみた隆だった

## 若葉の頃<5>

軽音部の面々が同じベクトルに向かって走りだした。

河本も文化祭に向け隆と協力し、自身の気持ちを封印した。向かうべき、やるべき事はただ、一つだと・・・。

「隆と河本で進めてくれたセットリストを発表します」律子がメモを見ながら話す

- 1、Revolution
- 2、Help
- 3、Can't By Me Love
- 4、All You Need Is Love
- <メンバー並びに楽器紹介>
- 5、I Want To Hold Your Hand
- 6、Ob-La-Di Ob-La-Da
- 7、She Loves You
- 8、Hello, Good Bye
- 9、In My Life

以上のメロディ特集で行きます

ギター、ドラム、ベース、キーボード以外の使用楽器は、クロマチックハーモニカ、タンバリン、カホン  
後、ハンドクラップも入れて行きます



隆、河もん 続けてください

「can't by me loveではエフェクター ワウペダルを使う、

繋ぎの部分も後々言うが山下はバッキング。

3曲目で俺と入れ替わってくれ。

I want to hold your handでは梶谷がハンドクラップ、オーディエンスを誘導してくれ。

she loves youでは一年でタンバリン・・・8曲目では俺と河本ダブルボーカル。

・・・このセトリにはいろんな思いが入ってる。特に3年の俺らは今までいろいろあった。

一年に言っておくがセトリってのはとても大事だ。曲調を揃えるだけでなくオーディエンスの心の目を向かせることだ。ワンマンになつてはいけない。わかるか？

まあ一番大事なのは俺らが楽しむ事だ。いい加減な気持ちでやれば向こうもそういう目で見ろ。

隆の白熱した指導は続く

「2部は隆とりっちゃんて・・・Hey jude。隆がアコギに持ち替えフルの7分で行く。」隆に代わり河本の説明が続く

それから俺たちの当日の衣装は上は黒のTシャツ。背中に文字を入れる。

その文字は<Revolution>革命だ！！

以上。

軽音部は6時半までの練習は許された。受験組は仕方なく帰って行く隆と律子は二人だけが知る場所で部活の帰りに毎日立ち寄る

「律子！おめーはサビの部分の声が弱いんだよ。ハリがない。」

メンバーの中で唯一呼び捨てにする目の前にいる少年がやけに大人びて見えた

少年は男らしいゴツゴツとした指で優しくアルペジオで音を奏でる

律子にはそのギャップがたまらなくドキドキとしたのだ。

普段 無口で偉そうに話す彼なのにギターを抱え弾き初めると柔らかないい音色を出す。

エレキの時は大人顔負けの技術でジャカジャンと掻き鳴らす

律子はいつの頃からか信頼や尊敬

それが恋という感情に移り変わるまで 時間はかからなかった

ただ メンバーで活動して行く中で 特別な感情はご法度だとは分かっていたが……。

心にしまったまま 高ぶる感情を押し殺したまま 毎日の練習をたまたま喜んでいた

「律子。俺、お前の声好きだよ。良いと思う。」

律子は心臓が破裂しそうだった。

「だけど、なんかなんねーのか。そのサビンとこ。も一回Bメロから行くぞ。」

「な、なによ、褒めたと思ったらすぐけなすなんて。

ギターの技術でなんとかカバー出来ないの？出来ないもんは出ないのよ。」

「俺は弾く。お前は歌う。カバーも何も無いぞ。」

冗談で反論しても真面目な顔で返答する

そんなやり取りさえも心地好いほど

律子の心は熱を持った

「私の事嫌いなんでしょ？だからきつい言い方するのねいつも。分かったわよー！ギターに負けないくらいになってやるわ！

一章節目から通してやるわよ！さん、はい！」

クスクスと笑い出した

勝ち気な性格な癖に弱い部分を時折見せる 律子の事を隆もいつしか同じ感情になっていた

「律子、お前の声 聞こえねえから 正面じゃなく真横に来てくねえ？」

「なによ、私に指示するの？」

あなたのフィンガーテクを見なければいけないのにさ？代表としてね。」

相変わらずの口調で横に移動する律子

「じゃ 最初から通す……」

不意に律子の唇に隆の指が。 内緒のシー どうしぐさで人差し指を律子の唇に当てる隆

冷たい風が隆の指の温度を下げていた

律子の唇に隆の指の温度がひんやりと伝わる

ドクドクと心臓の鼓動が波打つ

柔らかい律子の唇の感触を確かめるように 隆は自分の指を左に右

にと移動させてみる

隆の真つすぐな瞳が律子を見る

律子も見ると

「ハハハ何ドキドキしてんの？」

「はあ？ いい加減にしてよね！！」

ドキドキした気持ちを見透かされた事に腹立たしさと恥ずかしさが入り混じった。

律子は右手をあげ 反撃に出ようとした

隆は律子の右手を反射的に掴み その手をグイッと引き寄せた

次の瞬間

二人の唇は

同じ温度を持った。

ただ重ねるだけの柔らかかな時。しばらくそのままだった。律子は薄目を開け、近付いた顔を確認する。目を閉じた優しい顔がそこにあった。律子がゆっくり腰に手をかける。同時に律子の背中に温かさを感じた。

満開の桜が半分緑になり、そして木々の全体が緑一色に変わる頃  
二人の気持ちも新緑のように季節を変えようとしていた。

ヒラヒラと最後のひとひらが舞い隆の肩に辿り着いた

若葉の頃<6>

隆の肩に舞い降りた　ひとひらの桜の花びらを律子はこっそりとポケットにしまっていた

二人だけの場所でたたずむその桜の花を律子は調べてみた。

北海道から来たその桜は<紅華　コウカ>と呼ばれ通常の桜よりはやや遅咲きで色も濃いものだった

「あーだから最後まで残ってたのね。」

その紅華の横には珍しく二部咲きの<十月桜>と呼ばれるものも植えられていて　全国でも珍しい場所だと  
言う事も分かったのだ。散る桜の横で、新たに芽吹きを待つ桜。

律子は

きつと忘れない。そう思っていた。なんとなく<永遠>というものを感じたのだ

「隆、いよいよだね！」

Hey Judeのアルバム、返さなくていいからね」

「ありがとう、借りたもんは返すさ。ただ文化祭終るまで もう少し聴いてていいか？俺には俺の音があるんだけど、・・まだ聴いていたい。必ず返すからさ」

「うん。分かった。じゃ 手垢一つ、付けないでよね！大事なもんだから。」

「あ、ああ」

「冗談よ！タカなら許す！」

「おい タカって呼ぶなよ。」  
頭をかいて照れる隆

「今は二人だし！いいじゃない？タカ！タカ！タカ！タカ！タカ！タカ！  
！」

「お、おい！」

「ここでいきなりキスしてやろうか！」

「ダメ、ダメよ！」

はしゃぎながら階段を駆け上がる二人



先に教室にいた下野が隆を呼ぶ

「隆 順調か？ユニット？」

「まあな。

そうそう、下野ジミヘン好きだったよな！

やらねえ？」「悪戯な笑いを浮かべ、隆は下野の首元に手を回し、  
窓際に連れて行く

「ん？何を？」

「相談があるんだけど。 サプライズだ。 ・ ・  
ラスト2曲からドラムのテンポあげてくんねえ？」

「テンポ上げるのはヤバいんじゃない？」

「大丈夫みんなちゃんと聴いてるから  
時間を作ってやりたい事がある  
お前とやりたいんだ  
俺ら最後だぜ？」

けしかける隆

「そうだな、 、 最後だな。 俺ら。 けどなんで内緒に？河本  
とかりっちゃんには？」

「ダメダメ出来なくなっちまう。」

「・・・隆、まさかとは思つが、」

「そうだ。そのまさかをやる。」

「へえー。面白そうじゃん？」

「だろ？ おぬしも悪じやのう？」と隆が言つと

「いえいえお代官様ほどでは・・・」と下野がおどける。

アツハハハ

「革命だよな！」

「俺らは自由になるんだ。」

「おーい！新聞部の壁新聞と当日のパンフレットが掲示板にあるぞ  
！」

河本がやってきた

「じゃ、下野。男同士の約束だ」

「おう。」二人は右拳を付き合わせた

「あ、言い忘れたけど下野、この前聴いてて思ったんだが、少しだけ音が響きすぎてる感じがしたんだ。

もうちょっとタイトな音が欲しいんだがどう思う？」

「そうだな同感だ。裏面をキツ目にチューニングしておくよ。」

「うん よろしく。」隆は全力でライブの成功に掛けていた

「何をヒソヒソ話してたんだ？」二人を呼びに来た河本が聞く

「女の話に決まってんじゃない」下野が答える

「廊下の掲示板にさ、各クラブの出し物の詳細と写真が張り出されてたから見に行かねえ？」河本が誘う

---

#### 文化祭当日

保護者や近隣の一般客が続々と正門から入り始めた

「幸助〜」

「あ、かあちゃん・来たんだ・・・」 下野の母親が自宅工場か

らそのままの恰好で来た。そして大声で息子を呼び止める

「来ちゃ行けなかったのかい？」

「エプロンくらいはずしてきなよ・・・参観とかも昔っから来なかったくせ・・・」

「学生時代は最後だろ？父ちゃんは工場の受注が特急だったからどうしても無理で。」

最後ののにさ、ごめんよ幸助。それと大学のお金なんとかなるよ。大村の伯父さんに借金する事にしたよ。

幸助頑張ってたから。 今日かあちゃん見てるから。 頑張んなね  
！」

「・・・うん」

「もっと喜びなよ！ 大学を諦めなくていいんだよ。」 小さい子に  
接するように幸助の頬を両手で挟みながら母は言う

下野は悩んだ。

男の約束、母との約束、

行きたかった大学へ行けるチャンスを自らの手で潰そうとしている

<アイツは金持ちで、金の事なんか考えなくていい、苦勞せず  
すんなり行けるんだろ・・・>

<俺たちは自由だ！・・・男の約束・・・突き合わせた拳に俺は嘘を  
つこうとしている・・・>

「下野~~~~りハよ！」 部長の律子の声が出た。

「りっちゃん・・・どうしたらいいんだ俺・・・」

「どしたの？ 顔色悪いよ？ なんかあった？」

下野は苦しくなって律子に打  
ち明けた

「俺は最低だ。 男の約束も守れない。 自分がかわいくて、でも。  
」

「下野。言ってくれてありがとう。人はそれぞれなんだよ。自分の人生じゃない。自分で決めていいのよ。」

私が出野なら同じように決断してたもの。」

「隆の事、河本に言うの？止めるのか？」

「いいえ。聞かなかった事にする。隆も止めない。彼も彼が選んだ事だもの。結果がどう転ぼうとね。」

ただ下野、テンポは変えないで！リハも今のままでやって。

みんなには迷惑掛ける事は許さないわ。部長としてね。

その後、どうするかは隆が決めるでしょ。

「……2部も……まあいいや！後は運にまかせましょ！」明るく律子は言った。

下野は少し落ち着いたのだった

## 若葉の頃<7>

「軽音学部の皆さん　体育館に集まって下さい  
放送が入る」

当日リハーサルだった

楽器のチューニングの関係で軽音部は当日のリハーサルとなった

「15分ですので　時間厳守をお願いします。」　部長の律子に言う

---

リハーサルが始まり

それぞれの楽器のチューニングも終る

「じゃ、軽く通しと、繋ぎ部分メインで行くわね。」　律子がメ  
ンバーに告げた

隆は軽く下野を見るが、下野は下を向いたのだ。

隆は無表情でリハーサルに集中し、

下野は律子の言う通り通常のテンポで通した

そして、問題なくリハーサルは終了した。

下野が隆に近付く

「隆、あのさ、」申し訳なさそうな表情の下野

「分かってるよ。　　今がお前の答だろ  
気にするな。」

「・・・かあちゃん来てて。初めてなんだ　俺の為に来るなんて  
今迄になくてよ。  
出来ねえんだ。」

悪い、　隆、　　やっぱりヤバいんじゃないかと、　　」

「そつだな。」

お前の言う通りだ。かあちゃんを泣かしたらダメだよな。」

下野は隆の返事に少しだけホツとした

「隆！　本番頑張ろうぜ！」

下野は右拳を突き出した。

隆は左手でギターを抱えると右手はポケットにしまった

「後でな！」笑顔で隆はそう言うと、下野に背を向けた

下野は唇を噛み締め、項垂れた

二人の様子を少し離れたところから見ていた律子。

下野の方へ律子が近付きこう言った

「下野、ちよっとつきあつて！」 「え？」

律子は体育館横の水道の所へ下野を連れて行く

「そこにバケツあるでしょ。それに水汲んで。」

「え？」

「いいから、早く！」 「う、うん」 律子の言つがまま下野は蛇

口をひねる

勢いよく水が出で、バケツはあつと言う間に一杯になる。

「それ、頭から被んなさい。半分残して。」

「え？なんだよ。正気かよ？もうすぐ本番だぜ？びしょ濡れになつちまつよ。」

「あんたね、男でしょ？約束を守れない事に落ち込んだりさ、隆に遠慮したりさ、そんな気持ちでライブが成功すると思つてんの？ドラムはバンドの要なんだよ！あんたのリズムが気持ちで狂ったら大変なのよ。」

頭、冷やしなさいつて言つてんの。」

「けど……」

「私が先にやるわよ。」 律子はそう言つとバケツを持ち頭から半分だけ水を被つた。

衣装のTシャツも綺麗に結つたポニーテールもびしょ濡れになつた



「りっちゃん…… わかった。」律子の半端ない行動にビツクリした下野だった。そして  
下野も続いて頭から残り半分の水を被る

バシヤツ！

「うわっ パンツまでいっちまった・けど、なんかスッキリしたかも。気持ちいいや！」

「結構濡れたわね。」律子は下野のＴシャツの裾を優しく絞ってやる自分のＴシャツも軽く絞ると

「今日は暑くなるし大丈夫よ。……悔いの残らないように……やる！ね！」

じゃ出番は１１時４５分。宜しく！」

メンバーが二人を見て驚く

「どうしたんだお前ら？」

「華道部の子とぶつかっただ」律子は答えを用意していたかのよう  
にすんなりと答える

下野は 慌てて「そ、そう、花もバラバラになって大変だったよな  
」と合わす

各クラスの展示物にも人が増え始め、外の模擬店も賑わって来た

「ご来場の皆様へ お知らせ致します。 9時30分より体育館にて、  
2年生、演劇部、バトン部、軽音楽部によります舞台が始まります。  
2部は軽音楽部、3年生の舞台が始まります。体育館へお越し下さ  
い。」

体育館には暗幕が張られ、人の熱気でムンムンとしていた。出し物が次々と進む

「次は軽音楽部の皆さんです。軽音楽コンクールでは優秀な成績を修められています。

では、お願いいたしますくビートルズ・メロディです！」

キユィーン エレキの歪む音が静かな体育館に鳴り響く

dadadadadadada!!! リッケンバッカーを抱えた律子とギブソン・レスポールの隆がダブルギターで入る

dodododo dodododo!!!! 下野のドラムが続いて響く

「AHO !!!」ボカルの河本が叫ぶ

「HUU!!!HUU!!!」オーデイエンス3年生が立ち、そして叫び一瞬で会場が一つになる

一曲目の〈Revolution〉の選曲は見事に当たった

2年、一年も総立ちになり先生、保護者も手拍子をし体も揺れ出す

メンバー紹介を挟み曲が進むと同時に舞台もそして観客の熱も上がる

暗幕を引かれた暗い会場の中の スポットを浴びたメンバーは皆、表情も光っていた

ラストの曲が終わるとアンコールの手拍子が鳴り止まない

律子は舞台袖の生徒会会長に〈お願い〉のポーズをとる

生徒会会長は渋い顔をしながら時計を見ようとした

OKの返事を貰う前に

ドラムの下野が

スローテンポでたたき出す、

律子がテンポを聴きながら ある曲のサビのワンフレーズ弾き出した

律子のフレーズに続きキーボードがイントロ部分を弾いた  
アイコンタクトだけで繋がる最高の仲間達

会場がざわめいた

<LET IT BE>だった

河本がマイクを掴み叫ぶ

「一緒に歌おうぜ！」と

誰もが知るその歌はもちろん盛り上がりを見せた  
共鳴し響き合う会場

オーディエンスである三年生は殆どが睨り泣いた 最後の文化祭、  
思い出の詰まったこの会場、横にいる友

全てが揃いすぎているシチュエーション。

生徒会会長も渋い顔しながらも感動に浸っていた

しかしラストがせまる。緞帳を降ろす指示を出した

ところが緞帳係りが 手で大きくバツ印をする

会長が近寄る

「早く下ろせよ！」

「ダメなんです」

「は？」

「広沢さんから合図が入るまで幕は下ろすな」と 打ち合わせであって、、、」

律子が事前に言っていたのだ

隆の今から行つてあろう危険なサプライズの為に。

## 若葉の頃<8>

「軽音学部の皆さんでした。ありがとうございました！  
第二部は午後1時30分開始です」

暗幕が開き会場に光と風が入り込む

生徒、一般客がぞろぞろと会場を後にする

メンバーも楽器を片付けだした

隆は舞台袖に用意してあった

ストラトキヤスターを持ち出しレスポールと交換した

ジャン！と弾きだす

退場しかけた生徒たちは、「サービスか？」 「おー隆じゃんか！」  
と口々言った

隆は個人でも表彰される程の腕前で学校でも有名だった

そしてDEEP PURPLEの曲を弾きだした

みんなが舞台前に集まって来る。退場しかけた保護者も一部、後方で見学していた。

その中にはメンバーの保護者の姿も見える

隆の父親と母親もその中にいた

母が言う「あのギターおとうさんが隆に買ってあげたものよ。あの

子、大事にしていたのね」

「ほう。そうなのか？私は楽器なんてまるつきり興味ないし、解らないからな、とにかく最高のものを店の中から探して隆にプレゼントしたんだがな。」

アイツも小さい時は素直だったんだがな、最近では何を考えてるのか さっぱり解らんよ。

こんなチャラチャラした事もどうせ今だけだろう。

後で、PTAの人と校長に挨拶に行ってくる。それから帰る事とする。」

「・・・はい」

冷めた口調の父親が言い放つ

一方、隆はオーディエンスの熱が上がった頃を見計らい3曲目、  
I M I H E N D R I X の曲に移る

メンバーは舞台から下りず隆の演奏を袖から見守っていた。

10分位演奏して隆は軽くお辞儀をする 隆の頭にはビデオのワンシーンがそのまま描かれていた

<J I M I H E N D R I X はオーディエンスに軽くお辞儀をした  
ギターを床に置く・・・

ポケットからオイルライターを取り出す・・・  
目の前のギターに軽く振りかける・・・  
いつのまにか手には炎が見える

そしてギターに炎を放つ  
燃えたギターを両手で持ち次は破壊行動へと移す 暴れまわるJ I  
M I H E N D R I X >

何度も何度も繰り返し見たビデオの中の男の行動  
隆はマイクを握ると叫んだ

「俺らは年明けたらこの学校を後にする。自由が何かって事も・  
本当は理解してるんだ。  
親には感謝してるよ。お前らもそうだろ？おまんま喰わせて貰って  
今日まで来たんだ。」

とうちゃん、かあちゃん ありがとう！！」「隆は親の方に向かって  
手を上げる

「あの子ったら。」隆の母親は笑顔で見守る

ジャン！時折、ギターでメロディを奏でながら話を交える隆

「アイツ恰好良すぎるぜ。全く」同級生がいい表情で隆を見る

「だけど、このままでいいのか？おまえら？親の用意した金と、親  
の敷いた枕木の上を歩く人生、  
しかもその金が黒いと来たらどうなんだ？」

「あいつ・・・何言ってるんだ・・・」河本が舞台袖で呟いた

「この最高の音色のこのギター、幾らか知ってるかお前等！！俺ン  
家はいろんな大人が出入りしてた

そのいろんな大人が来るたびに俺はいろんなものを強請った。  
こんなギターまだ何本もあるぜ！」ジャン！

「おい！下野！」 舞台袖の下野に向かって隆が叫ぶように言う

「お坊ちやまだから？お強請りしたらなんでも手に入る？大当たり  
だったぜ！」

「誰か、アイツ止めるよ。ヤバクね？」 舞台前の生徒が呟く

反対に「そうだそうだ！！金持ち坊ちやま〜〜！！お父さんはお偉  
いさ〜ん！」ヤジに似た声も飛ぶ

一部始終を目の前で見ながら、  
隆の父親は口を一文字に縛り丸く握った両手の拳は震えていた。そ  
の横で母は下を向く。

隆は幼い頃から親が町の議員で良い思いをした事は一度もなかった。  
逆にイジメに近いものさえあった  
いろんな深い・・・今までの思いが隆を追い込む

隆は最後に会場を唸らせる程の見事なギターリフを見せると  
そっとギターを置き

丁寧にお辞儀をした  
そして

ポケットからオイルライターを取り出し、オイルをギターに掛け



火を点けた

J I M I H E N D R I X が彼に憑依したかのように。

舞台袖にいた河本が飛び出し、隆の体を押さえた

隆は魂が抜けたように力を失っていた。河本にきつく腕を掴まれる

そこへ律子が近付き自分の着ていた濡れたＴシャツを恥かしげもなく手をクロスさせながらゆっくりと脱いだ。  
キャミソール姿になりながらも冷静でいた

脱いだＴシャツを燃え続けるストラトキャスターにそっと被せた

ジュツ・・ 鈍い音をたてる

下野も続いて自身のＴシャツを脱ぎ 今度はギター全体を覆うように被せた

ストラトからは白い煙が立ち舞台には、きな臭い臭いが充満した

機転を利かせキーボードの一年が<y e s t e r d a y>のメロディを震える手で弾いた

律子は泣きそうな心と声を押し殺し 部長としての言葉を言う

「びっくりさせてごめんなさい！以上！……1部の終了です！！ありがとつございました！！」

「なんだよ～～～演出かよ～～～びっくりしたな～～」生徒達はそう言いながら会場を後にした

保護者は無言で立ち去った

隆の両親は怒りと情けなさが入り混じった表情のまま素早く体育館を出た

河本は「タカ！タカ！おいしっかりしろ！」隆の肩を揺さぶりながら隆に話し掛ける

「余計な事しやがって」捨て台詞のように河本に言う

次の瞬間、隆の顔面に河本の拳が当たっていた

「お前は何したか判ってんのか！ここは学校なんだぞ！路上でも、ライブハウスでもないんだぞ！！」

りっちゃんが・・・りっちゃんがどんな思いで・・・「言葉を失い男ながら涙を浮かべる河本

「河もん・・・もう止めよう。いいよ。ありがと」律子は下を向く隆の腰に手を回した。力が抜けた隆も律子に少し体重を預けた

二人は体育館を後にして階段を上っていった。

「タカ、大丈夫？言うてくれれば一緒にやったのに。私はタカの味

方よ。信用してよ。」

「律子・・・ごめん」

「うん」

二階へ上がると展示場になつて居る教室は昼休みの為ガランとしていた。

隆はその部屋へ律子を引つ張った。

ダンボールで出来た迷路の部屋の奥に行き二人は

キスをした。

桜の樹の下で初めて交わしたキスとは違う・・・二人とも泣いていた。涙の塩味を確認するかの様に 律子は隆の頬に伝う涙の上にキスをした、そして

舌を絡めあつたのだ。二人はきつく抱き合った。

律子には痛いほど隆は律子をギュッと抱いた・・・。

律子は隆が愛しくて仕方ない気持ちになる

隆の髪を何度も撫でる。キャミソール姿の律子の首元に優しくキスをする隆

誰も居ない教室。なんのデザインも施されていない綿のカーテンが時折ふわりと二人を包んだ。

## 戻れない時間

祖父、隆の話をベッドの横で真剣に聞いていた夕カヒロ

どれくらいの時間が経ったのだろう

どれくらいの時が過ぎたのだろう、

「じいちゃん・・・で、2部はどうなったの？舞台でほんとに燃やしちゃったんだ。」

「ああ。親父の事や自分の将来の事・・・今思えばなー単純で馬鹿だったかも知れないと思う。けどこのままじゃダメになる気がしたんだよ。俺も、そして親父もな。」

あの後な、保護者が職員室に駆け込んで一部始終を話したみたいだな。二部は中止になった」

「・・・そうなの？じゃ、律子さんと二人でする予定だった曲は出来なかったって事？」

「そうだ。・・・文化祭終了後、俺は顧問に呼ばれ二人で校長室に行った。」

俺は無期限停学処分になった。しかも軽音楽部を廃部する事にもなっちゃった。

進学校だったしな、昔なんかは音楽をやってるってだけで不良みたいな扱いもされてた時代だ。

問題起こす事は分かってたみたいな言い方された上にな、待ってましたとばかりの廃部宣言だった。

顧問はな理解ある先生だった。何度も何度も頭を下げてくれたんだよ校長に。」

先生に言われたよ。今までいろんな生徒を見てきたがこんなにも一生懸命で熱い生徒はいなかったと。

しかし、さすがに火はなあって。そりゃそうだ。

俺は、みんなに合わす顔がなかった。申し訳ない事をしたと・・・心から思つたよ。

・・・律子には、一番、律子には迷惑を掛けた。アイツらが作つたのよ・・・」

「じいちゃん、謝つたんだろ？」

「俺な、その後自分から退学届けを出したんだよ。自分のした事には責任取らなきゃならんだろ。当たり前だ。

家に帰ってから親父はなんにも言わなかった。

俺はしばらくして・・・ありつたけのこづかいを手に家を、そして街を出た。もうこの街にはいらねえだろ。

文化祭以来・・・誰にも会わず、なんにも言わねえでさ 俺は他所の街に行きライブハウスでバイトしながら暮らした。

親父が亡くなつたつて知らせを聞いたのが・・・いくつだったか忘れちまつたけど街に戻つて来たのは女房と子供と一緒にだったな。」

「律子さんの事好きだったんだろ？それで良かったの？・・・もう忘れてたの？」

「そんな訳ねえ・・・だけど、それもまた人生なんだ、タカヒロ。

いろいろな出会いと別れを繰り返すんだよ人は。」

俺はあんなに好きになった女はいねえ。愛とか、恋とか、そんな安っぽい言葉で片付けられる女じゃねえ。

忘れることはなかったよ。それは今でもだ。67歳になったこんな年寄りでもだ。

俺の心の中にはずっといるんだ。ずっとな。」

「心って・・・なんか死んだみたいじゃん。」

「みたいじゃんって お前は知ったような事言うな」

「同級生の噂はいろいろ聞く。律子も結婚したらしいって話までは知ってる。どつかの街で幸せになってたらそれでいいんだ。」

「ほんとに？僕だったら探しに行くな。」

「タカヒロ、お前は若い。一年、二年前の話じゃないんだぜ？俺が今ここで話した話は50年も前の大昔の話だよ。生死もわかんねえ。例え生きていてもだ、お互い変わってる。環境も、見た目もな。笑うぜ全く。」

「逢いたい？律子さんに・・・」

「馬鹿言うな。はいはい、もう終わり。この話はおしまい。」

正直な話、お前に話しをしている途中な、何度か気持ちが悪く昔に戻ったよ。律子の歌ってる声とか思い出したらたまらなくなってきたよ。」

「そう・・・。 あ、もうこんな時間。俺ちよつと行ってくるわ

！現代のりっちゃんに会いに！」

「ん？おー、あのりっちゃんか！。近い内に紹介してくれよ」

「うん。・・・戻って来たら今日は帰るよ。帰りに楽器屋に行くし。」  
そう言っただけはいつもの雑誌も持たずにテラスに向かった。

祖父の前では動揺を隠して聞いていたがタカヒロは心が苦しかった。二人の切なすぎる過去の話に。

二人で歌う予定だった事や律子がみんなの前でTシャツを脱いでまです祖父を守るうとした事、

それぞれが自分の生き方に真剣に悩み、それでも真つ直ぐに進もうとした事・・・

今の自分と同じ年の頃の話なのに全然違う。

ポケットの写真が汗をかきそうなくらいポケットに手を入れ何度も触るタカヒロ。

<ごめん。りっちゃん。そんなにも、こんなにもじいちゃんの事を思っていたのに、、  
じいちゃんも大切に直していたこの写真を・・・僕は・・・僕は・・・嘘をついた。>

胸の中に何万、いや何十万もの小さい虫がいるかのようにザワザワザワザワしていた。

タカヒロはいつも律子と座る指定の場所があった。テラス入口から一番近いハナミズキの白い花の下のベンチに座るのだ。

出会った頃は美しい白い花をつけていたが今は緑の濃い葉っぱだけの木になっていた  
花を見上げる事なんてしないタカヒロだったが律子と出会って少しづつ何かが変わっていった

タカヒロは緑の葉っぱだけを見上げながら、真下のベンチに腰をかけた。

するとベンチにハンカチが置かれていた。いつか律子が栞を出した時のハンカチだった。藍色の布に美しい紫の紫陽花が刺繍された律子らしいハンカチだった。

そつとハンカチを手に取ると畳まれたハンカチの中から1センチ程の白い紙が見えていた。

タカヒロはハンカチを開くと絵手紙に使われるハガキが出て来たのだ

「山村タカヒロ様

タカ、今日は急に検査が入ったのでそこには行けません。ごめんなさい。

朝に先生から言われたので急だったの。

先日から手術した後がシクシクと痛んでいたの。先生は心配ないつておっしゃったから大丈夫です。

心配はしないでね。3日後また、この場所で待っています。 広

沢 律子」

タカヒロは改めて気付く

僕達はなんにも知らない間柄、タカヒロって字さえ知らない。お互い何階から来ているかも知らない

そんな僕たちが毎日同じ時間の同じ場所で会って、しかも祖父と過去に繋がっていた

奇跡に近い事だったんだ・・・全てが・・・

ハガキに書かれた短い手紙を見ながら肩を落とすタカヒロ

「あさつてから、学校なのにな。どうしよう、、、」





## 過去からの手紙

重い足取りで隆の病室に戻ったタカヒロ

「どしたんだ？早くねえか？」

「うん・・・会えなかった。  
検査だつて。」

「そうかー仕方ねえな。」

「じいちゃん、明日から学校行くよ

りっちゃんは三日後しか会えないみたい。　じいちゃん実はさ、

」

「なんだ？」

「あのさ、りっちゃんつてさ・・・  
いや、やっぱ俺からは言えないよ」

「なんなんだ変な奴だな」

「三日後また来るよ」

「タカヒロ、先生から言われたろ？」

来るなら学校が終わってから来い。　さ、たまには下まで送ろうか  
！」隆はベッドから降りスリッパを履く

「いいよー送るなんてーどっちが病人なんだよ。」

「おめえ 病人って嫌な言い方するねえ〜もうピンピンしてんぞ！ピンピンしてんのは他にもあったりしてな？」

「相変わらずだねー」タカヒロはクスリと笑う

二人は一階に降りて来た

すると隆の前を金髪のある娘が通り過ぎた

「あれ？あの娘？おいタカヒロ、りっちゃんがいるぞ！」

「え？うそ？何処？何処？」

「ほれ、あの自販機の前を見る」隆はニヤニヤしてタカヒロの腕を引っ張る

「え？自販機？」タカヒロの視線に入るのは若い男と派手目の金髪の若い女だけだった

「そこだよ。やっぱりあの小娘はダメだな。顔がいいから男と遊びまくるぞ」

「・・・じいちゃん。誰？誰あの人？あんな人知らないよ」

「りっちゃんだろ？お前が毎日会ってるあのりっちゃんだろ。金髪って言ってただろ。」

タカヒロはおかしくなった。

「じいちゃん、金髪って本気にしてたの？ごめんごめん。

違うよ。りっ、うっん。律子さんはもつと上品な人だ。それに僕なんかよりさ、じいちゃんの方が、あっいや

・・・また今度話すよ。

送ってくれてありがと。学校帰りにまた来るね。」

「、、お、おう。」隆は首を傾げながら

「律子さんか・・・律子さんね・・・」隆は自販機の前の二人を横切りエレベーターに乗り込んだ

そして、タカヒロは学校に行きだした

その頃 律子は体調を崩して一週間ほど寝込んでいた

律子も気になっていた。 がしかしテラスへ行く元気もなかった

タカヒロとの約束が気になり律子は担当の看護師である婦長に相談をしてみた

「

そうなの。 だから毎日楽しそうにしていたのね」  
婦長は親身に聞きながらそう答えた

「何か伝言あれば 伝えてあげるわよ、で

その方は何階から来られてたのかしら？」

「わからないの。 ただ肝臓を悪くして入院してると言っていたわ」

「名前は分かる？」

「ええ。 山村・・・隆。 山村 隆さん」

律子は付き添いであるタカヒロの名前ではなく

<隆>と告げた。それはどうしても確認しておきたかったからでもある

「分かったわ。調べておくわね。」

「お願いします」

「大丈夫よ。広沢さんはゆっくり養生しておいてください」

婦長はナースセンターに戻って調べる事とした。

「肝臓、肝臓、<肝胆膵外科>、<ないわ。>、<肝臓内科>、  
山村、山村 隆、ああ8階ね。」

内線で8階のナースセンターに電話をかけた

「もしもし、6階消化器内科の小川ですが」 「小川婦長。お疲れ様です。」

「そちらの階に山村 隆さんいらっしゃるわよね?」

「ええ。山村さんね?あの山村さんね・・・」

「え?あの山村さん?」

「あの方は有名よ」他の患者さんのお子さんが騒いだけだけで声を荒げるし、短気だし、まあこの階では有名な患者さんよ。だから今は4人部屋だけど1人よ。あの部屋だけ1人よう。」 肝臓内科の婦長が言う

「そうなの・・・まあいろいろあるんでしょ。」

あのね詳しくは知らないのだけど伝言を預かっているの。それだけ

伝えてほしいのよ」

「伝言ですか・・・山村さんにね・・・」少し嫌そうに婦長が答える

「手紙を預かるのでまたそちらに行きます。」

「分かりました。」

隆が食堂から戻ると隆のベットのの上に二つ折りにされたコピー用紙が置いてあった。

その上には付箋が一枚、事務的に貼られていた

<山村さんへ 6階の婦長経由で手紙を預かりました 石野>

「あのヒステリ眼鏡の石野かよ」隆はブツブツ言いながら付箋の付いたコピー用紙を開いてみる

「タカへ

すれ違ったまま こんなにも会えないなんてね・・・昔のような、なんだろう・・・切ない気持ち？に

なりました。おかしいでしょ？

二人の本も後、少しだけ残っていますね。栞も挟まったままですね。

考えればタカは学生さんだものね。勉強頑張っていますか？高校時代は大切に過ごしてね。文化祭に向けて練習もあるでしょう。

陰ながら応援してるわ。

文化祭って素敵なお響きよね。私達も最高だったもの。メンバーの絆を大切にね。

大人になってもそれらは切れる事はないわよ。

また近い内に会えますように。この手紙は婦長さんにお願いました。

あ、それとずっと前に、前にね、言った事覚えてる？私が泣いてしまった訳を。

次に会う時に話すわね。退院する前までにはね！私達は友達だから。

一つだけ今、話すなら・・・私の大切な心の曲。それは<He y Jude>でした。

続きは今度ね！

ではまた、ハナミズキの下で会いましょう

広沢 律子」

<タカへ すれ違ったまま こんなにも逢えないなんてね・・・>

隆は目を疑った

タカとは自分の学生時代のあだ名しかも・・・

一行目を読んだ瞬間 過去からの律子の手紙だと思った。思わず目を擦った。

「これは夢なのか？・・・まさかな」

<二人の本も・・・>

隆は我に返ったのだ

「な、訳ねえよな あーびっくりした。

久しぶりにあんな話をしたからだなく俺もどうかしてるぜ。

りっちゃんかタカヒロに書いてくれたんだな。あの金髪娘にしては  
達筆だな

金髪娘・・・タカヒロは違うと言ってたっけ。律子さん？」

・・・

内容を読み進めて行く内に表情が変わる隆

広沢・・・律子・・・

どういう事なんだ？

いや違う。違うはずだ。うん 違う。結婚したら性は変わるはずだ。

俺は何を考えているんだ。

隆は混乱した

Hey Jude、心の曲、

広沢律子

頭の中で繋がればあの律子以外に考えられないのだ

「・・・・・・・・ハナミズキの下でか。」



隆はそのタカヒロ宛ての手紙をベッド脇の引き出しの奥の方に  
仕舞った

## 栞

隆はタカヒロ宛ての手紙をしまった後　タカヒロの雑誌をパラパラとめくる

律子のハガキ大の大き目の栞が邪魔をしてページが開けにくくなっていた

隆は初めてその栞を手にとってみた

隆は驚いた

「・・・・・・・・」

栞には本物の桜がひとひらだけ、　押し花にされていた

がそんな事は男の隆には興味の欠片もなかった

むしろ、興味を引いたのはハガキに描かれていた

桜の木だったのだ

小高い丘に描かれているその桜は種類の違う二本の大きな樹

少し濃い花をつける紅華と十月桜と呼ばれる二部咲きの桜、同じところで育つ珍しいその場所は他にはない。

鮮やかな色の絵の具で丁寧に描かれていたのは濃い桜の花びらの樹と、蕾をたくさん付けた樹。

そして、よくよく目を凝らすと木には一本のギターが立てかけられ

ていたのだ。

「……………」

隆の思い出の場所

そのものだったのだ。例え違ったとしても、不自然な場所にあるギター。間違いなかった。

隆は目頭が燃えているように熱くジンジンとした。

・・・肩が震え出す 全身から魂が抜け出しそう感覚に陥った

「律子じゃねえのか、

律子、。

、、、、こんなにも近くに。しかも場所が病院だなんてな。」

栞を手にしたまま隆の魂はその場所に佇む。

初めてのキスをした後、隆の手は悪戯に律子のポニーテールを解き

「この方がいい。女らしいぜ。」

律子の長い髪が肩の横で揺れシャンプーのほのかな香りがした。

隆は律子の髪を撫で髪越しのおでこにもう一度キスした。

下を向いて「大好き」と律子が言う。「俺も。」

会いてえよ。律子。どこが悪いんだ。

大丈夫なのかよ……

会いてえ。律子に会いてえよ。心が叫んだ

隆は栞を手に持ち三階の中テラスに向かった。約束も何もなく、ただ本能のまま、過去の17歳の隆が小走りにさせるのだ。

エレベーターに乗り3階のボタンを慌ただしく何度も押す

「3階です」 自動音声が流れるや否や隆はエレベータードアが開ききる前に肩を打ちながらもテラスに向かうのだ

テラス入口の分厚い透明の自動ドアが開くとハナミズキの木を探す

隆はハツとする

ハナミズキって  
どんな花だ？

「しかも花なんか咲いてやしねえ」と一人呟く

今の律子がわかるのか？  
約束もしてねえ、

「馬鹿か俺は。」

落ち着いて考えた

どうすればいい？落ち着くんだ

と、自分に言い聞かす

隆は引き返し3階のナースセンターに立ち寄る

「悪いが、コピーする紙とペンを貸してくれないか。」

「あつ、はい」受付の女性はぶっきらぼうな隆の言い草に戸惑いながらも、それらを手渡した

隆は貰った手紙と同じように、コピー用紙に手紙を書いて見ようと思った。受付の隅で立ったままペンを走らせた

「律子・・・」

いや、いきなり俺が手紙書いていいのか？  
しかもタカヒロの手紙を勝手に読んだ事になる

読んじまったが、

「りっちゃんへ」

孫がいつもお世話になり、

違うな

「りっちゃん」

久しぶり！

あの雑誌をまた見ましょう。楽しみにしています

しかしながら学校ですので 入れ違いになっちまいます。

手紙を置いておきます。

.....

.....

「隆宏」

「こんな感じか？ これでいいな。」

「.....やっぱり律子には.....合わず顔ねえや。」

<隆宏>の名前を書いてもバチは当たんねえだろ。

隆は律子の存在が嬉しかった。生きていてくれた。それだけでいい。それだけでいい。

今は.....

隆は書いた手紙を持ち再びエレベーターに乗り込む。

<6階消化器内科>

ナースセンターの受付に行く

「あのよ、婦長を呼んでくれないか」

「はぁ.....。なにかご用ですか？」と若い看護師が聞く

「俺は婦長に用事がある。お前じゃねえんだ。婦長いるのか？」

「……少々お待ちください。あの失礼ですがお名前をお聞かせいただけます?」

「山村。」

「……」

若い看護師は婦長を呼びにアコーディオンカーテンの向こうへ行つた  
シャーッと勢いよくカーテンが開く

「はいはい。婦長の小川です。山村さんですね。8階の患者さん  
ですね。こんにちは。」婦長は慣れたしゃべり口調で  
隆に接した

「婦長さんですか?あの……手紙をわざわざ有り難うございました。  
孫のタカヒロには渡しておきました。  
奴は学校なもんで、これも伝言なんですが……伝言の伝言って変で  
すがね……頼まれてくれないでしょうか?」

噂と見かけよりかなり丁寧できちんと対応する隆に小川婦長は優し  
い顔で隆に言う

「お安いご用よ!山村さんは顔色が良いみたいね。肝臓だと浮腫み  
も出るけどあなたは元気そう。」

このままきちんとお薬飲んで、主治医の言う事を聞いてください。  
直に退院できますよ。」

「アハハ〜なにか変な噂でもあったみたいですね?

ありがとうございます。俺の体は自分でよく分かっていますよ。

で、ですね申し訳ないですがお願いしてもいいですかね?これ、広

沢さんって方に」

隆は手に持った紙を婦長に渡す

「山村さん！もしよければご自分でお渡しになる？広沢さんね、後5分ほどで検査が終ってこの前を通りますよ。熱も少しは下がったみたいだし少しならお話しされても大丈夫よ？」と婦長は提案をした

隆はびつくりした。

どんな顔して会えばいいんだ。無精髭もそのままだ。しかもこんなおじいさんだ、と。

隆の脳裏には若い17歳のままの律子がいる。律子も同じだけ年を重ねている事を一瞬、忘れていた。

朶を手にした瞬間はとにかく会いたい気持ちを抑えきれずに夢中で病室を飛び出した自分。

しかし冷静になればなるほど臆病な、もう一人の自分もいたのだ

「い、いや、いいです。いつも会ってるのは孫でして俺は顔も知らねえですし・・・お願いします」

素早く頭を下げると急ぎ足で隆はエレベーターに向かう



## 絡み合う糸

「婦長、あの方偉そうですね。」

「そうね。だけどあの方、山村さんの目は優しい目をしてたわ。私は何十年もいろんな患者さんを見て来ているわ。いろんな事に不器用なのよ。きつとね。私の目は確かよ。」

看護師と婦長は談笑しながら持ち場に戻る

エレベーターが <チン>と音を立て扉が開く

車椅子に乗った律子と付き添いの看護師がいた

「広沢さん お帰りなさい。今日は顔色が良さそうですね！」婦長が声を掛ける

「ええ。大袈裟に車椅子なんかに乗せてもらって、。熱も下がったし食事もきちんと取れます」

「そう。良かった。退院まで後、僅かね！」

「そうそう入れ違いだったみたいね。広沢さんのお友達から伝言を預かってますよ！山村さんって方」

「あら！タカが来たの？残念だわ。。。かわいい顔をした子ですよ。」律子が若い看護師に言った

「かわいい??ですか?」若い看護師が不思議そうに言う  
婦長が続ける

「8階に入院している山村 隆さん おじいさんの方よ。伝言のお返事を持って来てくださったの。」

このナースセンターまでね。直接会って渡されたら?って言ったんだけどね、会ってるのは孫の方で俺は顔も知らないからって慌ててさつき戻られたの。」

「・・・」律子は動揺した。タカが・・・隆が今ここに居たという現実に。

律子は感情を抑えながら婦長に尋ねた。

「おじいさんはどんな方?お会いしたかったわ。」

「ええ、とつても横柄で?ボソボソと話される感じ。だけど優しい目をされてたわ。」

ほんとはすごく優しい方だと私は印象受けたわ。ね!」

婦長は若い看護師に目配せをする

「そうですね。」若い看護師は無愛想に書類をトントンとデスクに打ちながら揃えると席を立った。

「そう。優しい目を・・・」

「そうよ。無精髭を生やしていたけどあの方はきちんとすればとつてもワイルドでいい男だと思っわよ〜」

婦長は明るく答え その伝言の紙を律子に手渡した

律子は部屋に戻りベッド脇の台から老眼鏡を取り、それを掛けた。

りっちゃんへ

.....しかながら

.....入れ違いに、

なっちまいます。

隆宏

「しかながら？ なっちまい・ます？ 隆宏・・」

律子は嬉しさと同時になんだかおかしくなり  
クスッと笑った。

10代で、しかもあなたと違ってタカは丁寧に優しく物を  
言うわ。

自分で気付かなかったのかしら？

そう、嬉しさと同時に隆の純粹なところ、嘘をつくのが下手なところ  
がおかしかった。

律子はコピー用紙に書かれた便箋代わりのそっけない紙ながら 胸  
に付け手紙を抱きしめた。  
涙が一筋だけ頬を伝うのだ

こんなにも会いたかった人からの手紙。  
名前を伏せているつもりでしょうけど分かるに決まってるで  
しょう。

左ききのあなたの字は少し右下がりの濃い字を書く。  
あなたが書いたセットリストのメモを私が未だに持っている  
ことすら知らないでしょう

50年という月日が流れそしてこんな形で繋がったのよ。今・

・・・。

隆に、隆に・・・。

「会いたい」

だけど、こんなにも年老いてしまったわ。私の事が分かるはずもなく、今更、会ったところでどうなるの？

どうしたいの私・・・

ううん、違うわ。

私が結婚という形を選ばなかったのは・・・。

あなたの孫が偶然ながらこの私と出会い、友達になった。そんな事は知るはずもなく、

このままお互いが退院すればこの50年間と、何も変わりなくあなたが幸せでいてくれたなら、それでいいのかも知れない。

そして、この先も月日が流れるだけの話で

それが運命なら

それで、

いいのかも・・・しれない。

律子は隆の下手な嘘に乗っかる事とし、ペンを取る

「タカへ」

タカ 勉強の方はどうですか？

私は体調は戻りつつあるわ。薬の副作用がきつくて大変だったけど今はもう大丈夫。

早く本の続きを見たいわね。

タカは文化祭にはどんな曲をやるのかしら？

教えてくれない？

私も昔を思い出したわ。

私達のメンバーはねいろいろあったけど本当は心が一つってくらい仲が良かったのよ。

タカも部活で今頃たくさん曲を練習している頃ね。

時間が作れたら、 magari っちゃんとお話してくださいね。

「広沢 律子」

「りっちゃんへ」

今は携帯電話の時代ですのでこんな手紙なんて珍しいのではないでしょうか。

毎日部活で文化祭の決め事をしています。

心の曲が<Hey Jude>との事ですが なんて心の曲になったのですか？聞かせてくれないか？

「隆宏」

二人は婦長の心使いで伝言のやりとりをするようになったのだ。

隆は忙しいタカヒロとは電話でのやりとりをしていた。

が、律子との伝言の事は黙っていた。このままもうしばらく律子と話がしたいと思ったのだ。

律子の心の中が知りたかった。

律子の中に少しでも俺の存在があるなら、

あるなら・・・どうする訳でもなく・・・ただ繋がりた

い。今は・・・。

隆はタカヒロの名を借りつつも、気付かぬうちにいつもの語り癖が出ているのもわからぬまま

やりとりは続く

## 伝わる心、伝わらない心

タカヒロが珍しく昼過ぎに顔を出した

「じいちゃん。こんちは！元気そうじゃん！」

「どしたタカヒロ、またサボったのか！」

「違うよ。先生の月一回の全体会議でさ、学校に残ったらダメなんだ。だから来たんだよ」

「そうか。・タカヒロ、あんな お前に黙ってた事がある。悪い。あんな、お前がいつも会ってたりっちゃんって・広沢律子って言う名前だろ。」

「なんで？りっちゃんがそう言ったの？てか  
・会ったの？」

「いやお前が」

「……………そしてお前に話した俺らの文化祭のあのメンバー、…………律子は広沢律子なんだ」

隆はベッドに置いてある栞も見せた。この栞の場所は俺らの場所だ。そしてよく見てみる、ここにギターが描かれているだろ？」

「え？あっほんとだ、分からなかったけど、ギターだね」手に取り  
間近で見るタカヒロ

「わ、すごいや、本当だ」

隆は律子から伝言が来た事、実は同級生だった事、そして……忘れ

られない人だと言う事をタカヒロに全て告げた。

「じいちゃん、話してくれてありがとう。あのさ、俺もじいちゃんに話しておかなければならない事がある」

「なんだよ？」

「うん、これ・・・」タカヒロは鞆から手帳を出し、間から一枚の写真を出した。

律子と隆の写真だった。

「これどこにあった？」隆は驚いてタカヒロに聞いた

「そうか・・・しかし俺らはなにやってんだろうな！ お互いなんでも話そうぜ？これから！」

明るく言いながらも写真を愛しい目で眺めてたのをタカヒロは真横から見ていた

そして、その言葉を聞いてタカヒロは安心して律子との事をゆっくりと話し始めたのだった

「あのね、りつちゃんが突然泣き出したんだよ。忘れられない人がいるみたいだった。

忘れられないと言うか忘れたくないって。僕に話す時ね、少女みたいにかわいい顔して話したんだよ・・・  
今でもね、好きみたいだよ・・・

じいちゃんのこと・・・」



隆は真剣に聞いていた「タカヒロ、真面目に考えてみ？もう半世紀前の事だ。しかもお互い結婚してまあ、俺は失敗したけどな。」

でも律子は旧姓のままだったな？」

「りっちゃん 子供もいるって。ただ結婚はしなかったって言った。一人で育てたって」

「そんなこと・・・大変だったろうに・・・何故なんだ・・・」

「じいちゃん。会ってきなよ。もう偽りの伝言ごっこ止めなよ。りっちゃん・・・待ってるよたぶん今から行く？」

「今からか？今はダメだ

その、心の準備つてもんが、いや まず律子にもう一度だけ手紙を書くよ それから律子の体調も気になるし、俺はそのアレだ、  
隆は珍しく焦りを見せた

「散髪してだな、それから髭剃って、パジャマも綺麗なやつじゃないとな。」

いや、パジャマじゃ病人そのものだな」

「じいちゃん、ここ病院だし。」 タカヒロは笑いながら話す

「うんうん、パジャマね洗いの持ってくるよ。」

それから売店横の散髪屋に予約入れておく、売店でカミソリも買う。

それでいい？」

そう言うのとタカヒロは帰る準備をする。

律子に会いたいののはタカヒロも同じだったが律子の体調を考えて我慢したのだった、そして一番会いたいののは祖父、隆だと言う事をタカヒロは心に留めた。

---

隆は律子への手紙を書きだした。

「律子へ」

俺が誰だか分かるか？隆。山村 隆だ。隆宏から全て聞いたんだ。菜で、菜でお前だと気付いた。

こんな偶然は奇跡のようだよ。

・・ずっとお前の事は覚えていた。

いや忘れられる訳ねえ。俺はあの時若かった。自分の事しか見えてなかったんだよ。

会って謝りたいと思っていた。

体調が良ければ律子が退院する前に、少しの時間でいいんだ。話が見たいんだ。

。 . . . . .

「隆」

受付には無愛想な看護師と婦長がいた

「あら山村さん」

「婦長、いつも申し訳ありません。

これお願いします」

「はいはい！お安いご用よ！広沢さんが  
戻られたら渡しておくわね」

「お願いします。」 深々と頭を下げる隆

隆がエレベーターに乗り込むと同時に受付の電話が鳴る

婦長が出る

「はい。はい、わかりました。すぐに参ります。」  
婦長が若い看護師の美山に言う

「美山さん、婦長会議の時間が変更になったから今から行ってきます。」

引き継ぎしますね、えっと・・・まず

605の大下さんのレントゲン回収と点滴交換、

610の宮前さんはチューブ交換と体位交換

611、613の部屋回って検温、測脈、与薬の説明、602の

広沢さんには伝言。これも仕事の内よ  
頼んだわね」

「・・・分かりました。」

婦長が席を立ちエレベーターに乗り込んだ途端

「一人で忙しすぎるって話しよね〜。はあ〜」だるそうに呟く看護  
士の美山

「さて、とつとと済ませよう」と

若い看護師は鼻歌混じりにカルテを持ち病室を回る

「やっと終わった

人件費削りすぎなのよね 全く。

つきは、ああ伝言ね。下らないわー じいさん、ばあさんの手紙ごっこ。」

渋々、律子の病室に向かう看護師の美山

「まだかー まだ帰ってないじゃん」

ナースセンターに戻ると、とりあえず受付下のカゴにそれを無造作に投げ入れた

「先に ご飯に行ってください。」  
看護師の美山が休憩にたった

交代の新人看護師がやってくる

「こんなにも散らかしてさ美山さんたら！  
また新人の私が注意されるってーの。」

受付下のシュレッダー 行きのカゴを早速片付ける

シュー、ガリガリ

シュー、ガリガリ 無言で作業を続ける

真横にある引き継ぎ用のカゴも確認し  
整理整頓した後、 検温に回る

夕方、婦長が戻って来る

「夕礼しますね。では  
引き継ぎお願いします」

「……佐川さん 以上ありません」

「……宮前さん 床擦れが酷くなってました  
経過観察です」

「問題ありません」

「分かりました。ああ美山さん伝言もOKかしら？」

「あつ……はいOKです」美山は忘れていた事に気付く

婦長が席を離れた隙に伝言の入ったカゴに手を伸ばす

「あれ？ない、なぜ？わっどうしょ」

新人看護師がそっけなく答える「私が綺麗に片付けましたよ」美山  
さんそのままだったじゃないですかあ」

「どこに片付けたの？」「え？引継ぎファイルに挟みましたよ？」

「ないわよ？」「そんなあゝ後はシュレッダーのカゴに入ってた  
分だけですよ？それなら全て、さつき……」

「マジっ？どうすんのよ。例のお手紙ごっこの紙あったのよ！」

「マジっすか？・・・もうバラバラですよ・・・」

「内緒にしましようか？どうせバレないっすよ。二人とも結構年でしょ？」

どっちかが忘れてたって事になるんじゃないですか？」 「そ  
うだね、まいつか。」

## その先に

隆は待った。

待っていたのだ。散髪も済ませ、髭も久しぶりに剃り、後、パジャマが揃えば万全だった

しかし、肝心の律子からの返事が来ないので  
手紙を渡してから既に、4日も経っていた

いつもその日か次の日には繋がっていた。互いに長い年月の空白の  
時を

短い文ではあるものの、それに置き換えられた一文字、一文字の言  
葉達は柔らかな温もりを持ち始めていた

それなのに・・・と

隆の心は別の所にあつた

「検温ですよ 山村さん。」  
「ハッと我に返る

この階の石野婦長だった

「石野さん 小川婦長から、預かってないですかね？」

「そうね 最近は来られてないわね。」



「忙しいんですかね？」

「まあ忙しいのは毎日ですよ。」

点滴の残量を調べ、用紙に記入をしながら、表情さえも変えず淡々と話しを続ける石野

「最近は何事もないですし、退院の方も増えてるのでね　来れない事もないんですけれど。」

ねえ、山村さん　最近いい顔してらっしゃるわ。

楽しみが出来たのかしら？」

「いや、まあ・・・その恥ずかしながら人と接する事って、鬱陶しく思っていたんだが

なんかね、、、

人間は一人では生きていけねえなど、この年で分かったんです」

「そう。こんな退屈な入院生活だけど時間がありすぎていろいろ考えるでしょう？」

日常生活なら気付かなかった事がね  
非日常に晒されると分かるものですよ。

白い天井に飾り気のないカーテン、味気ない病院食、それにヒステリックな眼鏡看護婦、それ以外ないですものね？

分かりますよ。」

茶目っ気を出し、そう伝える石野

隆は目を丸くさせ、口をへの字にしながら頭をかく、「参ったな、」  
「  
ピピピ・・・ピピピ・・・」

体温計の音が優しく会話に入り込む

「うん、よし。安定しているわ」

体温をカルテに書きながら石野は言う

「山村さん、小川婦長に聞いておいてあげるわよ。」

あっそれから・・・

髭、ない方がいいですよ!」

ヒステリ眼鏡と思っていた石野の笑顔に隆は戸惑いながらも 嬉し  
かったのだ

「有り難うございます。」

ああ、俺に惚れちゃいけませんぜ。火傷しますからね」

「あら大変!退散しなくっちゃ?」

二人は初めて笑顔で語り合ったのだ

看護師と患者でなく  
人として接したのであった。

---

タカヒロが夕方にやって来たのだ

「じいちゃん 調子どう?」

「おう タカヒロ!安定してるよ 直に、俺も退院だ」

隆はボディビルダーの真似をして、軽く腕を曲げてみる

「じいちゃん なんだか明るくなったね!おつかしいや! だけど色が白くなったんじゃない? 体で勝負の男は肌の色も肝心さ! やっぱね太陽の光りを浴びなきゃね!

律子さんに会う前に日サロでも行く?」

タカヒロはおどけてみる

「ヒサロ?なんだか解んねえが予約しておいてくれよ! ピンサロではないな?」

「・・・じいちゃん 日焼けサロンだよ！」

病院の中にあっただらびっくりするよ

アハハハハ！  
「

「金払って体を焼くのか？  
軟弱な奴が行くところだな。」

それはそうとタカヒロ、 律子から返事来ねえんだ。  
「

「え？そうなの？四日前だよね、  
分かった！りっちゃんもあれじゃない？」  
「

「なんだ？」  
「

「美容院行って、パジャマも新調してるとか！ うーん・  
それが、、具合でも悪いのかなあ？」

ねえ、じいちゃん、これに着替なよ  
「

タカヒロは紙袋から真新しいパジャマを出した

絹織の黒めのパジャマだった。

「おお！　こんな家になかったよな？　わざわざ買ってきたのか？  
へえ〜渋いなあ〜今はこんなのが出てるんだな」

隆は早速、右手を通してみた

「渋いけどよ、　なんだかマフィアみたいだな。　葉巻でも持つか！  
隆は嬉しかった

「待ってても仕方ないから行く。」

「いや、　もし律子の体調が、、」

「その時は婦長さんに一言告げて引き返せばいいのさ。　僕がりっち  
やんに会いたいのさ。」

「そうか？

タカヒロが会いたいのか！　．．．なら仕方ねえな。」

二人はエレベーターに乗り込む

隆は思う

この息苦しい殺風景な乗り物に何回乗った事だろうと

入院が決まって重苦しい気持ちで乗り込んだ事

けして楽ではない検査の為に度々乗った事

金髪娘とぶつかり 自分という人間に愛想つかしてこの壁を殴った事

しかし今、 ドキドキとしている  
学生の頃のような気持ちを抱いている

この扉が開くと律子に会える

まさにタイムマシンに乗り込んだ気分だったのだ

50年前というボタンを押す俺がいる

<6階です>

聞き慣れた自動音声が流れる

チン！ と音をたて扉が開く  
なぜか降りる足が竦んだ

「じいちゃん、行こう。」

タカヒロの手が隆の背中を優しく押す

胸の鼓動が早くなる

「じいちゃん？大丈夫」

「おう」

エレベーターの斜め前の受付が見える

「こんにちは。」タカヒロが受付に挨拶する

「わっイケメン！やばくない？かなりイケてる！」

ヒソヒソとナース達が話している

後ろの隆も遅れて挨拶をする

「こんにちは。」

「あっ！あのじいさんだ。」

新人ナースと美山が顔を合わせる

「なんだかダブルヤバイよね、。」

婦長が気付き前に来る

「山村さん！この方 お孫さん？」

「はい。」

「まあ 俳優さんかと思ったわよ！」

照れるタカヒロ

「あなたが広沢さんのお友達だったのね！そりゃ楽しみが増えて元気になるわ！」

わざわざご挨拶に？

「え？ まあ、と隆は言う」

「あの広沢さんは今日？  
今 検査ですかね？」

「えっ？ご存知なかったの？」

「えっ？」

静かな空気が流れた



## 運命なんだ

「え？」聞き返すタカヒロ

「昨日のお昼に、退院されましたよ。」

「退院・・・ですか？」

「元気になったって事、ですよね？」

「そうです。数値も安定されていたし後はお薬を飲んで貰うくらいでしたし、

最後 会われなかったんですか？」

「いや、四日前に伝言を書きまして・・・  
返事がその、珍しく来なかったもので、具合が悪いのかと気になります。

「四日前、 ええ確かに預かりました」

新人ナースと美山は俯いた

「美山さん 渡してくれたのよね？」

「.....」

「美山さん？あの伝言をあの日に頼みましたよね？」 美山に確認をする

「ああごめんなさい山村さん 会議があつて美山に頼んだもので。」と婦長は隆の方を向き、そう告げた

「美山さん、あれから広沢さんから預かってないわよね？」

「あー、申し訳ありません。忘れてましてその、、」美山が口を開いた

続けて新人のナースが横から言う

「あの、私 片付けをしまして分からずにその、 たぶん伝言の紙を シュレッダーにかけてしまったみたいで申し訳ありません。」

「え！どうして報告をしてくれなかったの？」 婦長は驚いた

そして隆が呟く

「だから返事が来ねえ訳だ。」

タカヒロが興奮気味に言った

「酷くないですか？無責任じゃないですか！」

「山村さん申し訳ありません。 私が預かっていながら私が悪いん

です。「深々と婦長は頭を下げた

隆は再び口を開く

「いや 忙しいのに頼んだ俺が一番悪いんですよ。

だから婦長さん、若い看護婦さんたちを叱らないでやって下さい  
こんなジジイの伝言ゲームに付き合って下さっただけでも有り難い  
ですよ。」

・・・タカヒロ行くぞ」

隆はタカヒロの腕を持ち軽く会釈をした後、受付に背中を向けた

「待って!!」

タカヒロは腕を振り払った

「広沢さん、　　広沢律子さんの住所教えて下さい！」

「タカヒロいいんだ。いいんだよ」

「山村さん　ごめんなさい  
個人情報なので、教えられないんです」

「は？あんたらのせいで会えなくなっただら？責任取れよ!」

タカヒロの荒っぽい言葉を初めて聞く隆

「タカヒロ！目上の人にそんな口を利くんじゃねえ！！」

隆の低い声が大きく響いた

婦長が申し訳なさそうに答える

「広沢さんの了解を得る事が出来れば 住所は教えられます  
私から広沢さんに連絡しましょうか？」

隆は言う

「結構です  
すみません。ほんと迷惑かけちゃった。

失礼します  
」

タカヒロは 納得出来ないでいた。

「じいちゃんなんで？教えて貰わないと会えないじゃん」

隆は一人、エレベーターに向かう  
追いかけるようにタカヒロも渋々、付いて行く

「なんで？」半泣きになるタカヒロだった。

「ずっと逢いたかったんだろ！」

「タカヒロ、きつとな運命だ。

お前が律子と会ったのも運命なら、

俺が律子と再び繋がれたのも運命だ。

だが、こうして会えないのもそれも、また運命なんだ

俺らはもう会っちゃいけないんだろ。

会ってしまうと俺はどうなるかわかんねえ

心臓がドキドキして 死ぬかもしれねえんだ。」

少し笑いながら話してみる

「もう少し生きたいから俺は。

、、だからもういいんだ。」

「僕はじいちゃんから、そしてりっちゃんから昔の事を聞いた。聞きながら何度も泣きそうになった。

だからこそ、このままなんて絶対ダメだ。

会わないほうが良いに決まってるなんて誰が決めたんだよ！じいちゃん自分が決めてしまったら本当に二度と会えなくなるよ！

……」言葉に詰まるタカヒロだった。

「タカヒロ、ありがとな。お前の言うとおりかもしれないねえ。分かつ

た。  
ただ今はな、  
、  
どうして良いか正直わからねえ。  
今はなー。  
」

## モノクロな時間から

「婦長、申し訳ありませんでした。」涙を溜めながら謝る美山

「美山さん、私達の仕事は命を預かる仕事です。

あなた方が思うように伝言はただの伝言。きっと下らないと思っ  
てたのでしょね。

広沢さんの毎日を見てきてどう思った？患者さんの表情を毎日見て  
た？

ただ事務的に検温したり側脈したりと やっている事は同じよね。

あの方ね、いつからか急にイキイキとした表情をされるようになって  
たの。

人間は楽しい事があると元気になれる。楽しみが先にあると病気に  
立ち向かう勇気も湧いてくる。 元気が漲るの。

病は気からって言うでしょ？薬じゃ効かない事でも治る事も稀じゃ  
ないわ

これから沢山経験をすると思っわ。

私達はそんな気持ちの上での、サポート的な事も必要になってくる

メンタル面の事ね。

こんな小さな事でもガツクリ来てしまう方もいるわ

分かる？」

「はい分かります」

「この仕事はとてもハードで時に自分を見失う。けれどそんな時に大切な事を教えてくれるのがそれもまた患者さん、そう、人なのよ。いろんな事を経験してその素晴らしさを実感したからこそ私は今ここにいます。」

美山さん、あなたはあなた自身を大切にしていけないの。だから人に優しく出来ないの。」

「、、はい。」優しく諭す様に話す婦長に美山は再び涙を流す

「さっ持ち場に戻りましょうか美山さん。」

「頑張りましょうね」

「・・・はい。婦長のおっしゃった通りの優しい方でしたね。山村さん・・・普通ならすごく怒られてました私。」

それが責める事もなく、しかもご自分が悪いだなんて・・・ほんと私って最低です。」

「ええ。それだけ長い人生を歩まれて来られたからよ。あの方に限らず人はみんなそうよ。」

これからよ！美山さん。あなたも、これから！



さ、仕事しましょうか!」

「あの、婦長・・・少し相談が・・・」

「ええ。わかったわ。頼みますね。」

「じいちゃん、ギターね楽器屋に見て貰ってきたからここに置いてくよ。じいちゃん・・・いや・・・今日は帰るわ。」下を向いたままりユックを持ち直し病室を後にするタカヒロだった

「おう。」

隆はハアと溜息をつく

タカヒロが持って来てくれたギターケースをベッドの上上げる

カチャカチャと開け

中から相棒を出す

隆は頭の中の楽譜を開く

> Hey Jude <

静かに弾き始めた

この曲を いや、こつやって弾くのは何十年ぶりだろうか  
見ず知らずのライブハウスでバイトをしながら生活してたっけ  
な

せつかく家庭を持ったものの 俺の相棒はいつもコイツだった  
モノクロの中の俺はいつも律子だけを思っていた

「二度と会えない、、か。」

hey・ジュード いい加減にしるよ  
あの子と出会ったからには捕まえてみるよ  
あの子の心を抱きしめてみるよ  
なんでも自分でしなきゃだめだ

hey・ジュード ひるむなよ  
悲しい歌も 楽しく歌えよ  
あの子の事を思い出してさ  
そうすれば きつとうまくいくさ

俺の横で歌う律子がいた  
感情を入れるには意味が判ってないとして  
和訳してたお前がいたな

どんな風に歌ってくれるのかを楽しみにしてたのにな・・

俺が全て悪いんだよ。律子。

「ヘイジュードのアルバム返さなくていいからね。いや借りたもんは返すさ」

「俺には俺の音があるんだけど」

隆は思い出した

遠い遠い過去の律子との会話を。今、はっきりと鮮明に。モノクロが薄っすらセピアに変わった。

「そつだ返さねえと。今返さねえと！」

隆はベッド脇の台の引き出しから携帯電話を出すとタカヒロに電話を掛けてみた

タカヒロはバスの中にいた

ブー……ブー……

携帯がタカヒロの鞆の中で騒がしくなってる事も気がつかぬまま

タカヒロはある場所に向かっていたのだった。



## 魂が繋ぐ出会い

タカヒロはバスを降りた。祖父が通っていた、青葉台高校<の正門を通り過ぎ坂をゆつくり下っていく

「下野楽器」

駅前にある大きな楽器屋とは違い間口の狭い入口に今時珍しい手動ドアの店だった

タカヒロがゆつくりドアを開ける

「すみません。先日ギターを修理してもらった者です。」

「はい、あっ！君ね」「30代後半ぐらいの店主が奥から出てくる  
「覚えていてくれたんですか？」

「ははは、君みたいな若いお客さんは珍しいからね。なんせ駅前にあの馬鹿でかい店が出来てからお客さんそのものが減ったしね、うちは親父バンドの人か昔っからの連中ぐらいしか来ないからねえ。君みたいな若いお客さんは嬉しいから覚えてるんだよ」店主は微笑みながらタカヒロにそう言った

「あの楽譜を探してるんですが、どこ行ってもなくて。

THE BEATLESのHey Judeの楽譜ってありますか  
？」

「メジャーなLet It Beとかならあつたはずなんだけどな

「あー、ちよっと待ってて。二階のリペアマンに聞いてくるよ。」

「父さんあのさ……」

狭い店内の階段を話ながら店主は上っていく

5分ほどして店主はリペアマンと下りて来た

「こんにちは。君、この前のギブソンの修理の？」

あのギターかなり年季が入ってたね、あれはオークション？それか君のかい？」

「いえ、祖父のものです。」

「じいさんの？」

あのギター身に覚えがあるんだよ

……ボディのとこの傷に。」

「え？」

もしかしてじいちゃんの同級生の方ですか？

そこの高校の？

僕、山村隆宏つていいいます

祖父は山村 隆です」

「隆、隆の孫か！　そうかそうか、　そうか　」

そのリペアマンはタカヒロの頭を撫でる

「隆は元気か？」

隆の現状を少し話してみた

「隆と一緒に軽音部にいたんだよ。　下野　幸助って名前だよ」

体格がガッチリしていてロマンスグレーの長髪を後ろで束ねた男は祖父の会話に出て来たドラムの人だったって事をタカヒロは思い出した

「じいちゃんが言ったんですよ、もし今でもあるならここの楽器屋に出してくれって。」

「そうなのか　　嬉しいよな。アイツとはさ、アイツがこの街に帰って来てからは度々会ってたんだ。」

俺がこの楽器屋を始めてからもアイツはよく来てたよ。その愛用のギブソンを持ってな。

しかし、いつ頃からかパツタリ顔を見せなくなってしまったな。　・

いろいろありすぎたんだろう。

俺らが君ぐらゐの時の文化祭でな・・・」

「その話、じいちゃんから聞きました。あの、ギターに火を点けた話も、それから・・・広沢律子さんの事も」

「そうか、りっちゃんの事もか・・・りっちゃんは隆が好きだったもんな。俺らは気付いてた。

隆が火を点けた時な、りっちゃんが濡れたＴシャツをギターに被せ火を素早く消した事があつたんだ。

直前に俺らはいろあつて俺は悩んだ。

りっちゃんはさ、俺に水を被れと言つた。」

「聞きました。濡れたＴシャツで火を消したつて事。律子さんが機転を利かせたんですよね。」

「いや、違う。隆の行動を分かつてたりっちゃんはさ俺に気合を入れるように言つたけど違う。

最初から濡れたＴシャツで消す事を頭で計算してたんだ。

俺が約束守れなくて悔やんでる気持ちも酌んでな、俺にも隆の尻拭いって言つたら言葉悪いけど

最後まで仲間ならつて思いをさ、気持ちで出したというか・・・舞台で隆が恥をかかないようにとかみんなの事をりっちゃんはいつも考えていた

あの時は衝撃が走つたよ。隆にもりっちゃんにもな「遠くを見ながらタカヒロに話す下野だった

「そうそう、楽譜を探してたんだって？」



「そんなんです。僕も今軽音部でビートルズやってるんです。文化祭のセットリストを考えながら楽譜を探してるんですけど・・・なかなかないですね。」

「そうだな、見た通りこんな古ぼけた楽器屋だしな、揃えも悪い。大手の楽器屋にないとなると  
厳しいな。」

「・・・ですよね」

「だが、あるんだなこれが！」目の前にバンと楽譜を出して見せた  
「古い店だからこそある！って事を若い奴らに教えたいよ」笑いながら下野は言った

「少々黄ばんでいますのはこれがかかなり古いからであります！」兵隊のように敬礼をしながらおどけてタカヒロに言う

「わー！ありがとございます。ほんとに・・・少し・・・黄色いですね」楽譜を見ながら遠慮がちに言ってみる

「幾らですか？」財布をリュックから出すタカヒロ

「いらないよ。タカヒロくん？だっけ。おじさんは嬉しいんだ。昔の友達の孫がさくこうやって同じように音楽好きでいてくれて、しかも同じビートルズをやってる。SOULが良い！気に入ったよ！君のココがな」下野はタカヒロの胸あたりを軽く拳でつついた

そして右拳を出して見た。タカヒロは無意識に同じように右拳を下野にくっつけた

「おじさん。ありがと。出会えて嬉しいですよ」

「……」下野の目は涙で潤んだ。50年前の隆と目の前の  
タカヒロが重なった瞬間だった

「隆に宜しくと言っててくれないか？俺はまた・・待ってるよ。」

「分かりました。」

「あ、それから・・文化祭だっけな、どこの高校なの？フライヤー  
あるなら店の前で宣伝しといてやるよ。  
それと、おじさんも行っていいかな？」

「もちろんですよ！是非！！また出来上がったら持ってきてきます！宣  
伝お願いします！」

では、失礼します」

下野の息子も目を細めながら二人の様子を見守っていたのだった。

タカヒロが帰ろうとした時の事だった

ブロロロロ〜

大きな音をたてた一台のバイクが店前に止まった。

タカヒロが目をやるとバイクを降り、ヘルメットを脱ぐ人がドア越  
しに手を振っていた

「あ、来たよ。父さん、いつものあの子」

「タカヒロくん、丁度良かった。君に紹介しておきたい人が来たよ」

「え？誰ですか？」タカヒロがもう一度外を見た。

ヘルメットを脱いだのは男性ではなかった。

250ccバイクでやって来た目の前の人は170センチはある長  
身の、

女性だった。

## 美奈

ドアを開けタカヒロの前を通り過ぎた女性からは甘いフルーツ系の香水の香りがした。

170センチ程の長身にジーパンをカッコ良く着こなして、シヨートカットが良く似合うハーフのような女性だった。

「ちわ!!!リペアマー……ン!!!久しぶりだね~~~~~」

「だからその呼び方は勘弁してくれよ美奈ちゃん。スーパーマンみたいな響きでさ、なんか撥つたいぜ」

「だってリペアマンはリペアマンじゃん!今日はリガチャーとキーコルクの交換をしに来たの。もうすぐライブだしね。後いつものリードとね!」

その女性は右肩から赤い派手なケースを下ろし、中を開けた

中からゴールドのアルトサクスを出した

「お願いしまーす」 「はいよ!」

「美奈ちゃん 紹介したい人がいるんだ」下野はタカヒロに視線を移した

「ん?なに?」美奈は振り向いてタカヒロの方を見た

タカヒロはなぜか驚いた顔をする

「何?私の顔になんか付いてる?」タカヒロがあまりにもマジマジと見るので一瞬、ムツとしたのだ

「いえ、その…以前どこかで会ったような…」

「今時さく古いナンパの仕方だね。」顔色変えず美奈という女性はタカヒロに言った

「ち、ちがうよ。ナンパなんてした事ないし・・・」

「似てるんだよ。タカヒロくん。」下野は笑みを浮かべながらタカヒロに言う。続けて美奈にはこう告げた

「美奈ちゃん、この男の子はね、おばあさんの同級生のお孫さんなんだよ。タカヒロ君って言うんだ」

「そうだったの？ごめんなさい。私は島田美奈って言います。高校3年生です。宜しく！」

「高校生なの？やたらデカイし大人っぽいからってつきり年上だと・・・同じ年じゃん。」

「タカヒロくん 目の前の女の子はねえ りっちゃんのお孫さんなんだよ。成長するにつれてりっちゃんにそっくりになっていってね、目の下のホクロまで同じなんだよ」

タカヒロは驚いた。目の前の女の子が自分と同一年な事と、律子の孫だった事、そんな事よりタカヒロを一番驚かせたのはタカヒロが見たあの写真の中の律子にあまりにもソックリだった事だ。

「・・・ひょっとしてタカヒロ君ってタカ？おばあちゃんの病院のお友達？」

「ええ、まあ」 タカヒロは下を向いて頭をかく

「病院で若い男の子と友達になったって聞いた事あったし。おばあちゃんね急に元気が出てきたんだよ。  
タカヒロくんのおかげだね。」

「ありがとうね！」 美奈はさっきのムスツとした表情からは一転し、笑顔で話し掛けた

「タカヒロくん、美奈ちゃんはね3歳ぐらいからこの店に来てたんだよ。りっちゃんがいっつも手を引いてね、  
それで俺の事を楽器を修理するリペアマンってりっちゃんが説明したらなんだか戦隊もののヒーローと勘違いしちゃってさくそれからずっとリペアマーーンって言って入ってくるんだよ。おつかしいだろ？」

美奈ちゃんは幼い頃から楽器に触れて育ったんだよね。中学からはアルトサククス一本でさ、今ではいろんな街のライブハウスで月一ライブをしてる。俺は専属リペアマンってとこ」

「そうなの。インストだけだね。興味あつたら一度遊びに来てよ」

「僕も軽音でバンド組んでるんだ！興味ありだよ！！」

「・・・そうだ、そうそう肝心な事・・・聞いていい？」

「ん？なあに？」

「りっちゃん退院したんだよね。おめでとう。」

あのさ、会いたいんだ。僕もんだけど、僕のじいさんに・・・会わせたいんだ・・・」

「おばあちゃんなら今、日本にいないよ。グランパとここにお母さんで行ってるの。」

ぐらんぱ、ぼー？

「おじいさんどこよ。つまりお母さんのお父さんおばあちゃんの旦那さんだよ！」

「え？りつちゃん結婚はしなかったって前に言ってたよ。」

「そつだよー結婚はしなかったみたいだね！」サラツと美奈は言った。

「でもグランパはグランパ。私のおじいちゃん。私はお正月に行くの。」

「遠いの？」

「ニューヨークだよ。」

「あ、そろそろ行くわ私。タカヒロくん時間ある？」

「え？・・・時間？う、うん。後帰るだけだけど。」

「ちよつと付き合っつて！」そう言つと美奈はさっさと扉の方に向か  
つた

あまりの行動の早さに戸惑つたタカヒロ。

そんなタカヒロに向かって下野はタカヒロに目配せをし、親指を立ててみた

「リペアマーン！また出来たら連絡宜しく！タカヒロ君を誘拐して  
行きまーす！」

「ゆ、誘拐つて・・・ちよ、ちよ、ちよ、ちよつと〜」タカヒロは  
引つ張られるように店の外に出た

美奈はメットホルダーからヘルメットを取りタカヒロに手渡す

「はい！被つて！」

「俺が後ろに？乗るの？」

「え？あたりまえでしょ？私のバイクなんだし。早く被つちやつて  
！」

タカヒロは言われるがままヘルメットを装着し、後ろに乗つてみた

「掴まつててよ！」

「・・・どこ・・・に？」

「ここだよ！恥かしがつてないの！死んじゃうよ！しっかり掴まつ  
てて」そう言つと美奈はタカヒロの手を取り自分の腰に手を添わせた



「・・・はい。・・・あの、安全運転で・・・お願いします。」

クスッと笑いながら美奈はアクセルを踏んだ。

タカヒロは戸惑ってしばらく無言でいた。5分ほど走ってからタカヒロは口を開いた

「ねえ、何処に向かっているの？」

「何？きこえなーいーい」

「ど・こ・に・向かって、い・る・のー！ー！ー！ー！ー！ー！」風に遮られる会話に大声で叫んで見た

「はー！ー！ー！ー！ー！」

はー！ー！ー！ー！？なんだろう？

もう一回聞くと、この強引な美奈に怒られそうな気がした。

風の中では静かに身を任せるだけの方がいいと思ったタカヒロは少し黙っていた

今日、初めて会ったばかりの女の子の背中にしがみ付き、そして普通に会話をしている

りっちゃんの孫の美奈。写真の中の広沢律子にそっくりな君の腰をしっかりと持ち

「何処に向かっているの」なんて。

人と人が出会うのって・・・いったいなんだろう。

じいちゃんの言うく運命くって・・・なんだろう。

タカヒロはバイクの後ろでそんな事をぼーっと考えていたのだ。  
ビュンビュンと風を切るバイクの後ろで、そして初めて会った女の  
子の後ろで

ただ、ぼーっと考えていた。

## 冷めた紅茶

20分ほど走っただろうか  
ゆっくりとブレーキを踏む美奈

「おつかれさま〜！」  
ヘルメットをゆっくりと脱ぐ

自身もヘルメットを脱ぐ

「ここだよ！目的地！」

バイクを降りた目の前には地下へ降りる階段があった

入り口付近の看板には

> Hello Goodbye <  
と木製の看板が掲げられていた

「あつ！BEATLESの曲じゃん！」  
一気にテンションが上がるタカヒロだった

「お店なの？」

「そうだよー 昼間はカフェで夜はライブハウスになんの。」

「へえー」

美奈はまた先にスタスタと進み地下への階段を降りて行った

コーヒー豆と洋酒が混ざったような不思議な匂いがしたが、けして悪い匂いでもなく

タカヒロはなぜかワクワクしたのだ

木製の重いドアを開けると静かにJazzが流れていた

ウッドタイプの丸テーブルが六つ程ある

けして広いとは言えない店内の長めのカウンターには男性が一人グラスを拭いていた

「お帰り！」 男性はグラスを拭く手もそのままに視線をまたグラスの方に移した

お帰り？

いらっしやい じゃなくて？

キョトンとしてると美奈がタカヒロに声を掛ける

「コーヒー飲める？」

「あつ無理・・・ 紅茶なら」

「私と同じだねタカヒロくん！

アールグレイでいいよね？」

「あ、あー 紅茶ならなんでも、いい」

「お父さんアールグレイと紅茶のシフォンケーキ！」

「あいよ。」

「おとうさん？」

「お父さんなの？」

「タカヒロくんの驚いた顔、今日二回目かもね！」

あのだ、私の両親がやってるの。昼間はお母さんで夜はお父さん。

おばあちゃんがオーナーなんだけどね！」

「りっちゃんが！」

「あーだから店の名前BEATLESの曲なんだね」

「そうそう！良く知ってるね！」

おばあちゃんが最初やっていたんだけどね父さんに任せたの。五年くらい前かなあ。」

「素敵な店だよね！」

「でしょー！ケーキも手作りなんだよ！」　少し誇らし気に美奈は言う

「で、タカヒロくんおばあちゃんに逢いたかつんでしょ？」

「そうなんだ。いつ戻るの？」

「わかんない。」

「わかんないの？何泊とか予定あるよね？」

「ないよー。でも、今回はお母さんと一緒だからそんなに長くはないと思うんだー。」

いつもはさ、ガラガラと旅行鞆を引いてプイって行ってしまっの。自由人なんだ　おばあちゃん

連絡、取ろうか？」

「うーん。いい。いいや。」　タカヒロは少しだけ考えてそう答えた。祖父隆の言うく運命>と言う言葉が頭から離れないでいたのだ

じいちゃんとりっちゃんの運命・・・か・・・薄暗い店内の中のサイフオンのブクブクを見ながらいろいろ考えていた

「はい。お待たせく紅茶とケーキだよ。」　美奈のお父さんの柔らかい声で我に返った

「あ、ありがとうございます！」

「あーバイク先に車庫入れてくるね。先食べててね、タカヒロくん」  
「では、お先に。」

「タカヒロくんって言うんだ。美奈とは付き合い長いの？」いきなりの質問だった

「あつ、自分、山村隆宏って言います。すみません挨拶遅れてしまつて・・・さつき、さつきなんです。

下野楽器で会つて・・・でも、あのなんか繋がりがあつたみたいなの・・・」

説明が上手く出来ないでいた

「あそ。ごゆつくりね」自分で聞いた割には興味をあんまり示さない父親だった

タカヒロは背中に変な汗をかいてしまつていた

幸か不幸か、あんまり話好きではないらしい父親に密かにホツとしていたのだ

美奈が戻つて来た。カウンターで父親となにやら話していた  
再びタカヒロの方を見る父親にタカヒロは軽く笑顔で返すのだった

「お待たせ！」

あのさ、タカヒロくん・・・総合病院に美山さんて人居た？私はたまにしかお見舞い行かなかつたから、よくわかんないんだけど。

その人ねさつき店に来たらしいんだー。」

「美山さんってりつちゃんの階の看護師さんで・・・その・・・」

「どしたの？なんで店にわざわざ来たんだろ？なんかお父さんが言

うには自分の無責任な仕事のせいで  
おばあちゃんに迷惑をかけたって、謝りに来たんだって。

でさ、ここの住所をある人に伝えたいって」

「そうだったんだ。・・・うん実はさ、こんな事があつたんだ

タカヒロは先日の出来事を掻い摘む事無くゆっくりと美奈に話始めた。

律子との事もゆっくりゆっくりと。飲みかけの冷めた紅茶とフオークが刺さったままのタカヒロのケーキ・・・  
店内には美奈とタカヒロの二人しか居なくなっていた

美奈は少し涙ぐんだ

「美奈ちゃんもなんか僕と似てるね。なんかさ、切な過ぎるだろ？  
50年って長くない？

僕ならどうしてただろ・・・とかいろいろ考えたよ・・・したらさー  
涙が出てくるよね。」

「ね、タカヒロくん・・・こっち来て」美奈は徐に席を立つと入り口の階段のところに向かった



入口から店に入るまでの地下の階段の壁には沢山のフライヤーが所狭しとビッチリと貼られていた

「ここ、見て」美奈が指差した先の壁をタカヒロは近付いて見る

「……………これって……」言葉を失うタカヒロだった

## ハロー・グッバイ

タカヒロが見たものは  
タカヒロが祖父、隆の部屋で見つけたのと全く同じ写真が目の前に  
あった。

今、自分の横にいる美奈とよく似た顔の律子の写真。それだけでな  
はい、  
軽音部のみんなが文化祭の当日に撮ったであろう写真やリッケンバ  
ツカーとギブソンが仲良く二本並んでる写真、小高い丘の二本の桜  
の樹、

二人の思い出の全てが色取り取りのフライヤーに混じって  
貼ってあったのだ。

そしてもう一つタカヒロを釘付けにしたものがあった。それは額に  
入れられ特別な存在として飾られていた  
文字入りの袖の部分だけが焦げた黒のＴシャツだった  
額縁の中に大切に飾られたそれの中にはおそらく手書きのものだろう  
こう記されていたのだ

「いつかまた、あの樹の下で・・・会いたいね。  
もう、一度逢いたいね」  
と。

ライブハウスは青春が詰まっていると言ってもおかしくない場所だ。  
誰も不思議がる事なく

誰も聞く事もなく

ごく普通に、ごく自然にそこに存在して当たり前かのように……。

その言葉は律子が願いつけた事なんだろう。

タカヒロはそんな事を思うと胸が痛くなった

最初はきつとこれが一番に飾られたんだろう。時が流れたくさんの  
フライヤーが入れ替わろうとも  
何年も、何十年もこれだけは変わりなくここに飾られていたんだろ  
うと。

「美奈ちゃん ありがとう

今日ここに僕を誘ってくれて

……りっちゃんに会いたくなつたな。

毎日二人で本を読んでいる時ね 楽しかったんだよ。」

「うん。」 美奈は優しい表情で、ただ一言だけの言葉で頷く

「僕のじいちゃんをここに連れて来る。

退院したら連れてくる。絶対。」

「うん。待ってるね」 美奈は律子と同じ表情の、口をキュッと  
結んで、今度は笑顔で頷いた

タカヒロは今度は先に歩き再び店内に入る

冷めた紅茶と残りのケーキを頼張ると

リュックから財布を取り出した

「いないよ。美奈の奢りだよ！」

「ダメだよ いくら？」

「じゃ次回奢って！また来るんだよね？」

「うん そうだね！ そうする。ありがとう」

「おじさんご馳走さまでした！ケーキ美味しかったです！」  
カウンターの美奈の父親にも声を張り上げて言った

「あいよ！また来なよ！」

店を出ると夕方の空が夜を迎えようとしていた

「送るよタカヒロくん 待ってて。」

「いいよ！バス停が来る時に見えたし、帰りはバスで帰る！」

女の子に送って貰うなんてダメダメ！」

笑いながらタカヒロは店を後にした

「タカヒロくん またね！グッバイ！」 「うんバイバイ！」

グッバイかぁー。

ハロー グッバイ

<こんにちは

> さようなら

そして・・・こんにちは。

さよならは こんにちはとセットなんだな。

りっちゃんの過去の「さよなら」は未来の「こんにちは」になる希望だったのかな。

・・・  
さよならは別れの言葉じゃなくて、再び会うまでの遠い約束。  
ずっと前に母さんが口ずさんでたっけ。

遠い約束を交わしたのかな？さよならは言ったのかな？

・・・わかんないや。

タカヒロはバスに乗るために時間をみる

時計をしないタカヒロは鞆から携帯を取り出した

「あつ着信

じいちゃんだ。」

タカヒロはかけ直す

「じいちゃん。ごめんね！今日はすごい一日だったんだよ！電話では話せないほどさ！」

タカヒロは興奮しながら話した

「どうしたんだ？なんだか楽しそうだ。

、電話したのはだな、律子にやっぱ会わないといけねえ気がしてな。

それだけだ。じゃ切るな。」 「じいちゃん今度ま・た・・もしもし？・・マジ？」

電話が苦手な隆は用件だけ言つとすぐに切ったのだ。

バス停に着くまでにすっかり夜の帳に包まれた

人通りの少ない闇の向こうから

眩しいライトを放つバスがやって来る

バス停近くの木々達は夜の風にサワサワと音を立てていた。

「時に変えられる」

病室で隆がギターを出して、弾くでもなく、手入れをする訳でもなくただそれを眺めていた時だった

「山村さん、こんにちは。」

隆が顔を上げるとそこに立っていたのは6階の看護士の美山だった

「ああ、君か。なんだ？検温ならさつき済んだよ。」

「あの、違います・・・あの先日は申し訳ありませんでした」深々と隆に頭を下げた

「ああ、もういいさ。顔上げな・・・言つたろ。君は悪くねえよ君は君の仕事をした。それでいいんだよ。」

それとも婦長さんにこっぴどく叱られたのかい？」

「いえ、叱られると言つより・・・私の未熟さを、その・・・気付かせて貰いました。」

「未熟さつて当たり前だろう？君はまだ若いんだ。これからじゃねえかい？」

「婦長さんも・・・同じように言つて下さいました。」

あの、それでこれを今日は・・・」そう言つと美山は可愛いメモに書き記したものを隆に手渡した。

「なんだ？・・・桜台2丁目・・・Hello Goodbye・・・」



「何？」

「広沢律子さんの住所……です。会ってください。お願いします」  
「君これ……わざわざ聞いてくれたの？」隆は驚いた。そしてその渡されたメモをじつとみつめた

「ね、君はさ、運命ってどう思う？」

「？……運命ですか？なんだろう、人の意思を超越した決められた……定め？でしょうか」

「そうだな。俺はさーあの律子とは昔知り合いだった。けど会えなくなっちまった。たぶん一生会えないと

そう思っていた。だが、いろんな偶然から律子と再び繋がれたって  
いうかな。あの時、ここで

会える事も出来た訳だ。けどまあ流れがあってそれも無理だったみたいだな

けど今こうして君が律子の住所を俺のところに持って来てくれた。  
俺は、会っていいのかな？……君に聞くのもおかしい話だがな」

「いえ、会ってください！私のせいであんな結果を招いてしまいました。私は後悔しました。看護師と言う仕事を舐めてました。でもそれを気付かせて貰ったんです。あの一件で。」

私はカルテに記載されていた広沢さんの所に向かいました。

・ あいにく広沢さんはお留守でしたけど、義理の息子さんがいらして  
・ それで今日山村さんにこれを。

山村さん、運命は・・・時に変えられるんじゃないでしょうか。私もあのまま、あの伝言の件が自然に消えてしまつてたなら、きっと私は腐つたまんまの人生を歩んでいたかもしれせん。

・・・変わる気がしたんです。」

「そうか。そうだなー。<時に変えられる>かー。いい言葉だな。ありがとうな。」

美山さんって言ったな、君は良い看護師になれると思うよ。いや、もうなつてる。」

「・・・あり・・・がとう・・・ございます」言葉に詰まり涙声になる美山だった

「では失礼します。」再び深く頭をさげ病室を出て行く  
隆は引出しから財布を出し、メモを財布にしまった。

隆はこの狭い4人部屋ながらたった一人だけの広すぎる空間の中で  
いろんな思いを抱いた

自分の生きてきた道は正しかったのかどうかと言う事を。

ただ真つ直ぐに思うまま正直に生きてきた。自分に嘘をつく事無く、  
ただただ真つ直ぐに。

だが結果として友達や家族を傷つけたのかもしれないと。  
自分はほんとはとても弱い人間で、ほんとは周りの人に支えてきて  
貰ったからこそ

今の自分があるんじゃないかと言う事を。

俺みたいな奴の為に彼女は仕事以外の事で俺の事を思ってく  
れたから・・・

このメモを無駄にしちゃいけない。。。

一日も早く退院しなきゃならねえ。

隆は引き出しに仕舞いつ放しの薬を出してみた。

「うえ、不味い！粉は苦手だっていつてんだろうが〜よう〜」一人  
ブツブツ言いながら久しぶりに飲んだ薬だった

「山村さん どうですか？体調は？」 「オホツ・ゴホツ」 い  
きなり病室に入って来た医師の声に驚き咽る隆だった  
30代の若い担当医が丁度、回診に来たのだった

「先生よう、ゴホツ・」

この粉薬、なんとかなんねえ？不味いし、飲めねえ」

「はっはっは！山村さん今までずっとこれでしたよ？薬を変えてか  
ら飲んでなかったみたいな感じですか？」

「・・・」

「山村さん、困りますねえ。先日の検査の結果言いましょうか？」

「どうせ変わりっこねえんだろ？もう聞き飽きたぜ。」子供の様に  
軽く耳を押さえ口をへの字に曲げてみる

「不思議ですね。薬を飲まれてない？割には安定してます。

ちゃんと飲んでれば明日くらいには退院出来ましたがね？」少し意  
地悪にモノを言う医師

「本当ですか？いつ頃退院出来ますか！先生！」 単純な隆だった

「この仕事は何年もしてますが、人間の持つ自然治癒力っていつもすごいなって思います。」

入院されてもどんどん悪くなる一方の方もいます。

治す気があれば薬と半々の作用だなんて、医師としては変な発言ですが、いつも思うんですよ。西洋医学や東洋医学、病気を治す術はいろいろあって、後は人間の持つ、そう本人の治すぞって言う強い意志が最大の薬だと思っんですよね。

山村さん。お薬をカプセルに変えますので毎食後にきっちり飲んでください。

あなたは今、治すぞ！って目をされている。これだけ安定しているのだから後は健康な数値に戻すだけです。何も難しいことではないんですよ。

後少し、一緒に頑張りましょう」ガッツポーズを交え医師は力強く語った。

「……はい」隆は鼻を嚙りながら

「ダメですね。年いくと涙もろくなっちゃって……カプセル・早えとこお願いします」

「はいはい！」医師はそう言うと病室を後にした

隆の気持ちはあの時の様に走りだしていた

ぼーっと眺めていた目の前のギターを再び持ち上げ、抱え、

弾きだした。



## 無償の愛

「この街並みも少し来ない間に変わったわね。」  
安っぽいプラスチックのコップに入ったアイスコーヒーを一口飲んで口を開く律子

少しの間 押し黙ったまま小さい四角の氷をストローでなんども突く。シャリシャリと無情な音をたて沈んでは浮き、そしてまた奥に押しやられる。今の気持ちを代弁するかのように・・・コップの底で蹲っている

目の前の行き交う人々の流れに、時に目をやりながらすっかり薄くなったアイスコーヒーを飲み男は言う

「リイ、もう決めたんだね、」 コップの中の氷の存在すら消えていた

「サム、貴方は私と出会っていなければもっと幸せになれたんだと思う。今は こんなカフェテラスで、にこにこ笑いながら大きな犬でも此処に繋いで楽しく会話でもしてたんでしょね・・・ごめんなさいね。」

我が儘な私の人生を受け入れてくれて、

ほんとにありがとう。」

「リイ。僕はね、リイだからこそ今もこんな穏やかで幸せな気持ちになってると思うんだよ。」

そりゃ好きになった女性とは結婚して子供を設けて、そうだね 大好きな大きな犬を飼って、、 こんな所に繋いで

「今度の休みには何処に行こうか」なんて話も・あつたかも知れないね。

君は結婚はしないとしつかりとした目で僕にはつきりと言ったね。

そんな君の強い意思にまた僕はねメロメロになった。

ダメな男だね？ハハハ

佐紀子が君のお腹に宿った時も、君が産むと決めた時も

またそれで惚れたんだ。

紙切れ一枚で夫婦になれるなら、紙切れ一枚ですぐに終わる事も出来るだろ？

そう考えれば薄っぺらなものだろう。

絆があればそんなものはもうどうでも良かった。

君がたまにこうしてこっちに来てくれるだけで僕は良かった。

ただ、リイ、君はいつも遠くを見てたね。

いつもリイの中には誰かがいたんだね。「律子の瞳の奥を覗き込むように静かに話す

「気付いてたのね。サム」

「あたりまえだろ？いつもいつもリイだけを見てたんだよ。もう一つ気付いた事、、最後だから教えようかりイ。」

タカシさんって言う人？だよな？」

「なぜ？」 律子は驚いた

「なぜ名前を？」

「リイがうなされる時ね 決まって言ってたんだよ  
タカシ、行かないで。って

幾度となく同じ名前を聞いた。  
それでもね、僕はタカシさんを好きな一途なリイを丸ごと愛してたんだ。

・・若い時はね さすがに辛かったよ。うなされて寝言を言つりイ  
の手を握って・・僕なら僕ならずと傍に  
いてやれるのにな。タカシさんは何処に行ってしまったんだろうね  
って

リイの頭を撫でていた。そしてしばらくするとまた寝息を立てて。  
僕はリイの寝息を確認して自分のベッドに戻った。



けれどいつ頃からか、辛いとか言う気持ちが消えたんだ。

リイがわざわざこっちに来てくれている

それだけで十分だった

今を この今を大切にしようと思ってね。

その気持ちは今も変わらない。

僕には血の繋がった 佐紀子や美奈もいる

そして、リイは心が繋がっている。 そうだろ？

リイから先週 連絡を貰った時にね

なぜか最後の気がしたんだ。

会ってやっぱり分かったんだよ。

決意した眼差しがね、悲しい程に輝いていたんだよ。

リイ 君は美しい。君が幸せに過ごせるように祈っているよ。

・・・リイがたまたま旅行に来ていて、この近くのライブハウスで知り合った。

物悲しい瞳は今でも焼き付いてるよ。

、、幸せになるんだよ。」

サムの穏やかな一語、一語が痛いほど、嬉しいほど律子の胸に刺さる

「ありがとう・・・」返す言葉がなかった。ありがとうしか  
言えない律子。涙が一筋流れた

無償の愛で包まれていた事を今更に気付いた訳でもなかった。ただ律子の心には生涯タカしか入り込めないと云う事も同時に分かっていた。

律子に迷いはなかった

サムと会うのは最後にしよう。

心だけは繋がっていきましょう。永遠に。

決心は揺らぐ事はなく、今の律子の目からは頬を優しく伝う一筋以外、溢れ出る事もない。

「ねえサム、これからどうするの？」

「僕なら心配いらないよ。

牧師に定年はないしさ、ゆっくりと穏やかにすすむぞ。

来年にはね乳寺院の建設も決まっているしね、

いつも周りには沢山の人がいるんだよ。だから僕は心配ないんだよ。

リイ。お互いまだまだ生きよう。そしてこれから先も笑顔の僕たちでいる事！それだけは約束してくれよ。

もうここには戻って来ちゃいけない。」

「サム・・・今月末に帰国するわ。」

「リイ！明日は君の好きなグラタンパイを作るよ！そして次の日はタンシチュー・・・そして次は・・・」

「……サム。」

サム？私は一応女ですよ。その次の次の、次は私が作るから。あなたの大好きなものを毎日。

……帰国するまで……毎日ね。」

「お母ーさん、お父さーーんーーお待たせ！！」通りの向こうから娘の佐紀子が大きなバケットを抱えて戻って来た。

「あそこのパン屋さんの流行ようつたらすごいわね！このバケットなんか私で完売よ。」少し息を切らしながら話す

「今日は美味しい赤ワインがあるわよ！」娘の佐紀子は二人の空気を感じていた

「良いお天気ね！明日も、明後日も……こうだと良いね……。」空を見上げながら呟いた



## 新しいルージュ

空港に降り立つ律子と佐紀子

「お母さん お疲れさま。大丈夫？」

「ええ。」

「ねえ、佐紀子先に帰っててちょうだい。

私は隆の病院に寄って行きたいの。」

「分かった。じゃ荷物だけ持って帰っておくわ」

タクシー乗り場へ移動する

「運転手さん ＊＊＊ 総合病院までお願いします。」 母、律

子が後部座席に乗ると佐紀子は運転手に告げ

笑顔で母に手を振る

「ありがとう佐紀子」

「行ってらっしゃい！あつ！ちよつと待って！

お母さん。これ向こうで買っておいたの。」

そう言うと佐紀子は自分の鞆から箱に入った口紅を取り出した

「隆さんに会うんでしょ。これね素敵な色だったのよ  
会う前に付けるのよ！」  
母と娘なんて何時というボーダーラインはないものの、立場が逆転  
するものだ。

娘の気持ちに痛く嬉しかった

律子は小さな箱から真新しいルージュを出す。

ローズに近い落ち着いたピンクのルージュだった。

「こんなに鮮やかな色の口紅は何時ぶりかしら」

バックから手鏡を出し鮮やかなピンクを塗って見る

少し付きすぎたかなと中指で余分な口紅を落とすように唇をなぞる

隆との事が蘇る

私のこの唇をなぞるようにあなたは指を這わせ、そして私の心を覗  
き、・・・奪った。

会いたい気持ちが車窓から見る景色さえも過去の景色に変えた

運転席の方に身を乗り出す

「運転手さん少しだけ急いで貰えます？」

急ぐ理由は一つしかない

ただ、一刻も早く会いたい。それだけなのだ。

バックミラーに映る自分を見る。

・・・ピンクの口紅をひこうが無駄な気もした。  
だれがどう見ても・・・わたしはもう、おばあさんなのだ、と。

病院に到着するとすっかり暑くなった季節に目眩すら感じる。額から滴り落ちる汗も拭わない。

ただ無心に、自動ドアを通り過ぎ、エレベーターに乗り込んだ  
エレベーターのボタンすら過去に繋がる気持ちでいた隆がいるならば  
今の律子には真逆だった。

未来に繋がるであろうボタンを躊躇する事なく押す

< 8階です >

チン と音を立て扉が開く

律子はドキドキとしていた

受付に寄らずに自分で探したかったのだ

一室つつ部屋の名札を確認する。そして向かい側の部屋の名札も

確認してみる

二部屋、三部屋と進む度に不安な気持ちが胸いっぱい広がってゆく

後二部屋、

最初になんて挨拶をしようか、

学校帰りのタカがいてくれたらどれだけ安心かと律子は思う

次の部屋の前に差し掛かると清掃の女性がちょうど名札に手をやり外そうとしていた

手元に何気なく目をやると

<山、の文字だけが見えた >

もしかして

すれ違ってしまったの？

タカと出会った頃の言葉が頭をよぎる

『じいちゃんの後二ヶ月くらいかな？我が儘だからね、』と

退院をして、ニューヨークに滞在し、そして帰国した。時間というもの、

それぞれに沢山流れ過ぎたかもしれない・・・

体中から水分が溢れ、血が逆流し、今にも倒れそうな自分がいた

「すみません・・・」と声を掛けてみる



中年を過ぎたくらいの女性の清掃係が雑談をしながら清掃をしている

律子の存在すら気付かないでいた。

「ほんとにね、人間って偉いわね。」

「急変したんだってよう。」

「だけど普通は奥さんとか子供が来るでしょうよ。」

「いつも一人だったらしいわよ。」

「すみません！」無理やり会話に割り込んでみた。

「あら、やだ。」

「いつからそこに？」

「いえ、声を掛けたのですが、

あの此処にいらした方は？ 男性ですよ？私と同じくらいのこと！

手術、とかですか？」

不安な気持ちで律子を矢継ぎ早に質問させた

「今朝亡くなったらしいよ。」

「急変したらしいよ。」

「お知り合いなの？」

律子は力が抜けその場に座り込んだ

「あんだ、大丈夫かい？顔が真っ青だ」

『そんなはずはない。あの人は死なないの。』

体中に溢れるはずの水分さえどこかに存在を隠した。涙腺ごと姿を消したのだ。

律子はその場で気を失った。

目が覚めると目の前に心配そうに覗き込む男性がいた

「タカ？タカなの？」頭がポーツとし、視点が定まらない。

「起きてはダメだ。さっ目を閉じて。  
もう大丈夫だ。」

退院したはずの部屋、部屋から見える風景も同じ

ただ季節は確実に違う

強い日差しがカーテンから伺えた。

体が動かない。

これは夢？

私はなぜ、またここに・・・

## 陽炎

柔らかな心地よい風が顔にあたり目が覚めた

頭がまだボーっとしていた

ゆっくりとベッドで上体を起こして

何気なく辺りを見回す律子

以前入院していた部屋とほぼ同じ造りで

やはり窓から見える風景もなんら変わりなかった

時計は17時を回っていた

私はなぜ今ベッドに？

落ち着いて思い出してみる

カチャ。ドアノブを触る音がし、

ドアが開いた。

「目が覚めたのか？もう大丈夫なのか？」

野太い男性の声がした

白髪に髭を蓄えた男性がいたのだ。

誰？なの？と

会釈をしかけた律子に

「律子 久しぶりだな。」

なんて顔してんだ。俺の事、やっぱり分かんねえんだな。

仕方ねえなあ、あれから50年だぜ？俺はもうこんなじいさんだ。」

律子は目を見開いたまま言葉を失う

たか、し？タカ？タカなの？・・・

いえ、これは夢なのよ。夢なんでしょ？

あんなに無愛想で笑わないあなたが笑ってる。

優しい笑みを浮かべてる

私はそう、退院したのよ。

だからこれは夢なのよ。

律子はまだまだモヤモヤとした頭のまま自分に言い聞かせた

私はあなたに会いにこの病院に来たの。

清掃係があなたの名札を、剥がしていたの、それから・・・

「ねえタカ？これは夢よね？」

声に出して問いかけた

隆は優しい笑顔で答えた

「そうだな。夢かもしれないな。」

『夢なら、夢ならどうか覚めないで』  
律子は全身全霊で願う。

夢なら、いつか覚めてしまう

「タカ。私ねいつも同じ夢を見てた。

あの文化祭の後に鞆を下げて一人校門を括るあなたを私は三階の教室の窓から見てた。

また明日になれば会えるって、

敢えてさよならのバイバイは言わなかったのよ。

寂しくなると夢を見たわ、、、

校門から出て行くタカに私は

隆行かないで！って

なんである時言わなかったんだろう。

・・・言えなかったんだろうって

ずっーと後悔していたの。

これもどうせ、夢なんだから本当の事を言っておくわ。

タカのバカヤロー！私はずっと待っていた。

河本からも告白されたの「俺じゃ・・・ダメなのか」って

私はタカだけなのっ！て断ったの。

それから、それからね

私は旅行先で一人の男性と知り合い、お付き合いをし、子供が出来たの

だけど結婚はしなかった。

私にはタカだけだった。

そう、夢だから言うのよ。

何年、何十年待ったと思ってるの？

あなたがこの方が似合うぜって私の髪を下ろした

だから私は何歳になろうが髪を伸ばしていた

あなたに何時会ってもいいように

律子は結っていた髪を解いた

「長いままなのよ！

口紅も塗って見たのよ！

だけでもう、黒髪じゃない！

口紅をいくら塗ろうがこんなにシワシワで、  
声だって、もうあの時のように高い声は出ないのよ。」

立ったまま話をジッと聞いていた隆は律子の傍に来る  
そして律子の横に座る

律子は隆の目を見ながら

「・・・お願い。夢じゃないって言ってちょうだい  
お願い、」



律子は顔を上げながら子供の様にしゃくり上げ泣いた

「・・・律子。ごめんな。」

夢じゃねえ。夢じゃねえよ。ほら、俺もシワシワだ。髪も真っ白だ。あの時はなかった髭もある」

律子の両手を取り、隆は自分の頬に律子の手を持ってくる

「シワがあるだろ？」

髭もあるだろ？」

「うん。」 17歳の律子が頷いた。

ほんの少し落ち着きを取り戻した

隆はあの時のように律子の唇に触ってみる

「口紅、似合ってるよ。髪も綺麗だ。」 隆の大きな手は律子の髪を優しく撫でた

隆はゆっくりと律子に口づけをした。

過去と未来を繋ぐボタンはすぐそこに、あったのだ

---

外のアスファルトは昼間の地熱をゆっくりと冷ます

ふわふわ・・・ゆらゆら・・・

陽炎が昇り立つ熱い時は  
時間と共に消えゆく

夏の夕刻はまだ明るい

二人の時間は今

ほんの少しだけ・・・止まっていた。

## アルタイルの下で

「もう泣いちゃいけねえ。綺麗な顔が台無しだ。」

律子、お前は今でも本当に綺麗だ。「涙が止まらないでいた律子に隆は言った

「律子・・・実は俺も待ってた。待ってたんだよ。俺から連絡なんて出来ねえ。出来やしねえ。」

律子に見せる顔がねえよ。いつかお前にちゃんと謝りたいって思ってたんだ。

一年が過ぎ、三年が過ぎ、そして十年過ぎた頃には・・・もう、俺らは会っちゃいけねえって気持ちになってった。

自然に忘れられるだろうって思ってた。

俺は街を出てからいつそう前よりも誰も寄せ付けなかった。

ある時、住み込みで働いてるとこのオーナーの娘と知り合って、御飯とかも世話になって・・・気がつけば

俺は人の親になってた。

俺みたいなもんが人の親にな。

けど俺もどこかでお前を思ってた。音楽や酒で紛らわせてたが満たされない心が叫んでたんだ。

・人生って上手くはいかねえな。

そつだ律子、今食べたいもん　ねえか？売店でなんか買って来てやる」

「ほんとに？タカが私の為に？そんなに優しくかったっけ？」

「あたりまえさ！これは夢だからさ？」

一瞬、不安げな顔をした律子だった

「嘘さ！すぐ戻ってくるよ！いい子にして待っててな」  
子供扱いする隆に律子も甘えてみた

「冷たいアイスがいいわ」

「おっ」

軽く手を振る律子とそれに答える隆

律子は安堵感からほんの少しだけ目を閉じた

5分程して律子のいる病室に婦長が入ってきた。

「広沢さん！大丈夫？8階で人が倒れたと8階の婦長から連絡が入ったのよ。血圧が急に下がった為らしいわ。いろんなお薬も飲んでるし、気をつけてね」

「ご家族には連絡しておきましたよ。明日の夕方には帰れますよ。」

「逆戻りね私。でも良いことがあったから倒れて良かったの」

「まあ広沢さんったら。山村さんね？さつき会いました。嬉しそうにされてたわ。あの方今朝よ、退院されたの。」

「律子！アイスあったぞ！バニラとチョコのを一つづつ、買ってきたんだ」

小さなビニール袋を高く上げ笑顔で言う隆。婦長にも笑顔で会釈する

「私はバニラね。」

「俺がバニラだぞ。律子はチョコが好きだっただろ？せつかくな・・・」袋からアイスを出しながらブツブツ言ってみる

「それはもう何十年も前の話。こんな時は口がさっぱりするバニラに決まってるでしょ？」

「俺は甘ったるいチョコは無理だぜ・・・」

「仕方ないわねえ・・・今日は私がチョコでいいわよ。」少し拗ねてみる

「あらあら高校生の会話みたいね？」婦長が笑いながら二人を茶化す  
「広沢さん、男は我がままなんだから、今日は譲っておあげなさい」

「？」

「そうね、今日は・・・」

今日は譲る・・・明日は・・・この次は・・・

些細な会話でさえ未来が詰まっていると律子はまた涙ぐむ。

「山村さん、今日は付き添いされますか？簡易ベッドはその下に収納されていますが？」

「今日退院したばかりですけど・・・いいですか？  
・・・律子の傍にいてやりたいんです。」

いや、俺が・・・いて欲しいんです」

「分かりました。ではなにかありましたらナースコールを押してくださいね」

そう言っって婦長は部屋を出た

「・・・律子 勝手に決めちゃったが今日は此処にいていいか？」

「ありがとうタカ、嬉しいわ。  
ねっ　アイス溶けちゃうわ。  
食べましようよ。」

「そうだな。　こんなに冷たいもんは何十年も食ってない気がするな。」

そう言いながら二つのアイスの蓋をゆっくりと開ける隆。

隆はバニラのアイスを律子に渡す

「タカ、いいの？」

「おう。俺は律子に借りがあるからな！」

「借り？何かしら？」

「早く食べな！」

「ありがとう。」

隆は何口か食べた後

「甘え、もういらねえ。」と律子に差し出した。

「タカったら変わらないわね。」そう言いクスクスとあどけなく笑った。

「交換してあげるわよ。」 「いらねえさ。」

律子は隆に差し出す

受け取るまで手を引つ込めないでいた

「律子の強引さも変わらねえな。」

流れ過ぎた時を二人はゆっくりと取り戻すのだった

「律子もう暗いけど、テラスに出てみるか？」

「ええ」 「歩けるか？」 二人は3階の中テラスに向かった

「ここから夜空を見たのは初めてよ。夏の大きな三角形が見える。ほら



！ 律子は指を指してみる

「綺麗だなー。空だけは・・ずっと変わらねえな。」  
隆は律子の肩に手をまわした

律子も隆に寄り掛かった。

「なんでもっと早くに、、」  
「ほんとだな、、」

「私はタカと出会えて良かった。好きになれて良かった  
ただそれだけよ  
借りとかそんなのは 関係ないわ。」

いろいろあつてこそじゃない。  
だからこんなにも思い続けていたの。

会いたかった タカ。」

「俺も会いたかったよ 律子。」 互いに目を合わせずに星空を見  
上げながら話すのだ

それから二人は五本の指を絡み合わせきつく手を握り、繋いで夜の  
テラスの中をゆっくりと歩いた。

夜の中テラス

白い街灯には無数の虫が飛び交っていた

揺れる緑の木々、人のいないベンチ

聞こえるのはエアコンの室外機の音と、飛行機の音

そして二人を照らすアルタイルの星。

何もかもが二人の世界の中に溶けこんでゆく。もうそれ以上はなに  
もいらない。

時々、握った手をギュッとしてみる。そしてそれに答える。

言葉すら、もつけないのだ。

今の二人には。

## 刹那

部屋に戻った二人は今までの事を話した。そう、二人の時間が止まったあの日の事を。

「タカ、文化祭の時なぜ一言、相談してくれなかったの？」

「ああ。」

「ジミヘンの事。」

一言・一言みんなや私に言ってくれば演出に変える事だって出来たのよ。

学校、、辞めなくて良かったのよ、、

ねっ 知ってる？燃え盛る炎にアルコールを拭きつけるの。アルコールに溶かした物質によつては炎の色を自在に変える事が出来たのよ？

暗幕の張られた舞台では最高の演出になったわ！

例えばね、塩化ストロンチウムは赤、ホウ酸は緑、塩化リチウムに至つては深紅になる。

・・・そんな事、後で思つても仕方ないのに・・・なんかね、当時は振り返つてばかりいたの。かなりシヨックだったわ。どうしてタカが学校を辞めてしまわないといけないのって。」

「そうなのか？さすが律子はよく勉強出来たからな。

最初はサプライズでやろうと軽い気持ちもあった

だが親父の事や なんたるな・いろいろあったんだな。

今考えれば浅はかだったが

けど後悔はしてない。

俺の生き方のシナリオには最初からあったかもしれないねえ。そう思ってるさ、今でもな。」

「そうね あなたらしいかもね。」

ねっタカ？

簡易ベッドは固いわよ

横に来る？」

「律子、二十年いやせめて三十年若かったらな

律子、やるっぜー！

なんて言えてたのにな?」

「馬鹿ね!タカったら!

そうね私ももつと、もつと若かったら?

しよ!なんて言ってたかもね?」

「ホントか?」

「言わないわよ! ばかつ。  
ねっ手を繋いだまま眠りましょよ。」

「おう。」　大きな手で律子の細い指を握る隆

---

夜中に暑さで目を覚ます律子

繋いでいた手はいつの間にか離れていた。

なんとなく現実に戻ったと思った

律子は、隆の背中をじっとみつめていた。

会いたかった人が今、  
この今私の十センチも離れていない此処  
にいるのだ

律子は隆が愛おしくたまらなくなった

律子は隆の背中に顔をつけ背中に抱きついた

温もりを感じたかったのだ  
向けられた背中に  
歩んで来た道のりの長さやそれぞれの環境の違いを知らされた思い  
もしながら

律子は隆の背中にぴったりとくっついてみた。

朝方、病院の周りでは鴉が沢山飛んでいた  
うるさいくらいに泣いている。

病院からさほど離れてない場所には火葬場や墓地がある為か

入院中は毎日鴉の声で目覚めていたが気にもとめなかった

ただこんな日の特別な朝は違った。

鴉の声が切なく響いた。律子の心の中に染み付くように大きな声で鳴いている

カアカア 、カアカア

何かを探しているのか、ただ共鳴しているのか・・・それとも威嚇しているのだろうか・・・

鴉の奇妙な声を聞きながら 律子はギュッと隆にくつついた

律子は思う

これから、この先どんな朝を迎えようと

鴉の声を聞く度に私はきつとこうして貴方の事を思うんだろうと。

近くににいるのに遠い人、 人は時として過去を思い出す瞬間に五感が震えるように騒ぎ出すのだ

あの時の・・・匂い・・・あの時のBGM・・・あの時の風景・・・

薄暗い窓の外、電線には薄気味悪い鴉たち、けれど自分の横には大好きな人がいる

「う、うーん暑いな」 寝返りを打ち、 隆が目を覚ました

「律子 寝れないのか？」

律子の方に向いた隆に律子は告げた

「ずっと一緒にいたいわ。」

隆は黙って頷いて律子を抱きしめる

「鴉か？うるせえな。」

「なんか怖いわね」

「ん？鴉が？ 俺がいるだろ？  
まだ夜明けだ。 寝なよ」

隆は律子の髪をなで 髪の毛にそっと

キスをした



カアカア　カアカア、

今は何も考えず、ただ隆のぬくもりに甘えていたい。と思った。

時が止まるなら、今がいい。まるで刹那主義の若者のような・・・そんな気持ちに似た感情だった

「腕枕、してやるうか？」

「いいわよ。タカの腕が痛くなるわ」

「なに遠慮してるんだ。」そう言って隆は右手で律子の頭をそっと持ち上げ自分の左手を律子の頭の下にそっと入れてみた

カアカア、カアカア・・・

「鴉の声が愛おしく思えるまで腕枕しててやる。だから寝なよ。」

律子はそっと目を閉じた。



Here come The sun

いつも、いつもこうして目を閉じてきた。

もう逢えないのなら忘れようと何度も何度も目を閉じた。夢のあなたを追いかけては同じ朝を迎える。

今また目を閉じれば、、、、

律子は眠れないでいた。

『また同じ朝が来てしまっ』と。

「タカ、タカ やっぱり眠れないの。起きて。」 珍しく律子はわがままに隆を起こしてみる

「ああ、律子、実は俺もほとんど寝てねえ。」

「昨日、ここにあなたを探しに来たわ。掃除をされてた人が名札をはずしていたの。山、、つて文字が見えた  
その瞬間、頭が真っ白になったの。生きて必ず会って決めてたの。私が癌だって分かった時もそう、私は死なないって。。。。だからタカも死ぬはずないのって。。。。だから、だから」

隆は興奮気味に語る律子を宥めるように

「律子、俺は此処にいるだろ？ 俺の病室は一番奥だったんだ。昨日、退院手続きを終えてな、会計を済まして荷物やギターを取りに戻ったら律子、お前が倒れていた。タカヒロも一緒にいてタカヒロが律子だって気付いてな。。。。俺もびっくりしたんだぜ。」

まさかこんな形で再会するなんてな。」

「タカヒロくんもいたのね。あんな中途半端な形でタカヒロくんとも……。」

「今日、昼過ぎにタカヒロも来る。一緒に律子を家まで送ってやる。律子、窓の外を見てみる。俺たちの方をジッと見てるぞあの鴉。」

窓の外から2羽の鴉がこちらを見ていたのだ

「あの子達も再会したんじゃない？この後は何処に行くつもりなのかしら？」

「誰にも分かんねえさ。今を必死に生きて、生き抜いて。先の事なんか考えてねえんだろうな、

だが人間は違う。この先に何かがあるか、何を探しに行くのか、前を向く事が大事だと思う。」

若い俺もそうだった。けど何かを焦りすぎたんだな。今でもその何かが分かんねえんだ。ただ突っ走りすぎた。

……

なあ、律子 ずっと心に引っ掛かってた事があつたんだ俺とユニットを組んだのに出来なかつたろ？

恨んでる？俺の事、」

「恨む？タカを？」

そんな事を気にしていたの？

桜の樹の下で毎日、毎日歌ってたじゃない。

嬉しかったのよ。

本番とか関係ないわよ

私はタカのギターで歌えた事が幸せだった。

優しい音色を奏でる。タカしか出せないタカの音。

貴方の隣でああやって歌えた私は幸せ者。そう思う気持ちは当時のまま 変わらないわ。

今でも思いだすの。 あなたのギターの音、あなたの匂い、・・・そして優しいキスを。

タカを恨んだ事は一度だつてないわ。 本当よ。

ここ何十年とね、 もちろんそんな機会もあつたの。

だけど私は頑なに断り続けてきた。

私はタカ以外の人のギターで歌うつもりはなかったから。

大学やライブハウス、結婚式、ギターは弾いて来たけど歌だけはね。  
「

「・・・まるで鳴き方を忘れたカナリアみたいだな。

律子、俺の願い、聞いてくれないか。

俺の大切なカナリアにもう一度息を吹き込みたい。

チャンスをくれないか？  
お前の伴奏をしたい。

指が動くがどうかわかんねえけど

俺、。  
」

「今度は火を点けないって約束する？」  
横目でチラッと悪戯に  
笑いながら言ってみる

「律子、俺は本気で言ってるんだぜ？」

「冗談よ！」

「・・・そんな事分かってるさ！  
塩化ストロン、  
なんか？  
で  
やっちまうか？

・・・冗談だ。」

「タカありがとう。」

夢 じゃないわよね？」

「くどいぜ！夢じゃねえさ。」

明け方の静かな病院の一室で、律子と隆は初めて未来を語りあった。

律子は隆の横で再び歌う自分を想像する

太陽が昇りきる頃いつのまにか鴉の群れも何処かに飛んでいなくなった。

闇は開けた。

心の中にあつた不安な気持ちも何処かへ飛んだ、そんな気がした律子だった

「律子！リベンジだ。文化祭で歌う事にする。」

「文化祭？」

律子には意味が分からなかったが

ただ、隆の真剣な眼差しに全て預けてみよう。

律子は

「ええ。」

それ以上は何も言わなかった。

律子と隆は今も昔も変わりなく繋がっている。

余計な言葉なんていらないのだ。

眩しい日差しが二人の顔を包んだ

二人は再び顔を寄せ、おでこをつけ、鼻を擦り合わせ、頬を合わせ

る

一秒、一分後の未来をも  
今は二人だけの過去に変えてゆくのだった。



L e t     i t     b e

「りっちゃん！迎えに来たよ！久しぶりだね！」

「タカ！タカヒロくん。久しぶりね！

会いたかったわ！」

タカヒロは嬉しさのあまり律子に抱き着く。

横で見ていた隆は少し驚いた

「大胆だな、タカヒロ、」

「何言ってるんだよ

じいちゃん！すぐく会いたかったんだよ。

そんな時は普通にハグするじゃん！　ね！」

律子に同意を求めるタカヒロ

「そうよ。今の若い子はそうよね！

退屈な入院生活をタカヒロくんのおかげで楽しく過ごせたのよ。

本当に有難う。

あなたがタカのお孫さんだなんて本当に夢のような不思議な出会い  
だと今でも思うわ。」

「有難う・・・だなんてりっちゃん・・・

じいちゃんとりっちゃんはこうしてまた逢える運を持ってたんだよ。

人の気持ちって　真っすぐだと叶うもんなんだね。

僕こそ　なんか有難う。」

なぜかタカヒロは涙を浮かべる。

つられて律子も泣き顔になる。

「さつ　律子　家まで送るよ。」

<Hello Goodbye>まで。」

「なぜ店の名前を？」

「神様のご褒美なんだよ。　りっちゃん！

さっ　行こうよ。」

三人はタクシーに乗り込み律子の店に向かった

入口には娘の佐紀子と孫の美奈がいた

「お帰りなさい　お母さん」

「お帰りなさい　おばあちゃん」

タクシーから荷物を下ろすタカヒロに美奈は声を掛けた

「タカヒロくん 久しぶりね！」

「美奈ちゃん！ウツス！アールグレイとケーキ。今日は僕がね  
っ！」

「うん！」

知り合い、？いつから、？？隆と律子は顔を見合わせる

三人は先に下に下りた

「ようこそ <Hello Goodbye>へ。」律子は右手を  
体の横につけ指の先を丁寧に揃え、隆を招き入れた

「凄いな律子。店を持ってんだな。」隆は感心しながら地下への  
階段をゆっくりと下りる

壁一面に埋まっていたいくつものフライヤーを眺めながら  
ふと立ち止まる

「これは……律子、この写真まだ持ってたのか？」隆と律  
子が写った二人の写真だった

「ええ。大事な大事な写真だもの。タカと初めて、最初で最後の  
写真かしら。」

私の夢が今叶ったわ。

タカ、私はこんな風にあなたを此処に連れてきて　こんな時代もあったわねって笑いながらこの写真を眺める事だった。

店の経営が苦しい時もあった。何度店を畳もうかと思ったことが・・・  
だけど私はいつか・・・今日みたいなこの場面を頭に描いていたのよ。

私の青春時代はタカなしには語れなかった。

タカが大好きで大好き仕方なかった。今もそう。  
いづれ大人になり年老いて、そしたら思い出になる日も来るでしょう？  
だけと思いい出したくない。

そう思い続け・・・  
今日まで来たの。」

隆の目は真っ赤に充血していた。

赤い目で隆は写真の上の額縁にも目をやった

「あのTシャツ・・・あれも置いていたのか？」

「そうよ。あの時のものよ。  
なぜ額縁に入れているかわかる？」

当時の全ての匂いを閉じ込めておきたかった。

私がいづれこの世を去る時に私はその晩に、額からアレを出す。

もし、タカと会えないまま、その日が来てしまっても私はそのTシャツの匂いを嗅ぎあなたを思い、胸に抱きそしてその時に全てにさよならをしよう。・思ってた。

あなたは音楽をずっと続けているだろう。もしかしたら偶然にお店に来てくれるかもしれない。

いろんな思いを抱きながらこんなにも年月が過ぎてしまったわ

ようこそ・・・タカ・・・」鼻の奥がツーンとし、涙を押さえきれない律子だった。

「タカ。ギター弾いて。さ、中に入ってちょうだい。」

「律子・・・悪い。今は入れねえ。」

隆はそう言うのと来た階段を戻り地上に出た。

律子は追いかけてなかった。隆の気持ちが分かったからだ。

律子は口ずさむ 「t h e r e w i l l b e a n s w e r  
L e t i t b e . . . .」

どんなに離れ離れになっても きっとまた逢える

ささやきかける言葉 L e t i t b e

「りっちゃん、紅茶入ったよ。こっちに座っ……あれ、じいちゃん  
は？」

「タカ？また戻ってくるでしょ。さ！紅茶飲みましようか。」

タカヒロは扉の方を見ていた。律子はなんら変わりなかった。

マイセンの器に入れられたオレンジ色の紅茶をタカヒロはゆっくり  
と口に運んだ。

## The Long And Winding Road

自宅に帰り着いた隆は玄関横にある自分の部屋に入った。

背負っていたギターケースを下ろすとケースからGibson's 59 Les paulを出した。

埃がたまったステレオの蓋を開け

ステレオ脇にある小さな三段ボックスの引き出しから白い手袋を取り出し、律子から借りっ放しのアルバムを手を取った。

薄い透明の袋からそつとレコードを出し丁寧に置く。年季の入ったターンテーブルは何年もの間眠っていたのだ。

ダイヤモンド針を手動でレコード盤に置いた

カサ、カサカサ、

耳に優しく纏わり付く音がスピーカー部分から流れる。隆は目を閉じた。

『俺のこの五十年と律子の五十年、同じ思いで来たんだと思っていたが・・・』

まるで違う

歩数が違いすぎるんだ

俺はいつでも真っすぐに来たつもりだった

だが 真っすぐとは言えない

流れに流されていただけじゃないのか？

律子は俺とまた逢えると信じて信念を持って生きてきた  
二人の写真、額縁の中のシャツ　そして店や店の名前全てに律子  
らしい律子の筋が通った生き方をしていた

俺は会えなければそれも運命だと諦めた事もあった  
いったい俺は何をしていたんだ・・・」

「中途半端なまま　アイツの店に入る訳にはいかねえ。」隆は独り  
呟くのだ

時折入るレコードのノイズが昔の風を運んでくる。  
開け放った窓からは湿った空気は追い出されてるはずだった。  
そして色褪せたカーテンが何度も揺れる。

隆はポケットから煙草を取り出す。  
家の角にある古ぼけた自販機で買ったものだった。入院中は禁煙も  
余儀なくされていた隆にとっては  
久しぶりの煙草だった。

セロハンをゆっくり剥がすと箱の端をトントンと叩く。  
一本を取り出し髭ズラの口に咥える

「フー」

隆は煙草を咥えたままギターを抱える。

今更、

隆に楽譜なんかは必要なく、目を閉じれば当時のTAB譜が鮮明に



画像となり現れるのだ。

F , C , F , C7 , C7sus4 , C7 , F , . . . .

指が覚えていた。

イントロ、メロ、サビ全て完璧だった。

「・・・違うな」

ただ隆は納得が行かないでいた。隆はギターを置くと  
啜えたままの煙草を左手の指に持ち、反対の手でカーテンを除け空  
を見上げた。

隆はギターをケースにしまつと再び外に出た。

隆は玄関を出ると、もう何年も乗ってない錆びた自転車を倉庫から  
引っ張り出した。

---

「しかし暑いな。」20分以上自転車を漕ぎやっとたどり着いた。

隆はゆっくりと腰を下ろすと再びケースからギターを出した。

大きな木の下では太陽の暑さからも免れた。

何回も何回も繰り返し弾いてみた。

「チツ、」自分に舌打ちをする隆

「タカ。やっぱり此処に来たのね」

「いつからそこにいた律子？」

「ほんの少し前かしら。」

「いつも、いきなり居なくなるんだから。」

「・・・わりい」

「分かってるわよ。」

練習していたの？タカの音だわ。

聴きたかったのよ。ずっと待っていたわ。横に座っていい？」

「律子、なんか違うんだ。指も一応動くし一通り覚えていたし、  
けどあの時みたいにお前の伴奏するにはなんか違うんだ。」

「違っていて何がイケないの？十代のあなたと今のあなたではハ  
トは同じでもグルーヴが違って当然じゃない。  
同じ晴れでも雲の大きさや形も違う。」

今日と同じ明日はないのよ。

音もそうなんじゃないかしら。

同じメンバーで同じ楽譜で同じ曲をしても そんな時あったじゃない？」

「うーん……」

「そうね……じゃあ、こういう考え方はどうかしら。

花で例えたなら常に同じ美しさを保つ造花と短い命の生の花があるでしょ？

花はいづれ散るから美しい。

咲いてる時が短い事を花自身は分かっているの

だから美しい短い一瞬を精一杯輝いて見せようとするんだと思う。

造花はね、放っておいても変わらない。だけど本物の花は栄養剤をあげたり

水を替えたり手間をかけるわ。だから花もそれに答えるの。

タカ、あなたは今求めている音があるのよね。だけど過去に拘らないで。

変化があるからこそなのよ。タカ。

私もあの時のような声じゃないのよ。今しか出せない、今の私達

のグルーブ感を出せるはずなの。

今の私たちの音を作りましょうよ。

そうそう、タカヒロくんから文化祭の事を聞いたわ。」

「律子、俺と一緒にやってくれるか？」

「当たり前じゃねえか？」 隆の真似をする律子

「なあ律子、今、キスしていいか？」

「あら、了解を得るなんて成長しましたね隆くん！」

「当たり前じゃないですか もう死にかけのジジイですからね？  
勢いすらなくなりやした。」

「ハハハ」

二人はなんにも変わってはいなかった。

隆が抱えていたギターを木に立てかけ律子の方を向いた瞬間

隆の頬を律子は自分の手で挟みこう言った

「時の狭間に置き忘れた物がようやく見つかったわ。  
隆、大好きよ。」

律子からキスをした。

律子はキスをしながら優しく目を閉じる

隆はつつすら目を開けた。律子の目尻の皺は年月の証

律子の目尻の皺を隆は親指で撫でる

そして目にキスを、おでこにキスをし

きつく、きつく律子を抱きしめた。

「来年も、再来年もひぐらしの鳴くこの季節にタカとこうしていたいわ」

律子がそう呟くと隆の腕は一層きつく律子を抱いた。そして隆も律子に言う

「長く、長く曲がりくねった道は振り返るとほんとは単純に真っ直ぐだったりするんだな。

・・・律子、一緒に暮らそうか。  
返事なんかいらねえ。

俺、もう決めちまったから。」

律子は唇の端をキュッと結び小さく頷いた。

I want hold your hand

隆と律子はタカヒロの文化祭のゲストとして出る事となる

二人はあの時と同じように桜の樹の下で毎日のように練習をした。

「律子、高いところ音取りにくいか？ギターでカバーしようか？」

「タカ？忘れちゃったの？」

「ん？」

「俺は弾く、お前は歌う。カバーも何もないだろうってずっと前に？私言われたのよタカに。」

「そんな事、言っただけな？」

「言っただよ。」

「なんか俺、昔は酷い男みたいだな」

「違うわ。それだけいつも本気だったし、あなたは情熱的だったのよ。」

そんなところに 惹かれたのよ。」

「そっか？」少し照れる隆だった

「律子、アンプに繋いでマイク通してやってみねえ？」

「タカ。・・・ありがとう」

二人は仲良く自転車に二人乗りをしながらゆっくりと、ゆっくりとそして、時には押しながら律子の店に向かう。

---

隆がチューニングする間 律子はカウンターに入り、グラスを拭いている

拭いたばかりの照明に照らされた輝いたグラスを律子は手に持ち  
グラス越しにステージの隆を見た。

此処に立ちながら、こんな光景を何回、いや何百回と想像した事だろう。

拭いたグラスを溜息と共に置き、そんな事もずっと繰り返してきたのだ。

何もかもが今の律子には夢のようだった。

拭き終わるとカウンターの椅子に座りなおし 律子は小さいステージの上の隆を今度は肉眼で眺めてみる。

隆は輝いていた。 相変わらず啞え煙草をしながらだが、ご機嫌にギターに触れている

あなたのそのギターを弾く斜めからの角度が堪らなく私のみぞおちあたりをさらってくの。

ギンとして快感の中の不快な違和感が体全体を侵食してゆく。

心の琴線は貴方に刳られ（えぐ）られるように私はいつも倒れそうになった。

カツコイイだとか素敵などという陳腐な言葉では片付けられなかった。

軽くチューニングを終えた後

隆は Jeff beck の > 哀しみの恋人達くを弾いた

泣きのギター。哀愁を帯びた隆の音が律子を呼ぶ

「律子、横に来いよ。」

マイクを通した隆の野太い低い声が店に響いた

隆はギターにマイクを近づけ律子のマイクも大体の高さを合わせた

カウンターからステージ迄のほんの数歩だった

足が震えた ドキドキと鼓動が聞こえるようだった

律子は自分の胸に手を当てトントンと

『落ち着くのよ 律子』

アンプのラインとマイクのラインが交差する、そんな何気ない情景



でさえ今の律子には新鮮だった  
そしてそこに、今、目の前に隆がいる。  
律子は足が竦んでいた。

「お母さん。行ってらっしゃい。お母さんの胸に秘めていた気持ち  
を吐き出すのよ。」

娘の佐紀子に背中を押され、我が店の小さなステージにと 今上が  
ろうとしている。

天井から吊された五つ程の小さなスポットが煌々と舞台を照らした

奥のPAブースには義理の息子が立つ

律子に向かって親指を立てる

みんなが見守っていた。

カウンター、小さな丸テーブルも金曜日だからか、そこそこ人が入  
っていた。

隆が軽くカウントシイントロを弾く。

緊張していた律子の顔が一瞬にこやかになった。

隆が弾いたイントロはTHE SUPREMESの<you ca  
n't hurry love>だったからだ。

その曲は二人が毎日の練習の後に立ち寄った駄菓子屋でかかっ  
たBGMだった。

その店の店主が大好きで駄菓子屋には似つかわしくないウッドタイプの大きなステレオから流れていたものだった。

律子はその曲が大好きになり隆の前でいつも口ずさんでいた。

---

「お前の声ではダメだな。SUPREMESが泣くぜ？律子、お前の声は透明感があつて色で言うなら水色だ。布で言うなら綿だ。」

「何それ？酷くない？水色はまあ、いいわよ。綿って何よ。吸水性はあつて丈夫？？絹みたいにけして上品でないって事かなあー！！」

「お前が大人になってそうだな色は翡翠色、布で言うなら麻だな。それくらいになったら俺がギターで弾いてやるから。そん時に歌えよ。」

「相変わらずだね。なんか気分悪いし！」

「律子さん怒りましたか？」 「当たり前だし！」

---

遠い昔の会話を思い出した。

律子は嬉しかった。

「やっと許しがいただけましたか？隆さん？」

一気に緊張が解けた律子は隆の横の椅子に腰掛け隆に言った。

隆は口元を上げニコっ笑い、再びイントロを弾く

「 I keep waiting  
I keep waiting  
it ain't easy  
But

you can't hurry love  
O, you just have to wait  
N  
私は待ち続ける でも簡単な事じゃない  
恋は焦らないで 待たなくちゃ だめ 「

PAに立っていた息子は佐紀子と顔を見合わせ「お義母さんの歌、初めてかもしれない・・・」と。 呟く。  
律子の声と隆の音がハコの中の空気を変えた

グラスを持つ客たちはグラスを置いた。

年老いた男が勢いに任せ、店のオーナーと即席ユニットを組んだであろ  
うステージだと少なからず何人かの客は思っていた  
若い客に至ってはステージに背を向けながら酒を煽り仲間と他愛も  
ない話に夢中になっていた

しかし、隆の年に似合わない見事な指使い。  
心が音に、音が心に乗った心地いい音色でガンガンと掻き鳴ら

した。

客、いやオーディエンスは一つになっていた。

なんの打ち合わせもないまま律子は歌い続け隆も弾き続ける。二人は時々目を合わす

最後まで完璧に弾き 律子も歌いあげた。

ネクタイを外したサラリーマンや学生たちはノリの良い曲ながら恍惚として聴き入っていたのだ。  
年齢からは想像が出来ないほどの完璧だった二人にオーディエンスは大きな拍手を贈った

「有り難うございました。」隆はそう挨拶をする。  
律子は涙で声が詰まっていた。歌いながら歌詞と待ちつづけた自分がオーバーラップしたのだ。

隆は分かっていた。

律子もまた分かっていた。

敢えて

> HEY JUDE < を歌わなかった事を。

照明が一旦落ちBGMに変わる。

ステージを降りる時、隆の手は律子の手を優しく握りしめていた。

「本日は桜ヶ丘高校にお越しいただきありがとうございます。まもなく舞台にて軽音楽部のステージが始まります。」

「ねね、見た？軽音の壁新聞！」「見たよ。噂ではあのタカヒロ先輩のおじいさんらしいよ。」

「きゃ〜タカヒロ先輩の？なんか素敵だよね！」「ほんと、楽しみっ」

ぞろぞろと体育館に向かう女子たちが騒いでいた。

校門を通り抜けると目の前に大きな桜の木がある。季節は九月。青々とした沢山の葉が人々を出迎える。

石畳の階段を10段ほど下りるとグラウンドに繋がる。グラウンドに繋がる屋根がある渡り廊下には文化祭の出し物の壁新聞が生徒の手によって描かれているのだ。

「軽音楽部」

今年もビートルズでガンガンやります！！是非来てください！！

それは桜の舞う美しい四月だった。

若い男と女は桜の樹の下で音を奏でる。

運命の悪戯に翻弄され やがて二人は離れ離れになる。

共に半生を知らないところで過ごした。

ある時、音楽雑誌が元で二人は再び出会う事となる。神様の悪戯はあまりにも長すぎた。

けれど真っ直ぐに生きてきた二人に神様はご褒美を与えた。

二人が繋がる曲>HEY J U D E<二人にしか出せない二人の音が半世紀ぶりに蘇る。

桜ヶ丘高校にて、本日・・・解禁!!!」

若いタカヒロの精一杯の案内文だった。

他の生徒がぞろぞろ体育館に向かい校舎には人も疎らになりかけた頃、一人の男子生徒が煙草を片手に壁新聞の前に立っていたのだ

音楽室からリハーサルを終え、ギター片手に隆が前を通りかかる。

「おい、お前ここの生徒だろ。煙草はイケないんじゃないか?」

「おっさんに関係あんのかよ。」下から隆を睨み上げる

「ねえよ。だが今日だけは関係あってな。」そう言うと隆はその男子生徒の吸っていた煙草を無理やり奪い自分の口に入れた。

「見つかると退学になるぜ。お前、名前なんて言うんだ?」

「・・・アキヤ。オガワ・・・アキヤ」  
年齢の割に態度がデカくキラキラした目で話し掛ける目の前の男に  
渋々名前を告げる少年。

「ちなみに俺はおっさんじゃねえよ。もうジジイだ。アキヤ、  
お前が見てるその新聞のゲストなんだ。  
これでもな」隆は奪った煙草を啜えながら笑顔で言った。

「俺はさ、アキヤぐれえの年ん時に退学したんだよ。今でも後悔し  
てんな。  
学校なんてつまらねえよな。分かる。したいことねえのか  
音楽はやんねえのか？歌は？」

「中学ん時にちよろつとバンド組んでたけど・・・みんな勉強の方が  
大事みたいで辞めてった・・・」

「そつか。お前は群れでないと活動出来ねえ男なんだな。結局こ  
んなもの学校で吸ってかつこつけてよ。」

「・・・うつせーよ・・・」

「本気で何か一つでもいいからやってみろ。絶対何かが変わるから  
よ。こんなジジイが言うんだぜ。」

信用しな。後で見に来てくれな。アキヤ。」

「・・・気が向いたら・・・見に行つてやるよ。」男子生徒は軽く右  
手を上げた。

数分後 律子が通りかかる



壁新聞にもたれ掛かっている男子生徒をみつけた律子が声を掛ける。

「ねえ、もうすぐステージが始まるわよ。遅れると座るところなくなっちゃうわよ。」

「……」目だけ律子の方を見ると少年はポケットに手を突っ込んだまま下を向いている。

クスッと律子が笑う「なんだよ。人の顔見て笑うかよ普通……」

「ごめんなさいね。なんだか似てるなって。今此処を男性が通ったでしょ？隆って言うのあの人。」

あの人、学生の頃にあなたが似ていたの。どこか尖がってて。私の大好きな人なのよ。」

「夫婦だろ？」

「違うわよ。恋人どおしってとこかしら？この年でも恋はするわ。」

「新聞に書いてる事って実話？」生徒が聞く

「ええ、そうよ。長かったわ。今日まで。……50年って……長いわよ……」

ね、君。君の目はキラキラしてる大丈夫よ。焦らないで。今を大切に過ごして。」

きつと思いつきになる時が来るから。真っ直ぐに歩いてくのよ。」

人生なんて振り向くとあつと言う間。だけど歩いている時は辛く長いよね。」

半世紀ぶりに今日歌うの。大きなあの場所で。私は一日、一日を大切にしているわ。」

だから君もね。」

「後で・・・気が向いたら行くよ・・・」

「ダメよ。さ、行きましょ！」律子は強引に男子生徒、アキヤを体育館へ連れて行く。

「まじ・・・かよ」「アキヤは呟く

学生服の男子生徒の手を握りながら律子は50年前へと心を戻してゆく。

入口で律子はばったり会う

「りっちゃん！久しぶり！」

「あーリペアマン！」「おいおいりっちゃんまでその呼び方はないだろ？」

「アハハ。下さん いつも美奈がお世話になってます」「丁寧にお辞儀をした。

「タカヒロくんから招待受けたんだ。まっ俺が呼んでくれって言っただけだな」

「タカヒロくん知ってるの？」

「そうなんだよ。俺の店に寄ってくれたんだよ。隆の孫だなんてな・・・今日は楽しみだよ。りっちゃん。出るんだってな。

良かったな。ほんと良かったよ。俺、今から心がやばいよ。」

「下さんとは長い付き合いだけだね。ほんと隆とまたこうして会える事、そしてこんな風にまたあの人のギターで・・・。私も今から

危ないわ。」

「りっちゃん、これプレゼントだよ」「なに？」

紙袋に入れられたものをゆっくりと出してみた。

「こ・れ・」律子は言葉を失った。

「俺と美奈ちゃん、タカヒロくんからの・・・それと河本から」

「河もんって・・・もう・・・」

「うん、あいつも生きてたらきつと俺も一緒にさしてくれって言っ  
はずだから。あいつが病気になる前は

会ったびに隆とりっちゃんのことを話題にしてな、気にかけてたよ。

今日はこれ着てくれるか？」

「・・・ありがとう。タカにも渡すわ」そして目を閉じて心の中の  
河本にも呟いた

『河もん。ありがとう』と。

袋から出したものは

黒のTシャツに<sgt・pepper's lonely heart club Band>と印刷されたオリジナルTシャツだ  
った。

タカヒロ達の今回のテーマでもあり 軽音部のメンバーが着ている  
物と同じだった。

同じものに身を包む。これだけの単純な行為が不思議と一体感を生  
むのだ。

タカヒロは隆の話聞いた時から自分達もそうしよう決めていたのだった。

三年最後の文化祭、そして未完成のままの律子と隆のパズルを完成させる事が目的でもあった。

会場の照明が落ちた。暗幕、スポット、体育館。あの時と同じだ。

端っここのピースから今、ゆっくりと埋めてゆく。

「s g t . p e p p e r ' s l o n e l y H e a r t c l u  
b B a n d」のイントロが会場に流れる

「一緒に楽しもーぜい!!!」ボーカルの呼びかけに会場の皆が一斉に反応した。

## Hey Jude

「きゃ〜タカヒロせんぱーい！こっち向いて〜！」  
タカヒロの気ぶりはすごいものだった。

「タカヒロくんすごいな！」「ほんとね！タカヒロくんはルックスも抜群な上にギター抱えた姿も格好いいもの！」

律子の孫と下野が話す

タカヒロ達は汗を飛び散らせながらステージいっぱいを使いオーデイエンスを煽る。

座っている生徒はどんどん立ち上がり女子に至っては前に詰めより、ライブハウス並みにステージ前は溢れる

舞台袖にスタンバイしてる隆は

「あいつら、格好いいな。本気だ。会場がほんの数分で一つになつてやがるぜ。」

あー俺も、もう一回・・・戻りてえな。ガンガンと掻き鳴らして気持ちいいだろうよ」

顎に手をやり髭を触りながら独り言を言っている。

そんな隆の様子を律子は見つめ、隆にこう告げた

「また、やれば？・・・河もんはもういないけど、下野くんもいるし、後のメンバーも連絡取ればいいのよ。」

「今さらか？やってくれるだろうか？」

「わかんないわよ。だから自分から動けばいいんじゃない？長い間、それぞれがそれぞれにいろんな道を来たと思う。諦めていた事も沢

山あるだろうし。

タカ、今ここに私達が同じTシャツを着て舞台袖にいる。こんな事は奇跡よ？再会出来ただけでも幸せ、それで十分だったのに。人間って欲の塊だわ。次々に求めるものなのよ。

タカと暮らせる。そんな夢みたいな事も目の前にある。

やりたい事をしたらいいのよ。やりましようよ。すごく楽しいかもね？」

律子の言葉に隆は真剣に耳を傾けた。

そして隆は律子に拳を突きつけた。「成功させようぜ。律子。お前の伴奏、心を込めてやらせてもらおうよ」

律子は隆に拳をつけた

「ええ。」律子の、律子らしい笑顔で頷いた。

「ではここでゲストを紹介します！！山村 隆さん、広沢律子さん。どうぞ！！」

隆はスタスタと先に歩く

マイクにすら近寄らず無表情で舞台中央の椅子に腰かける。

律子は軽く会釈をしながら椅子に向かい、静かに座った。

隆の無表情な顔は 甲高い黄色い声や手拍子なんか必要ないと言わんばかりの雰囲気させたのだ。

静まり返る会場、再び落ちる照明。

スポットが丸く二人を包んだ。背景にはタカヒロが美術部に頼んでおいた大きな木がシルエツトのように黒く浮かび上がった。

Hey jude , dont make it bad  
Take a sad song and make it better  
Remember to let her into your heart  
Then you can start to make it better  
律子の歌いだしから始まった

隆の優しい音が律子の声を上手く拾い調和する

17歳の律子の声と67歳の律子の声をちゃんと考え、隆は今の音を探求してきた。

全てを取り戻したい。あの時のようにしたい。そう思う気持ちは何度も空回りをした。

だが律子に言われ気付いたのだった。

『過去に拘らないで 今の私達の音を作りましょう』

年齢と共に部分、部分がハスキーになりつつある律子の声をカバーではなく生かす術はないのかと。

隆は分かっていた

どんなに練習をしようが合わせようが技術の面だけではライブとい

う空気には勝てないと言うことも。  
全ては本番だけが物を言うのだ。

律子もまた分かっていた

先日の隆の伴奏で50年ぶりに歌ったにも関わらず、すんなり歌い上げたと言う事。

隆を愛し、隆のギターを愛し、そして信じ、安心していた自分。

貴方だから成功した。だから今日もそう。貴方だから成功をすると。

心が繋がると言う事とはそういう事なのだ。

合図もいらなければ言葉も必要ない。

静かに聴いている学生達は皆舞台に吸い込まれている。微動だにしないのだ。

歌い終わり律子は立つ。丁寧にお辞儀をした律子の肩が震えだした。律子は下を向きながら泣いていた。

隆は律子の涙が見えた。「律子。良かったよ。さあ、顔上げな。

聴いてくれた人たちの顔をきちんと見なきゃダメだ。」と小声で伝えた。

隆も立ち上がる。正面を見据え会場を見渡し深々とお辞儀をした。

その時、律子の肩にヒラヒラと何かが落ちてきた。律子が肩に手をやりそつと掴んだ

ピンク色の折り紙が丁寧に花びらの形に切られている紙だった。

ヒラヒラ・・・上を見上げた。緑や黄色、銀色の小さな紙が沢山舞い



降りてきた。

隆も驚き自分の髪についた紙を取る。銀色の丸い紙だった。

ヒラヒラ ヒラヒラ どんどん降って来る。

いろんな色の紙が舞台の二人の元に舞い降りる。

四月の桜、新緑の緑、落ち葉の黄色、そして雪。タカヒロの案だった。

春夏秋冬いろんな季節が流れ、繰り返された50年。二人の思い出の桜の樹の下。

どんなに時が経とうが関係なかった。

あの日の二人の消えそうな願いが今こうして実現された。

仮想空間の花びら、落ち葉、雪が舞う下、隆と律子の時間はもう一度だけ、止まった。

Then you can start to  
make it better...

その時、全てがいい方向に向かい始めるのさ...

舞台を降りた隆は真っ暗な裏口の扉の前で律子をギュッと抱きしめた。

「律子、ありがとう。」

それから・・・済まなかった。高校最後の大事な舞台に俺は・・・

この前、律子の店でこの歌をしなかったのは分かるだろ？

時代は流れちまった。けど、この広い会場の中でライブハウスではないこの場所で緊張感に包まれ

沢山の生徒達の前で歌うと言う事をあの時のように感じて見たかったし、感じて欲しかった。

・・・17歳の時に忘れてきたものを取りに来たかった。」

隆は律子を抱きしめたまま律子の髪越しの耳元に唇を押し当てるように話した。

「タカの考えてる事はなんでも分かる。・・・あの時の気持ちが出たわ。ほんとよ。」

たった一回限りの本番でしか出せない私達のグルーヴが出せたと思う。思うじゃないわね。」

出せた。ありがとうタカ」隆の胸元に顔を埋めながら律子は言った。

舞台脇の重めのドアを開け、隆と律子は体育館外へ出た。

2人の曲から自然に流れるようにタカヒロのバンドは<I n M y

L i f e >へと曲を移す

二人を待つていたかの様に一人の少年が近付く。

アキヤだった。

「良かったよ。すごく。」アキヤはズボンのポケットから煙草の箱を取り出すと箱ごと隆に手渡した。

「俺もまた・・・やってみようかなって・・・」

いろんなライブや路上を俺は見てきた。けど、こんな空気感初めてだった。正直、じいさん達に何が出来んだ？って思ってた。

・・・年齢とか関係ないね。」

「そうさ。ここさ。」隆は自分の胸に親指を突き立て叩く。

「うん。俺の耳を通り抜けて心臓に刺さった。上手く言えないけど、そんな感じがした。」

あ、それから・・・2人はお似合いだよ。」アキヤは初めて笑顔で話す。

「あたりめえじゃねえか。俺の大事な女だ。愛してるんだ。」隆は照れもせず真剣な眼差しでアキヤに告げた。

横で聞いていた律子は隆の小指だけを握ってみる。

「アキヤ。ライブに出るようになったら知らせてくれな。」  
「うん。約束するよ。・・で、おっさんもライブやる時教えてくれよな！見に行つてやるよ。」

二人は握手を交わし約束をした。

「ね、タカ。今から行きたい所があるの。」

2人が向かった先は学校帰りによく寄った駄菓子屋だった。

「まさかとは思ったけど、まだやってるのね。」「周りの風景が変わるうともここだけは変わんねえんだな」

季節はずれの浮き輪、出しっぱなしの簾、〈氷〉ののぼり。

ただ、中に入ればお菓子の並べられた木の台もステンレス製になり、袋入りのスナック菓子も幅を占め

年月を感じさせた。

「歳月流るる如し・・だな」ポツリと隆が言う

隆はあるものに目が行った。

おそらくこの店では年中出しっぱなしであろう麦わら帽子を手に取り  
つてみる。

二つを手にし、一つは自分に、そしてもう一つは律子に被せて見た。

「可愛いぜ。律子。これ買おう。」

「お揃いのもの、初めてね。嬉しいわ」

残暑が厳しい夏の終わり。

思い出の桜の樹の下まで歩く二人。お揃いの麦わら帽子はほどよく光を遮るのだ。

西日の眩しさに律子は下を向く。

「眩しいか？この帽子は鍔が大きいから下を向かなくても大丈夫だぜ律子。」律子を覗き込む。律子は涙を流していた。

「・・・ほんと泣き虫になったな。」隆はそう言つと律子の帽子の鍔を少し目深に被せ直し

西日に光る律子の口にそつと口づけをした。

親指、人差し指、中指と5本の指を絡めて手を繋ぐ。

どんとどんと、そして真つ直ぐに歩く。無言のまま、ただひたすらに。

寄り添う二人の伸びた影だけは

あの時から何にも変わらない。

「大好きよ タカ」

「俺もだ。律子」

そして、これから先も

変わらない。

「ねえ、タカ！こっちの方が風が気持ちいいよ  
ここにシート敷かない？」

「そうだな。りっちゃん今日はどんな弁当？おにぎり？卵焼きは砂糖にしてくれた？」

「したわよ」

だからさ りっちゃんって呼ばないでよ  
タカだけよそんな呼び方  
みんな リコって呼ぶのになんかおばさんみたい

「二人も子供いておばさんじゃん」

「ひどーい」

理奈子は子供のようによねた

「わーん」

「正樹！また美桜をいじめたでしょ！」

「ちげーよ！」 「正樹も、直に三年生なんだからいつまでも妹をいじめてたらダメじゃない！」

「パパー あのね、ミオがね、あのお花が綺麗だからね、近くでみたい！っていったの  
そしたらね、おにいちゃんだけ木に登ってった。  
ミオも登りたいって いたらねミオのぼうしを取ってね  
高いところにのつけた。」

「正樹！！」

男は女に優しくするものよ

「ハハハ。」

男はこれぐらい悪じやなきやダメだよな？」

「あたりめーじゃん！」  
男同士顔を見合わす

娘の帽子を取りそつと娘に被せるタカヒロ

「ありがとパパ！」

「おい ミオ 次あっちいくぞ！」 「まってーおにいち  
やん！」

「あそこにお墓が見えるね」理奈子がタカヒロに言った

「そう・・・」

この場所は僕のじいさんと大切な人の眠る場所なんだ」

タカヒロは小高い丘の上からそこを見下ろしそう告げた

程好い風を受けながら理奈子は呟くように言う

「素敵な場所よね」

「あいつらが結婚してさ、孫が出来た頃 俺らはどうしてるかなあ

」

「そうね。 長生きしたいわね」

「俺らは一緒に墓に入ろうな。」

「俺らは？・・・当たり前じゃない？夫婦なんだから。」

「夫婦だからって同じ墓に入るとは限らないよ  
人生は長いんだ。先は誰にもわからないさ」



「ふうん・・・」

そうかも知れないね。

でも私はあなたとずっと一緒にいるわ。」

「ね？理奈子。」

「ん？何？」

「もしさ、俺達が神様の悪戯でさ・・・」

「うんうん！ おっかしいタカ！

悪戯って子供みたい」

「真面目に聞けよー」

「ごめん！ ごめん！」

「もし今 神様の悪戯で俺達が離れ離れになったとしたらどうする？」

「やだ〜 悲しい仮説ね。」

もちろん探しに行くわ。毎日毎日歩き回ってもあなたを探す

神様は悪戯で私達を出会わせた  
だからまた悪戯で離してみたの。

ふざけるなーっ！！と思ってあなたが探し続ける。  
大好きになった人だもの「もう一度、逢いたかった」って

そう言うの。  
そして、腕が痛くなるくらい抱きしめて貰おう。  
そんな日を信じて歩きつづけるわね」

「タカ　大好きよ」  
「俺もだ　りっちゃん」

桜の花びらが風に舞い  
小高い丘は一面桜に埋まった。

振り返れば　思い出される場所がある  
すっかり変わってしまったはずなのに　今でも思い出したくない場  
所もある

無くなった場所もあれば　残っている場所もある  
そんな場所は　恋人や友人のことを　今でもはつきりと思い出させる  
死んだ人　まだ生きている人  
今でもみんな　愛しい人ばかり

そんな恋人や友人の中でも

あなたは特別だった　色褪せないあなたを思い出す時  
他の記憶は　虚しいばかり  
過ぎ去った人や思い出は  
いつまでも　愛しいだろう

でも、私の人生であなた以上に愛しい人はいない  
これからも　静かに思い出すだろう

私の人生であなた以上に愛しい人はいない

In My Life I Love you more...。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

大好きなビートルズをふんだんに入れさせていただきました。

後半のタイトルに使う事は後半で決めました。

頭の中で音楽と本文が融合すれば素敵だなと思いました。

回想部分を書くにあたり、誰が回想すれば馴染むんだろうと悩みました。

それによって流れも変わりそうな気がしました。

結局、語り手がバラバラになりましたが、きっとこれが私の書く私の形なんだろうと

自分で納得しました。

人は生きていく中で いろんな出会いがあります。楽しい事や嫌な事含め、

出会わなければ良かったなどという出会いはほんとは無いものと私は信じたいです。

音楽好きの律子が軽音楽を作り、そこで隆と会う。

音楽を封印したはずの隆はタカヒロや再会した律子によって変わる。人間嫌いの隆が心を開いていく。

若い看護師もまた隆によって変わる。最後に登場したアキヤも隆と律子の真剣な熱い演奏によって心が動く。

出会って最高じゃないですか。

あなたの中にもう一度、逢いたって人はいますか？

私はいます。

隆の場合置き忘れたものは<後悔>の二文字でした。

一方、律子は きつとまた逢えるという<希望>でした。

そんなすれ違いなまま時間が流れました。

もう一度、逢いませんか？

あなたと、誰かの人生。置き忘れたものを探しに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5400s/>

---

もう一度、逢いたくて ~50年目の奇跡~

2011年7月24日07時51分発行